

明治三十一年六月十七日發行

(非賣品)

北辰會雜誌

第拾六號

第四高等學校北辰會

北辰會雜誌第拾六號目次

論說

先天知識の有無を論ず(完)

講師 西田幾多郎

史海指針(前號の續)
現代と漢學(未完)

教授 浦井鏗一郎
高橋 亨

雜錄

經濟なる茶の代用品に就て

教授 市村 塘

無品親王服色考(完)

教授 高橋 富兄

草庵陳言

特愚 袋川

文苑

尋花

草の舎主人

觀兼六園櫻花作歌并反歌

松下 雅雄

短歌數首

今樣數首

文 樵 人

若菜摘(新体詩)
海城(同)

花 曙 山人
淡 翠 迂 人

俳句十數首

祭穀堂鷺津先生文

教授 村上 函 峯

吊硯池

藤 紫 溟

漢詩數首

講師 荅 湖 漁 史

同

香陽、狂骨、臞禪、

批評

北辰會第十五號誌概評

涓 滄 浪

雜報

行軍記事。ポートルス記。初見の辭。初夏野色。故有栖川大將宮殿下の御肖像。松田講師の病狀。終刊の辭。本校紀念日。第二高校との競漕中止。外數十件

附錄

行軍中の獲物

島 播 定 保

七國の春の旅(未完)

總持寺の一夜

豊 泉 生

北辰會雜誌第拾六號

論 說

先天知識の有無を論ず (承前)

講師 西田幾多郎

先天知識之特質

余ハ之より先天知識の特点を擧げ、之か他の知識と性質に於て異なるを示し、且つ其れ經驗より導き來る能はざる所以を證せんとして。

(一) Independency. 前にも云へる如く、凡そ先天知識と稱する者ハ、感覺と同しく、直接ハ感覺より感受作用に由て來る者にあらず、即ち決して外物の刺激に由て生ずる感覺、又ハ体形の變化にて之を知り得るものにあらず、感覺より來る者と、唯知識の材料のみにして、先天知識とは、之と總合する知識の形式なり、故ハ先天知識との感覺より全く獨立なる者なり、例之へば、吾人は同一の空間に於て、無數の感覺を感じうへ之、眼より來る者も、耳より來る者も、皮より來る者も、皆同一の空間に於て結合し得るあり、生來盲目の人、俄に視力を得て新に色感を得るも、之が爲め空間の増加するのみとなし、又同一ハ空間に於て同種の異感覺(青、赤、黒、等)の如し)ハ前後ハ感得るあり、此の事ハ、時間に於ても同一あり、又因果ハ於ても、其の本なる能力(Kraft)ハいかに種々の形にて吾人を感動するも其感覺ハ凡て同一の力ハ總合し得るあり、又同一の感覺にて感ずる種々の感覺を

も同一の力に總合を得るなり、其他の Being, Substance, Categories に於ても之と異なることある、故に先天知識との、感覺より全く獨立せること猶ほ清かある水面と之に映する物影の如し、乃ち先天知識とい、直接に感覺とを來さず、從て本體の特殊なる一屬性にあらざることを知るへし。

(二) Antecedency 前論に由て先天知識の直接に感覺より來さることは明なりと雖も、是を感覺の關係より間接に來る者にあらざるかきを得んや、是れ往々心理學者に主張する所あらん、然れども、元來感覺の關係と云ふは、既し已に先天知識を預定せるにあらずや、感覺の關係とは、先天知識の總合を待て始めて成立する者なり、先天知識は總合おければ、感覺は互に關係を有すること能はざるあり、例之べ、前後の關係は必き、時間と預定し、上下左右の關係は必き空間を假定し、又斯くおきば斯くなるといふは、即ち因果の關係なり、前例に就て之を云ふも、吾人が種々れ感覺を同一空間に結合するは、固より此等の感覺か或る關係を有すればあるべし、然れども、此の關係と云ふは、已に空間の上の關係なり、故に空間の關係より來るにあらず、其の關係は空間より來るあり、又種々の感覺を同一に力に歸するも、既に已に因果法を假定するものなり、夫れ已に先天の知識は總合おければ、感覺の關係おければ、知識をおすこと能はず、先天知識の實に知識の欠くべからざる基本あり。

是故に先天知識とは、單に總合より由て抽象せる通想又は通意とあらず、大に誤れり、固より先天知識も之を知るは、總合に由らざるべからず、否甚だ多くの總合を要すと雖も、其の實在は遠く知識成立の當時に存せり、知識は實に此の總合より由て生せんなり、時間及び空間の概念の如き、之を知るは野蠻小兒など能くする所にあらずと雖も、野蠻も小兒も、苟も外界及び内界の知識を得たる時、已に此の二者を結合に由て成れる知識を有せり、故に長短、大小、前後、左右等の考と、空間及時間の考など遠き以前に已之を有せり、是已に此等の形式を用ひざる證なり、因果法の如きも、之を知るは知識發達の後と雖も、吾人が嘗て火は物を焼く、水の物を浸すと云へる時、已に此の法則に由て總合せるもれなり、故に苟も物質現象を理會するものは、必らず此の因果法を預定せざるべからず、動物も稍高等なる者と此の法に従ふて判斷するなど、又均一法 (Law of Identity) の如きも、決して $A=A$, $B=B$, $O=O$ と云ふより抽象し始めて生ぜざるもれにあらず、 $A=A$, $B=B$, $O=O$ と云へる時、已に均一法より由て斷定せるあり、故に初生の小兒已に光を見て笑ふは、光を光とする均一法に由れる者あり、斯の如く先天知識は其の抽象的考慮又は意想は先づて存せり、其の先づと云ひ、存すと云ふ作用の上は就て、之を云ふあり、之を知る上は就て云ふにあらざる。

先天知識が普遍なりと云ふも、其の義正に此にあり、反對論者は之を知る上に解し、野蠻小兒は之を有せずと云ふも、作用の上は於て之を云へば、苟も知識を有する者、皆之を用ふることを、大人も小兒も賢者も愚者も寸毫の差異あることあり、此の普遍性を用の上は就て云ふは、余の臆説にあらざる、エヌ、ポルター氏人智論の直覺識篇に見ゆる所あり。

(三) Originality 先天知識の感覺より導く能とざるのみならず、各自互に傳導する能とす、各根原的あり、例へば論理的秩序よりて空間、時間、因果を導く能はず、又空間等より、論理的序法を引出する能はずと云ふこと明かり、又因果より空間を導く能はず、空間をて因果を導く能はず、又

因果より時間を導く能とせず、何んとかきば、因果は時間の連續を預定すればなり、又空間より時間を導く能はず、何んとかければ、空間は連續と云ふことなし、然れども、稍曖昧するは、時間の連續より空間を導き得る如き傾向あることは是れなり、吾人は連續に於ける感覺の一定順序よりして、空間の共在を導出得る如く考ふかり、然れども更に深く之を考ふるときは、是は固より空間の共在を知るの引きとなるべし、之より本原的に空間の共在を引出すこと能とざるあり、且つ空間に固有ある特質例之をば立体の如きと如何にして單に時間の連續に於ける一定の秩序より導出するや、是に由て之を觀れば、時間より空間を導く能はざるや、燦とて火を曙るか如くん、又時間の連續に於て一定の結合を有するより、因果を導くんとする人かきにあらず、然れども、時間の一定の結合よりして因果は根本たる能力、働等考を導くことと到底能はざる所なり、是れ嘗てヒューム氏が明か證明せる所なり、故に氏は如く之を導く能はざるが故と、因果と一の幻影となす、將たカントは如く是れ故に獨立のカテゴリー一情況ありと考へずと論せず、兎も角も時間上の不變連續より因果を導く能はざることを明したるん、斯の如く先天の知識即ち情況の互に相獨立せる者なるを以て空間の關係は、必ず空間を假定し、因果は關係は又必ず因果を預定す、嘗に感覺を導く能はざるのみならず、又他の情況より導くことも能はざるあり。

四、Intuitiveness 先天知識と知識は基本的要素あり、例之へば、時間、空間、及び因果と物質界を知るの必須の條件たり、然り而して、又互に獨立し、相導くこと能とせず、故に先天知識は各自特有ある基本公理を有せり、此等の公理の指示すべからず、誰人も直覺的に之を知るの外なきあり、之に向て「何を以て」なる問を發する能はず、又之を疑ふ能はざるなり、唯之を了受するか、或は之を理會せざるかの外なきこと能とせず、ハップフィールド曰く、"They are propositions so clear that they can neither be proved nor attacked by any propositions more clear than themselves" と是れ大に他の引出知識と異なる所なり。

然るも人或は先天知識を直覺的となすを難じて、所謂先天知識ある者も、一見容易く之を知る能とせず、又其の公理に關しても、往々異論ありと云ふ、然れども、余の直覺と云ふと、感覺にて物を直覺する如く容易なりと云ふの意にあらず、唯其の明瞭なる性質上、他より之を證明する能はず、其の證明は已も自身に之を有し、人々之を自得するの外なきと云ふのみ、其の之を發見するの難易如何の如きは、論ずる所にあらずるあり。

五、Necessity 直覺に知るの外證明する能はざる者と、先天知識の外感覺の如きも然り、然れども、先天知識が、知識の先天の狀として、特有する一性質あり、即ち必須ネセシティー是れかど、是の性質は特にライブニッツ氏以來先天知識の特徵として、稱道する所に在り、明に知識の形式と知識の材料とを區別すべき標準あり、單に感覺をとり入り、經驗をとり來る者と、如何に確實よりして如何に親見する事實なりと雖も、必須と云ふこと能はず、之に反し三角の二邊等しければ、其の對角亦等しと云ふ如きは必須あり、吾人は斯く考へざるべからざるなり、經驗は吾人に斯くあると云ふことを教ふれども、斯くあらざるべからずと云ふことを教へざるなり。

然るに經驗學派の人の、此の必須ある特質を志想の聯想とりの習慣として説明せんとせり、即ち

常に親見する事實ハ、聯想の法則に由て結合志、遂に動すべからざる一の習慣となり、必須の如き感情を生ずと云ふあり、然れども、余の所謂必須といハ、習慣は必須にあらず、論理的必須の謂也、論理的必須と習慣の必須とは度は差にあらずして、種類は差ありと思ふ、太陽と毎日東より西に入る、決して論理的必須を生ずることなき、又之を拒むも、決して論理的矛盾となることなし、然るは先天知識の必須ハ、大小之と異リ、之を拒先ば、直ニ矛盾コントラディクションニ陥るなり、若し論者の云ふ如く、論理的必須も單に習慣より來れる者なりといへば、必らず論理的必須も習慣の多少に従ふて、度なかるべからず、然るに先天知識乃論理的必須ハ、孰れも同一の必須にして、寸毫の度あり、或は不容間位法と緊急ある必須を有せずとなく、其例として、余に汝ハ黒奴否とや否かと問ふもれば、余は然りとも否とも答ふる能はず、と云ふ人あれども是を恐く、不容間位法を解せざるものゝあはざるか、吾人をして決して、反對と逆を混同すべからず、暖の反對ハ寒なり、然れども其の逆は不暖なり、而して其の中に中間の程より温度も含有す、故に此水は暖かりや、將に冷なりやと云ふ時ハ、明に其の中間の者あり、然れども、暖かりや、又之不暖なりやといへば、其の一に歸せざるべからず、決して中間のものあるよしとなく、余は若し人の余を黒奴かと問ふ者あれば、直に否と答ふるを憚らざるべし、又習慣必須と論理的必須と同一なるとさハ、吾人が常に親見する事實は、幾分か論理的必須の如き者を有せざるべからず、然るに實際に於て吾人は最も親見したる事實を拒むも、新奇なる事實を拒むも怪訝とする(例へば太陽西より上ると云へば怪訝するも逆逆に陥ることなし)否との差あるも、論理的矛盾を生ぜざること、少しも異なる所なく、是明に論理的必須と習

慣の必須と種類に於て異なるの證なり、然るにミル氏の、其の論理學二卷第五章に於て、昔日の考ふべからざるしよとも、今日考ふべきこととなりたりと説き、コペルニクス等以前ハ、吾人の反對に立つ對蹠者ありと云ふと、矛盾なりとも、今は理の當然となれり、と云へば、然れども、余ハ、思ふに古人の對蹠者を許す能はざりしハ、反對は立つと云ふこと其自身を考ふ能はざりしおあらず、是のことが、他乃定かある事實と矛盾したれば、然るに今此の事實なき、故に其の矛盾もかくありしこと、毫も怪む不足るものなき、又或る人と進化の法を用ひ、先天知識といハ、祖先來に經驗に於て習慣の上に習慣を重ねたるものあれば、一種異様な強た必須を感じる如くなれり、と、説明するも、若し果して然らば、所謂論理的必須と習慣の必須との間に必須の次第的階級あるべき理あり、或る知識のみ、格段に進みたりと云ふは、奇異なることなり、然るは實際は此れ二者は問は、大なる間隙あり、幾分か論理的必須を有し、幾分習慣の必須を有すと云ふ如く者あり。

余が所謂先天知識と稱するものハ、盡く此の論理的必須を有するものなき、論理の法則の如き、誰も其の必須を疑ふものなかるべし、然れども、或る人も、數學の必須を單に逆の則に歸し、數學の命題ハ、凡て、均同的命題なりと云ふ人あり、例之へば「 $n+1$ 」と云ふは「 $n+1$ 」を「 n 」と名けたるあり、故に「 $n+1$ 」は均同的命題なりと、余思ふに、然らず、亦「 $n+1$ 」を均同的命題となすも、然らば「 $5+3$ 」「 $3+4$ 」は、又何故に「 7 」なりや、吾人ハ「 $6+1$ 」「 $5+2$ 」「 $4+3$ 」「 7 」と云ひ得るは、決して均同的命題として説明する能はず、カントの云へる如く、明は中流命題あり、又直線は兩点間の最も距離は短き線なりと云ふも一の組成命題あり、故に余は數學にも、固有の必須ありと思ふ、又因

果法不於ても、凡そ變化の原因を有せ、力は不滅あり等と云ふは、皆總合に屬する必須の命題あり。或人の時間の連続の定まりたる結合よりして、因果の必須を一の習慣とせし、説明せんとすまごも、余思ふ所の如く定まりたる結合より來る習慣と云ふは、既に已に因果の必須を假定するにあらざるや、何とあれば、習慣と云ふは、已に一の因果あり、定まりたる結合ある一原因は、必ず習慣なる一結果を生ず、故に習慣を生ずるを、是より由て之を觀れば、習慣より因果の必須を説明せんとするは、*Circulus in defendo* たるなきを得んや。

(六) *Anticipation* 先天知識と凡て、必須あり、故に之より導きたる知識は、經驗より導かずして、議論し得るなり、未だ生ぜざる事實も確實に預知しうるなり、此世紀は始末、かれレヴェリールがアダムスの實際以前に數學の計算上海王星を發見したるが如き事實の著明なる者あり、又吾人々二直線を決めて一空間を包容する能はずと云ふが如きも、誰も無限まで直線を延べたる者なきも、斯く斷言し得るなり、ミル氏は、之を吾人の想像にて推察せるなりと云へども、元來想像とせしめて無限のおとを心中に想像する能はざるあり。

是の故に先天知識に各自に皆經驗を離れて、*A priori surer* ある學科あり、論理學、心理學、力學はなき、或人の内面的考察の學問の、不確實なりと云へども、此の三學科より確實なる者あり。

(完結)

史海指鍼 其二

浦井 鏗 一 郎

前述のヘロドタスに續きて何人も必ず一讀すべき希臘史ハ阿典人スキデスに著して去て蓋去古今の歴史中最上乘の者あり此人は阿典有名の政治家キモンの遠孫にして四七一年を以て生る其家はタソス對岸なるスレースの金鑛を所有し頗る殷富ありまかばスキデスの教育に於てハ毫も間然すべき所無かりといふ彼の自ら記す所に依れば彼は彼のペロポネサス戦争の始め阿典に流行せる疫病に襲ふ所となり萬死の内ハ一生を得たり死とぞ余輩之彼が其歴史に於て顯せるが如き達辨を以て阿典の「ベマ」に於て公衆を向ひ演説せしや否やを知らずと雖も頗る國人に用ひらるしと見ゆ四二四年には七隻の阿典艦隊に將としてタソス島に在り會まアムフヒポリスの市はスバルタの將ブラシダスに圍まれ事急なりしかバ守將ユークルス人を馳せてスキデスの來援を請はしむブラシダスの之を知り好言アムフヒポリスに説くを和を以てし充分の讓與を約せアムフヒポリス之に隨ひスキデス來援ふの日既ハスバルタに降り此市や阿典に爲先には極めて有力なる同盟者なるを以て阿典人に憤禁すべからず罪をスキデスに遅延し歸し擬するに嚴刑を以てせむとスキデス之を聞きて直に出奔し其之く所を知らず其際彼果して何れ地ハ潜伏せしやは史上の一問題にして明證なしと雖も恐らくハペロポネサスに居り又シ、ライ島にも多少の間住せしからむと云ふ何となれば彼の歴史に於てペロポネサスを叙するものと詳にして又シラキニス附近の叙事の如きは到底實地の經歷者に非ざれば能はざるべしとなすスキデス自身に言によれば彼は二十一年間亡命人なりきといへば恰もペロポネサス戦争の終りて後阿典に歸りし事を見ゆ歴史の彼が

四百二年に死せしむと及び其死の變死なりしこと就ては一致すれども、阿典に於ての事にや或の
スレース地方に於てかまじかり知る能はず又彼の不朽なるべき歴史は何年頃かなりしやも知る能
はず而して其歴史は最後の卷なる第八卷は之を前七卷に比するに叙事及び行文に於て非常の徑庭
異なるを以て是もスキデスの手に出でずして彼の娘か父の遺稿に依りて編めるかむといへり元
と此書は一年を以て一卷宛てたる者にて今日世に傳り居る如く卷章を分ちしハアレキサンドリ
ア時代の學者れ手不出しからむといふ兎も角此歴史と其文簡潔其論公平實に歴史文學最良標
本として不朽の寶典ありとす

今スキデスを以てヘロドダスと比較するにヘロドダスの嚴密は決して科學的歴史家とい
ふを得ざれどもスキデスは純粹の科學歴史的家なまて叙事正確議論公平今日の史學研究の隆
盛を以てして猶且つ一誤謬を發見せられざるあらず蓋し彼の大歴史家以上の人物にして寧ろ大哲
學者といふべきされば其歴史は恰も鬼神の手に成れるが如く其映じ出す所之盡々活動し讀者を以
て現場に臨みて希有の大演劇を観るの如く感あらむ彼が寫せるペリクリス時代は於ける雅丁の
狀況の如き明瞭なる映象の他其比を見ず此時代は實に雅丁否希臘の黃金時代にして多くの弱點
あると同時に凡ゆる眞善美の盡く雅丁に幅濶しセイクスピアの戯曲ラファエルの畫像と共に天下
の偉觀を究極す是時ひ當り一大哲學者たる彼と凡ゆる當時の事物の眞相を觀破し之を後世に傳ふ
るは様大の筆艷麗の文を以てを誠に天下の珍萬世の寶典にして字々千金句々萬金といふも過評に
あらずされば彼乃抱負も亦た甚だ大に去て彼自ら記して曰く余の歴史は蓋し萬世不朽なるべ

し(Ktema es aei)なるべく一時の好評と共に直ち忘却せらるゝ如き競争論文はならずと然と而
してスキデスの著はヘロドダスに異なり文章平易ならず其思想用語含蓄する所多く句々諺語的
にして難解を以て名あり故に一部スキデスの字數は一部の大英字新聞の有する字數と大差不
と雖も輕々讀み終り難く希臘古典中の一難物を以て稱せざる幸ならず余輩は Dr. Towse 氏の有
名なる英譯書を有するを以て大に此困難を免るを得此英譯書は一千八百八十一年倫敦出版して
價八弗上下二卷に分かれ上卷は本文の譯と最も有益なる序論標註索引あり下卷の要するにスキ
デス集解とも名くべき者にして種々考證異寫本の研究などを載せたり故に此書のスキデス
研究者の爲めには最も大切なる書なれば價も貴く大冊なれば單にスキデスの一般を窺はむとす
る一般讀者の爲めには寧ろ不便といふべし幸にしてポーンのクラシカル、ライブラリイに收めら
るのヘンリイ、ゴール氏の翻譯に於て一冊價も僅に二シリング半に過ぎず宜しく此書に依るべし
元來此ポーン文庫あるものは獨逸のレクラム萬有文庫と好一對にして同じく希臘羅馬の古典は勿
論獨逸以太利英吉利佛蘭西西班牙等苟も名ある哲學文學歴史等の書を集めざるもれよて其翻譯者
と孰れも歴々の博士學士なれども我邦の一部の社會に行はるゝ弊風と同じく多く此等の學者自
ら筆を執りしにあらざりて貧乏書生の内職を出づるを以て誤謬を以て有名なる者なり其裡にあり
て泥中の蓮沙中の珠ともいふべき者二あり一は今述べたるスキデス譯と一はプラートの反譯あり
といふ又有名なるグロート氏の希臘史あるペロポネサス戦争の卷は要するもスキデスの講義を
まば此書に就きてスキデスを研究するも一法なりとす而してスキデスの歴史中特に何人も一

讀せざる可らざるベリクリスの記事阿典人のペリクリス崇拜クレオン及アルキビヤデスの語阿典の疾疫流行ホルキウの謀反等にして特に最も有名なるはシラキユース遠征軍の覆滅の記事なりとす彼のマコーレイ卿は殊にスキヂデスを精讀し常に人に語りて彼れ著英國史と彼れ知る多くの歴史と競争し得べきを信じて疑はずと雖も獨りスキヂデスの第七卷との夢にも競争を得べきを思はずといへりと云ふ以てスキヂデスの價值を知るべし

ペロポネサス戦争以後實地經歷者の著せる歴史は獨りクセノフォンあるのみ此人の軍人あり哲學者あり又歴史家とまで頗る著明かり紀元前四百三十年阿典お生る早くよりソクラテスお就て學び大に其寵愛する所となり屢々共お出陣せまがペロポネサス戦争中の最大陸戦といふなるデリユムの戦に於てソクラテスの爲めに九死の難を救はれたといふ後波斯のサイラス、ゼ、ヤンガアが兄アルタアクサーキセスお背き希臘人の來援を請ふや彼の希臘軍に加はりて亞細亞に赴きしがクナクサは戦よ於てサイラス戦死し續けて希臘援軍は諸將欺き殺さるゝに及びクセノフオンの奮然蹶起し希臘軍は將として千辛萬苦の後軍を完えて返國せり所謂一萬人の進軍及背進是なり後スパルタに仕爲其將アゲシラウスと共に亞細亞遠征お赴けしが其際希臘列國連合えてスパアタを攻むるに會しアゲシラウスは歸り救ひ同盟軍と大にコロチアは野に戦ふや彼はスパルタ軍中にありて彼れ本國の兵と戦へり其等の爲め彼は本國政府より追放の刑を宣告せられしが彼は徹頭徹尾スパルタに同情を寄せスパルタ政府の保護によしオリムピアの傍ある小村に住すること約二十年専ら耕作と遊獵とを事とし傍ら文學も耽りきといふ後移りてコロンス府に居り三百九十五年此所に死せり

此人の著種々あり *Anabasis* 即ち *March into Asia* に於てサイラスは遠征及び一萬人の背進を記し *Hellenica* 即ち *Greek Things* に於てはスキヂデスは歴史の續編を以て自ら擬しスキヂデスは筆を收めたる紀元前四百十一年より筆を起して齊武全盛時代に至るを又彼の著 *Cyclopaedia* のサイラス、ゼ、エルダアの教育を述べたるものにしてサイラスを以て明君の標本とせり又 *Memorabilia* は彼の師ソクラテスの言行録といふべく *Symposion* ソクラテスを辨護し其無罪を宣告せる者なり

今クセノフォンとスキヂデスとを比較するふ其對照頗る奇あり共お阿典人として共お充分なる教育の素養あり共に本國より追放せられ共に本國の政治を批評を試みり而してスキヂデスは造次顛沛にも心嘗て雅丁を離れず其批評も不偏不黨極めて哲學的なるに反しクセノフオンの阿典敵國に民となし全く本國を忘却お終れりクセノフオン全部の英譯二種あり一はクーバア、スペルマン、スミス、フヒールデング等の合譯にて一冊一ハワトソン及びデル二氏の合譯にて二冊是はポールの古典文庫に收めたる精密に評すれバクセノフオンの著述は歴史的價值よりも寧ろ文學的價值を有する者にして行文平易流暢更に彼がアツチック、ビーの異名を得る所以なり但し彼れ性質ハ深刻精透なる政治的觀察を爲すに適せざるを以て彼の著と到底スキヂデスに比すべくもあらず彼の著アナバシス及びヘレニカは二種ハ勿論歴史中重なる位置を占むと雖もキクロペデアに至りては純粹の政治小説にして毫も歴史的價值を有せず蓋し此書の目的ハ阿典の政弊を寫し出し以て彼の理想的政治を説明せむと試たる者にて彼は當時の輿論に反し阿典お行はせま如き極端の民政

主義を排斥し寧ろスパアタの如く貴族政治を喜び波斯の如く善良なる王政を慕ひ此書によつて彼の主義を發表せる者なりされば此書は眞の歴史的价值と有せざるも猶以て當時の政治的及社會的状況を窺ふの便ありとせず

クセノフオンの後と最早實地經歷者の報告を見るを得ず史學小所謂 Contemporary source を缺くと雖も歴山の事蹟に就ては Arrianus の Anabasis を以て最も實際の報告に近き者とす此人ハ遙か後の羅馬時代に住みたる希臘哲學者にして一世紀に終り小亞細亞ビシニア州あるニコメヂヤに生れマールカス・アウレリウス帝の時ニ死せり彼は當時流行せるストアク哲學者中の鏘々たる者にして専らエピクテウスを祖述スエピクテウス及びストアク哲學に關する著述あり此人之常にクセノフオンは文章を喜び常に之を崇尊せしかば時人彼を呼びてヤング、クセノオンといひきと嘗て小亞細亞カパドシアの知事となりし事ありしが后職を辭して故山に隱れ専ら文筆を以て自ら樂めり其際多くは哲學的著書と共に世に出たる歴史の著作は前述れアナバシスにて是を歴山大王の亞細亞征伐を記せる者なるか徹頭徹尾クセノフオンを學び其題名すども同くアナバシスの名を用ひたり此書の英譯は例れボーンのクラシカル、ライブラリイに收めチンノック氏ハ翻譯に係る不幸に於て今日傳ふる所は第七卷十二章を逸せり

此人は前述の如く歴山大王と同時代にあつたれどもとしかく古代の人にして近世の歴史家と違ひ今日傳はらざる史料の多きを用ひしや疑なく其史料の内にと實地從軍者の記録類も有りしあるべく殆んどコンテムポラリー、ソースの價值あり有名なるアルタークの英雄傳も亦た此書と同ト

く同時代の人の著作はあらざれども古代に現存せし史料に憑據せる者あれば并せ見るべし但しアルターク英雄傳の解題は羅馬歴史の部に於て述ぶべし

然りと雖もヘロドタス及びスキヂデス時代以後の歴史に寧ろ近代名家の希臘史に就きて學ぶ方得策なりとす而して近代希臘歴史の東西兩大關とも稱すべきは Grote 及び Curtius の両氏とすグロート氏は英國有數の歴史家にして千七百九十四年又生れ四十一歳より國會議員となり千八百六十九年以來倫動大學評議員長とあり千八百七十一年死す其傑作と希臘史十二卷にして千八百五十年より同じき六年まで出版せられ最近の出版は千八百七十二年又出たる第四版なりとすクルシユス氏は獨逸著名の古典學者にして千八百十四年リューベツキ府に生れ四十四年ベルリン大學教授となり皇太子侍講を兼ね五十六年ゲツチンゲン教授に轉じ六十五年再びベルリン教授に轉じ又帝國博物館古典部主任監督を擧げたる其著ペロポネサス記オリムピア發掘に關する研究等數部あれども彼の傑作の著述は希臘史あり此書の英譯の最も便なるはワード氏の翻譯に係り新育出版五冊の者(價凡そ十弗)なりとすグロートは歴史ハ約三倍の冊數なれど價ハ比較的に廉にて二十弗以下にて購ふを得べし元來グロート氏は熱心なる自由論者にして其著希臘史に於ても大に持説を發揮せむことを勉めたれば稍や一方に偏するの嫌あるに反しクルシユス氏の元真面目の古典學者として政論との縁遠く隨て其著に於ても古典の研究を主とし偏頗の弊を見ず其代りよは希臘史の政治的觀察の點は於て一步をグロートに譲らざるを得ず之を要するに二者各長所あると同時に弱點を有し激し雌雄を決すべからずと雖も翻て他の點より觀察すれば何分グロートは十二卷の大冊に

して左まで必要あらずる事實までも漏らす所謂顯微鏡的觀察を以て充滿し専門家と云ふかく一般讀者にとりて煩に過くるの嫌あるは勿論なり之に反してクルシユス氏は約グロートの三分の一の範圍に於て凡そ同時代の事を記し又グロート氏よりも遙か哲學的思想を富めり此點より論ずればクルシユスを推さざるを得ざれども不幸にしてクルシユス氏はマセドン全盛に至りて其筆を收めたるを以て歴山大王の驚天動地乃偉業及希臘文明普及の如きは之を氏の著に於て見るを得ずグロートの歴史十二卷の大部あるを見倒底通讀すべからざるを以て棄て、顧ざる如きと大なる誤といはざるべからざる氏の歴史中左の諸章は最も有名の者にして頗る文學的趣味に富むを以て決て一讀の勞を吝むべからず即ち第四卷三十一章なる雅丁民政第五卷四十五章ある雅丁帝國第七卷六十七及八章なるソクラテス及ソフィストの記事及最終の卷ある歴山大王の事蹟ふれなり以上の諸章を讀むの他のクルシユスの歴史を基礎となし臨機グロートを参照せしクルシユス氏の序論希臘の地文地理及一般大勢を論するの章は頗る名文を以て稱せらる

最近の出版は係り最良の歴史なりとの好評を博し、は獨逸のHolm氏著 Griechische Geschichte von ihrem Ursprunge bis zum Untergange der Selbstandigkeit des griechischen Volkes 即ち希臘人種の起より獨立を失ふ迄の希臘史と題し全部四卷より成る昨年末まで三首卷二卷の二冊の英譯出たれば遠かからずて全部の翻譯世に出るあるべし

現代と漢學

高 橋 亨

斜面上の圓体と、之を保持するふとかくんば、常々轉々落下して終つ其底は達せずんば已まず、社會亦此の圓体の如き、停止の者に非ずして、動移の者あり、淹滞に者に非ずして、變化の者あり、其をして趨かむと欲する所に趨かしめむか、滔々無限の深谿は墮落して、終に濁浪渦裏に捲了し去ぐれ、復々極ふ可らざるに至らん耳。

社會ハ人の一團なり、一人は社會の要素なり、人の天神の膝下を離れて、風塵の世に呱々の聲を揚ぐるや、形骸既に具はりて私慾乃ち在焉、五慾六塵終に脱せること能はず、長くて益甚きはあり、蓋し間居不善を爲し易しと人ハ常情耳、幸に吾人清淨無瑕の良智なる者あり、若し私慾の雲をして、蔽障所をのらしめむ、玲瓏にして直角、黒來れば黒映し、綠來れば綠映す、時おは私慾の廣翼跳梁を許さずと雖、社會の事態ハ、到底常に利害の自他上に平均に來る者に非ず、或は寧ろ自他上ハ衝突を起さるること稀なり、是に於て、良智ハ明鏡も亦叢雲散点する秋夜の六月の如し、光輝は固より長へは明かりと雖、屢翳陰濛朧、其の全能を振ふ能はず、斯の如くにして若し社會自身に一任せんか、手を放ちたる斜面上の圓体の如く、滔々墮落の極に達せずんば已まず。

社會ハ先醒者ハ、勢ハ感て終に起て、立ちて而して内界メンタルと外界フジツカルとより、人生の道を鼓吹せり、由つて以て社會の弱点を扶助して、其をして墮落に至らざらしめんとす、譬へば猶醫の如たり、病よ從て巧よ之を治療するなり、從て時勢に應て、其の鼓吹の主義大本も亦千差萬別あるを見る、時ハ或は血と鏝とを用ひることあり、要するに、其當時ハ風尙の曲がまると撓め、缺けたると補

ふに歸と、然らば則ち、時勢の風尚を觀て、其缺点を看取を得ば、之を直すの道亦定むべきなり。
我が大和國上下二千五百年、横に狹隘なりといふ云へ、縦に於てと容易に人後に落ちず、幾多の變遷と其間に起るぬ、或は王朝政治に優柔の風養われ、或は武家政治に殺伐の氣盛す、而して其王朝政治の終には、必ず武家政治を以て一新し、武家政治の終には、必ず王朝政治を以て一刷したる、暴を以て暴より易ふは、成り能はざる所あればあらず、是等の顯象の、最著しく我が文學制度の上より於いて証明さる、され共、古來幾多の變遷中、明治維新以來の變遷程、留心すべきとあかるべし、何とあれば、前代の變遷は、如何に其急激に、暴猛に、永遠なりきとは云へ、人々の思想は、到底大和國外より出でず、從て其變遷の迹亦頗る興し易き者あればなり、見聞少く概念狹きの忿怒の、僅に一推の甘味、一語の媚々に由りて解くべしと雖、成人の澁面は、萬言千容すとも容易に和げ難きに非ずや、現今四通八達、世界の比隣たるに至りては、コスモポリタニスム、ソシアリズム世界主義社會主義の傾向と、滔々として大和民族に浸染し、其間の變遷の消息は、一步を誤れば云ぬ忍びざるに至るおとなれを保せず、乞ふ、回顧して維新以來の變遷の要点を抽象せむか、勿論吾人の、只要点を云ふ耳、何となれば這般の言説は、業已に新聞雜誌の發行以來、時として云われざることをなければあらず。

己の好む所を寬にして、惡む所を峻あるは、人の弱点なり、百事草創、物皆新奇を撰ぶに當りては、事態の性情をも深く識察せずして、只新奇といぬに謳歌し、之を歡迎するの極や、當事者の眞價と、毫も社會に認められず、輕佻の風は靡然として起る、維新の際、泰西の文物制度の華耀に眩惑して、舊を賤し新を貴ぶの窮、在來なかりし名的事物は、襤褸も雲錦、往く處として悦ばざるはなし、春の夜の二雨に、曉の草の生ひ増し驚かるゝは、草の根淺く基堅かぬ故に非ずや、春草の如き俄職人、天下に充ち、目前の幻影に迷誘され、數歩の後、冥霧に彷徨え、其極空ましく失望の鬼となるは、沙漠の隊商に限らずなれり。

維新前迄は、社會の普通智識の程度低かりければ、書籍の擴布極めて狭少に、一帙の書も之を獲むに、或は十里の外に旅し、或は三度膝を折らざる可らず、况んや、蒙を啓き、憤を解くの良師に至りては、絶てなくして僅に在るに過ぎず、從て之を繕き之を聴くや、千金の珠鳥雀を彈せざるが如き者あり、一講を聴き、一帙を讀むや、其の一講一卷は、首尾整然として我が腦裏に拳大の烙印を銘し去る、維新後活版機來りてより、社會の状態は一變して、巨商大賈は相争ふて有用の書籍を出版す、爾來大名庄屋の寶庫に深く藏さとし、所謂珍本奇書ある者も、僅に一珍袖本として容易に我が掌裡に輸し來られ、學校作てより、就いて尋ねべき先生良師は、常に咫尺の内より在り、是を於いてか自家の工夫は何處にも要することなく、社會は一渡りし小才なる人物より充填さるゝに至りぬ、維新後文化日進み、科學日に開くと稱するに拘はらず、大著述の出でざる、是と事實に證して明白に非ずや。

尙甚乏於者と、泰西文物制度に眩するの餘、自國を忘れて泰西に狂奔し、彼の事は針の如きも知盡すれ共、我の事は棒の如きも知らず、忘本奔末の風を馴致したり、是れ蓋し天下志士仁人の、最愛愁焦慮措く能はざる所なりとす。

以上固より要点の二三は過ぎざると雖、觀ぶ來まば、我が維新以來の變遷は、王朝時代の優柔よりも、

武家時代の剛暴よりも、數層怖るべき變遷にして、輕佻浮華より、施いて忘本奔末に及びたりき。時勢既^ス斯の如くなれば、維新以來、社會の先醒者ハ深く大勢を洞察して、或は内界心靈上より、或ハ外界形体上より、頻に鼓吹して、這般の風尚を矯正せんと志たり、明治十年頃ハ、新島先生大聲疾呼して、封建時代の武士道を參酌して、精神的^{スピリチュアル}教育を京都同志社^{キョウトウシヤ}唱へ、次で北越學館ハ北越^{フキソク}野ハ、東北學院ハ仙臺に、皆精神的^{スピリチュアル}教育を以て起りぬ、次で一度廢せる武道の復た窟起して、道場の設都鄙到る處ニ在り、次で禪學と社會の上流中流の室ハ入と、禪味ある名辭ハ、各種^{ソウゴウ}著述行為に用ひらき、國史は編纂^{ヘンサン}と、古典講究所は建てらき、國粹保存の聲天下ニ喧し、要するに時勢と内界より外界より、輕佻浮華、忘本奔末の風尚を矯正する者を喚起しぬ。

斯の如く、時勢ハ促されて、古道の復興せるハ拘はらず、古來一千年、靈淑なる大和民族の經典とあり、理想^{ライシャウ}となり、上と九重の大政より、下は襄陽の家事に至る迄、一に其規矩中ニ鑄造し來れる漢學は、今尙社會の眼界外に置かれ、漢籍^{カンキヤク}の書舖^{テウブツ}の最上^{サイジョウ}架^カハ、無言^{ムゲン}と、寂寞^{ジャク}に、塵埃^{チンアイ}に埋了^{マウリョウ}され、其他^テハ新學者の、月と共に増加^{ゾウカ}し來るハ反して、漢學者は、或は白髮衰顏將に逝かんとして、或は半白老軀餘命長らはず、而して此の人士^{ジノトシ}として一度去らむか、天下茫茫、後繼者も復た求むべからず、千年来の大和國學と、尋ねんと欲するも、窮天極地、雲緒漠然、探る可^{サグ}らざるに至らん、而も加之、これ顯象に對して、社會の何の隅にも、一の可戒^{カクイ}、可留^{カウリウ}、可塞^{カサイ}、の聲あるを聞かず、噫是れ果して社會に何等の痛痒とも感ぜしめざる乎、嗟呼漢學は果して所謂新文明ある者ハ、迷子視^{メイシ}をきて恨なかるべき者なるべし。

現代の人士の漢學を邈視して、其の眼界外に置く最重なる原由條件ハ、單に二條ある耳。

一 漢學と陳腐など、

二 漢學は迂遠なり、

この二條の外の總ての條件(例へば漢學者ハ現代ハ賣れ口惡し、日本ハ學からずして、支那の學なり、漢文章ハ、佶倨傲牙、文字嚴正にまて作り易からず、又作りたりとて、小説新体詩に比して、其ハ報酬甚低廉、報勞に酬いず、漢學と學べりと云へば、何とかく古めかしく、社會ハ肩身の狹^{セウ}思あり等、この、盡く枝葉淺薄の見、特に解説打破するの要と見ず、將を斃さんと欲せば先づ馬を射よ、馬既に斃る、與^ヨ易^{ヨク}き耳、この二條の反對^{オウビ}說^{セツ}おして、充分^{ジュフ}ハ解説打破了すれば、從て又漢學ハ眞價は炳焉とまて、蔽^{カサ}ふ可^スらざるに至らん。

論者曰く、支那建國今を去ること五千年、黃河揚子江ハ、一望萬里の絶好沃野を此國ハ與へ、歐洲人の未だ存在せるや否やと知らず、或ハ少くとも、口手相接^{クテセツ}たりし時代ハ於て、既業^{キヤク}ハ人烟稠密となり、部落生^{トク}ト、族長起り、文化ハ夙に堯舜の時代に開けて、仁義五常の彝倫略定めらる、次で時艱世變は漸々其の根蒂^{ネンテイ}ハ培へ、桀の湯に亡されし由りて、此の道の離る可^{サガ}らざる者なることを明に、紂の武王^{ブツ}ハ滅されし由りて、又其の須臾も距るべからず、距れば則直に其の身に災^{サイ}、其家を壞ることを實地^{ジツチ}ニ証し、漸々人の理想を高めつ、周ハ至りては、尾大掉^{ビョウダイテウ}らざる爲に群雄の割據を致し、互に相攻伐凌軋^{オウコウバツリョウケン}と、例へば近世史當初の伊太利ステート分争の際の如く、各國^{オクク}ハ主風聲^{シュフウセイ}も

軍至るりと疑ひ、炊烟も烽火かど駭き、瞬時も意競争の内を脱せず、この風潮を遂に文學界にも浸入して、各自或は其主の爲めか、或は一身の爲め、臂を攘て立ちて、一派の學說を唱道し、天下滔々絢爛として、春野の梅あり、櫻あり、桃あり、董あり、蒲公英あるが如く、刑名、老、莊、儒、續紛と去て現はれ、皆其の説の至妙を發揮して、餘蘊あるなく、就中孔子人道の至醇を説ひて、萬古不動の大磐石を基礎に置いてより、爾來二千余年、學者の繼々承々を輩出せしに拘らず、儒者は勿論、其他の學者も、終に東周時代の百家の言説を超越する能はず、僅か其人々の著作の註釋解説の點に於いて、囂々然、新奇と誇り、創見と争ふ、其の窮竟する所は、古人の陳迹に辿り方のみ、一も其の軌範以外に、一個の主張を樹つる者あらず、斯れ如くおして、五百年前の漢學も、二千年前の漢學も、外形と多少風潮に連れて變遷ありとは云へ、内容に至りては、終に纖塵の増減を見ず、停滞は腐敗を招き、沈靜と墮落お近づき、二千年間殆ど固着なりし漢學は、今、既お腐爛骨を達し、孟夏二週前の魚の如し、嗚呼、天下終に之に箸を下さぬ愚を學ぶ者あらむや、

論者又曰はく、漢學は堯舜周公孔子孟子より、程朱諸家に至るまで、其の言説著書は、然山積すとも雖、一言すれば、人生の當踏當行の大道を、尤正直に解説指示せるは過ぎず、其言固より不可なるに非ず、され共、社會之這般空想的^{ユートピア}世界あるか、社會一般の結果が手段を裁判すと、(End justifies means) 大呼する間も立ちて、果して聖人流の主義の保守し行はるべき者なるが、古來支那或は日本が、多少其の主義に隨順しつつ、大迷惑を感せざりし所以も、人々の觀念の一國家とハ小以外は脱し得ざりしが爲耳、若し其にして外に競争者ある場合には、亦自ら時勢ハこの軌範以外に趨くし

めたり、支那戰國、并に日本戰亂時代に、著しくこの顯象の發露するに非ずや、蓋し活潑各地の競争場裡に在りてハ、一にも則敏捷、二にも則敏捷、社會の何事にも秘訣は、一敏捷の外に出せず、而して漢學は、常に反對に、智慧あるも遅の風を養ふの傾きあり、何となれば、大道にのこ循環て、逕にハ一瞥だも與ふざればあり、高山は登るに、道ハ決して千屈萬曲の常道のみならず、一截直往れ小逕ハ、或はあり、或はあり得べし、此小逕、即ち吾人の社會に立ちて往くべしハの道にして、而も漢學の曾て教へざる所なり、現時歐洲各國の、時日を以てすれば、支那に比し、未だ極めて幼稚なるに拘らず、將に高山の山嶺に達せんとするハ、支那之尙ほ蠢々として、其の中腹までも到達せざるは、是を事實に證して極めて力あり、日本今や幸に、纔に支那學の羈馬を脱し得て、こゝに近道を發見し、銳意専心、先進者と超越せんとす、この好時運に際して、又迂遠なると教ふる漢學に染浸せしめむとするは、一度水に沈で將に溺れむとし、盡力百方、手を振り足を動かして、纔に浮ぶを得て、岸を望んで徐々游泳せんとする者を、復し手を加へて沈むるが如し、天下寧ろ無謀之にお過ぐる者あらむや、

以上論者の言、亦其の理かきに非ず、されども字内の萬事も、常に表裏二面を有す、之を表とせし、或ハ之を裏となすハ、一に觀する者の心意如何に關し、漢學ハ陳腐なると、迂遠なりといふ、此れ其の表面あるか、裏面あるか、何にもせよ、其の弊のみを云ひし所、決して其全豹を認め得たる者ハ非ず、弊の在る所、得亦之に伴ふは常道なり、己に弊をいへば、得あること蓋し明亮の事實ありとす、若し夫れ其の弊よりして、亞砒酸の癩病に於ける、モルヒネの神經病に於ける如く、社會の風尙弱点

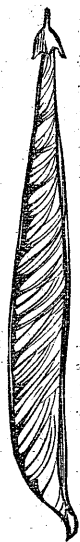
の重症に藥餌となるよとほむむか、其物の取捨の判断ハ、九霄を徹して太白に迫つ、至愚も亦容易に識了する所なるべし、然らば則我が漢學の、論者の所謂二大弊ハ、現代に對して、果して甚麼の關聯あるり、
(未完)

雜 錄

○經濟ある茶に代用品あ就て

市 村 塘

かはらけつめい全景 (上部)



茶ハ一斤の價、尠なくも五六拾錢のすべし、若し平然人の顧みざる雜草類にて茶の代用とあるべき植物ありとせば、世豈に是よ優りたる經濟あふんや。

諸君が夏期、捕鮎網を肩にし、河邊砂地を蹂歩する時、或は月の夕、叢野よ涼を納るゝの砌、足脚に觸れて振々鳴響する雜草のあるを知り給わん、是、多くは田皂莢が既に莢果結實して、莢内の細

豆爲よ震動するに因らずんばあふず、茶の代用品といふは即ち此植物なり。

田皂莢は學名を河原決明 (Cassia minosoides) と唱へ、分類學上、豇科 (Sigmintaceae) 雲實亞科 (Caesalpinioideae) に屬す、頗るはふらうよ類似せる植物にて、温帶地方よ汎く分布し、殊に河邊の砂地、原野よ殆んど該植物の簇生せざることを、高さ尺許、苗株瘦孱、莖内空筒からずして堅實あり、葉の含羞草の如く互生し、各偶數複葉にて十六七對の細小葉より成れり、七月頃其葉腋より黄色の小有梗花を出し、四片の萼、五片の花弁と、四本の雄蕊、一本の雌蕊とを具有す、萼片は披針形、花弁ハ橢圓形、且つ互よ攝合し向側きて正開するをかし、雄蕊は管狀の莢をもち熟後黄色の花粉を吐く、雌蕊は彎曲し長圓形に子房を着り、乃子房こそ將來諸君の足に觸れ振鳴する莢果なれ。

野生のものよほしては莢果の長さ、通常一寸五分許、内よ十箇程の種子を藏むと雖も、培養すれば植物の高さも二尺餘に達す、隨ふて三寸以上の長莢を結ぶ、蓋し製茶に適する主なる部分ハ莢果なればあり。

儲て、既に莢果熟して褐色を帯び來れば其未だ破綻せざる時期を見計ひ、幾等亦も思ふ存分全植物を地より引抽り、蓆上に廣げ、一日許天日に晒露す、是を三分位に適宜の長さに刻み、(或ハ莢果のみよても可あり)、砂鍋にて熬りたる後貯へ置り何時よても煎茶と同様に取扱ひ飲料に供し得べし、茶の如く滋味なしと雖も、煎汁ハ恰も茶の如く且特異の芳香さへあれば、人に因つてハ却て此方を嗜好すべけん、茶漬飯にハ誰ぞも「是は宜き」と賞賛すること疑ひなし。

大 然 自 果 莢



此の予の新案おては勿論あり、目下山口縣、愛知縣、宮城縣などお於て、隨分上流社會より「ネムチヤ」「マメチャ」「ザラチャ」など稱し頻りよ持離せるものに係る、過月東京よ於て此話せし折お、これを知れる人至極尠かりき、因て不取敢其概略を未知諸君お報導したる而已。

言ふ迄もよく茶の主成分ハ紐酸(Gerbsäure)茶素(Coffin $C_8H_{10}N_4O_2$)及び少量のTheophyllin $C_7H_{10}N_4O_2$ なり、紐酸ハ十二%を含有せらるゝが故に爲に、澁味を興ふるなり、是は吾人よ對し收斂劑(Adstringentia)として働き、茶素も其含量一、七九—三、〇九%よ過ぎざれども興奮劑(Excitantia)或は利尿劑(Diuretica)たるべきものあり、去れば健康体なりとも用量過度なれば害なくして適わんや、而して河原決明の主成分に至つて、某製學士も研究申あるが目下尙未詳に屬す、植物學上より論ずれば該植物に右の成分の含存すると思はず、寧ろ旃那葉の原植物たる *Cassia acrifolia* und *ougustifolia* に存するカタルチン酸(Cathartinsäure) クリンソマン (Chrysophan) カタルトマニット (Cathartomannit) なども少量こははらひ得る様思するゝなど、若しありとすれば多少瀉利の効はあるべし、尤も是とて當に於る話おはあらず、措く記して化學者の研究を待つべし歟。

(了)

無晶親王服色考 (承前)

教授 高 橋 富 兄

玉勝間山の卷云、吉部秘訓抄に、親王御元服、御袍色、並祿法事云々、予申云、於御袍文者、雲鶴之由、見保延記云々、又右府云、御袍色如何、予申云、如西宮文者、黄色歟、而保延被用淺黄云々、左大辨長定云

縫殿寮、或雖載淺黃、之由用途載苳安、以之思之、黃色歟、云云、長和二年、敦儀敦平御元服、兩親王着黃衣、共淺黃也、世稱黃衣、寬治元年、親王元服、着綠袍云々、同廿六日、今日、今宮有御元服事、無品守貞親王御袍淺黃綾、袍雲鶴文、無裏件、御袍色兼有沙汰、被遂保延之例也、とあり、上件親王、御元服の御袍之色、黃と綠と、たかるへあり、一、色乃名の、まかへるなり、ろのまかひは、大かた、古き物に、淺黃とあるは、黄色の淺きをいへる也、然るを世に、淺葱色とまりひて、淺葱色の事をも、淺黃と書かれ、古れ物に、淺黃とあるをも誤りて、淺葱色と心得られたる也、長和二年云々、其淺黃也、とあると、黄衣の黄色の、淺さよしを、ことわれる也、此れをなすと、まかはさとし也、然るに、寬治元年の度、綠袍を用ふれまと、古記に淺黃と、記せるを、淺葱色と、心得ての誤あるべし、保延被用淺黃、とあるも、淺葱色にてありけん、さて、同廿六日とあるは、建久二年十二月廿六日也、

淺黃は縫殿式に淺黃一疋苳安草三斤八兩灰一斗二升薪四斤」とありて黄色は極めて薄きと云ぬるに俗にわさぎといふ色は藍色の薄れものにて淺縹をいふ也中古淺黃ハ綠色也といふは浅縹をるういふハ綠とハ縹とと色異にして衣服令六六位七位は綠八位初位の縹にて各深淺あり玉海に至る子式文二者即淺黃にも聊可有黄色近代偏薄綠色也是誤也然者淺黃之染草の出苳糟爾非疑一殆也と見ゆ縹ハ黄色あれば綠色と見ゆゆりされば綠色をも縹をもあさぎと稱ひけん淺葱と淺黃とれみにはあらじか一源氏乙女れ卷あさぎにて殿上にのへり給ふタ露元服してカヘ河海抄云淺黃ハ六位、綠袍事也

長和二年 敦儀敦平 兩親王 黃衣

寬治元年 輔仁親王 綠色
 保延五年 雅仁親王 綠色 文雲鶴
 久安六年 重仁親王 黃袍
 建久二年 守貞親王 綠色
 建曆六年 雅成親王 綠色 〇抄云薄めら花色也有黃氣者
 重殿上已後還昇也

この文によればわさぎは綠色なり縹にあらざ式に深綠帛一疋に藍十圍苳安草大三斤灰一斗薪一百廿斤淺綠ハ帛一疋に藍半圍黃檗大三斤深縹ハ帛一疋に藍十圍薪一百廿斤淺縹ハ帛一疋に藍半圍薪三十斤と見へたり綠ハ藍に苳安或之黃檗を交へされば所謂もえぎかり縹ハ藍ばかりあれば青にて深淺あるまであり令にあさぎとあるは黄色の薄きなり源氏の頃あさぎといへるは綠色の淺さあり俗にあさぎといふは縹の薄れかり玉勝間に淺葱とのみいはれたるは此を思ひぞとされたるにこそ薄縹をあさぎといへるは建久の頃よりあらん上に引ける玉海に至る子或文二者即淺黃も聊可有黄色を代編薄縹色也と云是誤也近代は建久より少る前あるべし保延に淺黃と綠色ありと云る頃はもえぎを稱したるあるにいつしか薄縹をあさぎと云る事にありたるあり是誤也といえられたるハ薄縹をわさぎと云ハ非にて綠色を云ふ可きなりとこととふれたる也あさぎ乃詞によりて袍色初と黄色なりしが綠色とあり又縹色ともあれり同名異物にいかる非事是のみならト心して見るべきものぞ

花鳥餘情云一世源氏の子ハ其蔭從五位下されは朱の袍を着して還昇すべきに冠者の君の淺黄を着するふと二の意あり五位に蔭たりといふともいまだ叙爵せざる時は無位なり延喜縫殿寮式ハ無位ハ淺黄と見えふり故に淺黄に殿上にかへるといへり

無位ハ黄袍と云一説あり桐壺卷に注し侍ぬ

一云六位の翠の袍をあさぎといへり(富兄云翠は緑の字を用ふべに詞の同じさまに書る也六位の袍ハ翠にあらざ)深緑は色ハ藍と菊安どにて染なす淺きの色ハ通ひたる故也是にとりて三條上の乳母の詞ハ六位宿世といひ夕霧の歌ハ淺緑とやいひをるべきとわれハ六位の袍ハて還昇せりといふべきや一是モ河海と同じくわさぎを六位の緑袍と見たる説也

續世繼卷八はくくの卷に曰くをこハ白河天皇御子この世にとおほくほとけの道にいり給て御元服と

かたてうへの御それいろあどもたづね侍ふぬをまもも侍るとりや位おはしませぬほどハ淺黄と日記に侍なるをはあさぎ色が黄あるかなはれは侍りなくてハなそのハおやいの花園左大臣有仁公づねたてまつられたるもをさなくてねは給はぬよ一申し給ふ(幼稚にして知りたまはぬと有

仁公元服の時を云るなるべし公の元服ハ永久三年にして十三歳の時かり然ばかり衣紋を好みたまふ大臣にして我が着玉ひし服色を知り玉はぬも不審なり無下ハ幼稚なればさもあるべし十三歳ともかり居玉へればふつに知り玉はぬ事ハあらじをかの無品親王の服色は從前度々論ありて證據もとりくにて判然せざれば公も定めぬてすいまいけんさきば己が元服の時の色をもかくおぼつかなげに答ひ玉へるならん公の元服のをりと綠色にてありなり上に引る玉海に永久花園天皇

元服ハ袍ハ爲綠之由見中御門右大臣記と見たり

一宮崇徳天皇子重仁親王の御元服のハ黄あるをたてまつりけるるべし位まだ得させ給はぬと黄なる衣をまことにおとますすん(いりてうまことあるべし位得させ給はぬ時とも凡人とは異にて紫を着玉ふす誠ハありける論者の説も西宮公の誤りを言けたるなりさてよを此の一宮ハ御元服ハ久安六年されば有仁公薨後なり公世にいませバ例の淺黄ハ緑をかなりとか云ふ穿鑿もし給ふりしからむ)無位の人ハ黄袍あるべければ小野篁ハ隱岐よりかへりてつくりたる詩にもこふ君菊を愛せば我を見るべしいろさことハかうべにあり黄なることは衣ハありなどうきよハ侍し神のやしろの黄狩衣などもくらむをたうへなため心あるべし(凡人の無位の袍色を以て無品親王の袍色ハ證とするハいこれなきことなかりこハ淺黄の青さが黄なるりの疑と晴らさんためなればさてもあるべし一宮の黄を用ひ給ひしとは上に委しく記せり綠色にていあらざりしなり (完)

草庵陳言

侍愚袋川

○人生蹉跎多し、崎嶇なる坂嶺、轟々たる海洋、吾人の進路を妨ぐるもの何ぞ限らん、此間ハ處えて能く自己の本領を固守し、侃々諤々、澎湃たる世の濁流ハ追とどまらず、一直線に目的の彼岸ハ達するの道ハ、一ハ其方針を一定して勇進するにあらず、所謂薄志弱行の徒ハ、動もすれば目前の小利ハ拘泥し、西ハ轉ト東にまよひ、奔走ハ疲れて氣息奄々、徒ハ道途ハ倒れて虻蜂取らず、群小狐狸輩の笑を招くものハ、實ハ其方針の確定せざるハ出づ、嬉笑滿面八方美人的ハ舉をなすハ、有骨男兒の事

お非ず、蘇子千載の下訓を吾人に遺して曰く、治天下者定所尚と尙む所は則ち其志のある所にして方針あり、治國の道修身の要、之を求めて他に得るなし。

○「赤とんぼ羽根を取つたら唐辛子」と、人類の獸類と異なる所以もまた此れ如きのみ、誇然として萬衆の王を以て自ら任ず、揚々縦横に宇宙を飛翔して耻づるなきは、何の故ぞ、蓋し義てふ無形の一大羽翼は吾人をして圓滑に運動自在ならしむればあり、もつち此羽翼よして拔去られんか、吾人の忽ち軟骨動物と化し、卑劣殘忍、世と虎爭狼闘は修羅場とやらん、今の世實利主義の流行とると共に、志操は拙劣行爲の醜となり行くの現象は滔々底止することなく、今はや我利我利主義となりぬ、シルクハットにフロックコート、稱して紳士と目せらるゝ、上流社會の人すら、猶權にまよひ金むくらみ、同輩を排しても自己の懷を暖め虚名を得んとするものありといふ、嗚呼人生意氣は感ず功名誰か復論せん底の大義心を以て事お當るの人士は、今の世遂お得べからざる乎。

○人の言ふ世お廉潔なる士稀など、豈それ無らんや、青年あり數千の學生は天下に充滿せるあり、吾人の前より一の恐るべきものなく、一の諷ふべきものなし、東せんと欲せば則ち東し、西せんと欲すれば則ち西す、要し其目的を遂ぐるに在り、獨立不羈、口能く古今を談して而も誠實、頭溢りよ人に下らずして而も恭謙、意氣昂りて天を衝くものは、獨り吾人學生に非ずや、堂々たる帝國の同胞よ、造次顛沛の間も忘るゝ、勿れ吾人の國家の柱石より基礎たることを、一舉手一投足は問おも記憶せよ、眞摯と質撲といふ吾人の身邊を警衛せる最良の武器たることを、

○赤子の母体を脱し襁褓に内に呱々の聲を發するや、樂を求むるの感念の直ちお其腦裡に湧出を此念や、先天的の念にして吾人の生命のあらん限ぞ、吾人は伴隨して相離るゝことおけん、世の厭世家あるものも、其始め此求樂の念の迸出する所、其理想と世の狀態と衝突し、是に於てか圓滿ある世よ永き樂を得んとの念は、忽焉不平と變じ不平の極失望するものに過ぎざるべし、吾人も圓滿ある世に永き樂を得んことを欲せど雖、世の汚濁を怒りて厭世家となるを願はず、蓋し吾人の期する所の此汚濁を洗滌して漸々吾人の理想せる樂天地となすにあらず、世を化すべし世に化せらるべしとざるなり、而して不平と吾人をして奮興せしむると共よ失望は吾人の前途を障礙すること甚まざるばあり、樂んで世を渡れ而して世に染む勿れ、是吾人處世の要訣あり。

○人れ以て其樂を求むべし乃地外に社會あり、内よ家族あり、然し而して社會よは無用の物とて斥けられ、其家族も亦餓鬼は肉薄する所とて風波の騒ぎ勝るものなり、是貧民の境遇よあらずや、花さく春も紅葉錦なす秋も、依々蓬髮垢面一個の破椀を手よまて哀を請ふの外何事もお能はざるあり、彼等にと一れ知己も亦く一乃親戚もなく茫茫たる天地の間、單身孤立寒天れ下青草を枕とて、起死して泣死臥して泣く、彼等の胸中樂あるものを感するの何れの時ぞ、人たるもの誰か同情の涙を流さざらんや、余一日公園を散策と爛熳たる櫻花の蔭に胡坐一枚、端然として整坐し頻お首を垂るゝ、老婦あり、襤褸百結一見人をして面をろうむかへむ、二人は幼童其傍に坐し等しく叩頭絶えず啾々の聲を發して施與を請へ、余低首徘徊多時、其側を過るものは、美服高帽の縉紳あり、銀釵錦帯は貴嬪あり、絡繹織るが如き遊人の中一此可憐婦を顧るもれおかざり、甚しきは白眼冷視之を嘲笑す嗚呼人情の浮薄何ぞ甚しき、あゝ世には是等貧者のために熱涙と揮つて之を救はん

する仁士なき乎。

○徒よ金色まばゆき衣冠を羨む勿れ、車聲響々たる三頭ひたを羨む勿れ、無名無位を嘆ずる勿れ、幾多細民の友となす之を教へ之を導き、彼等をして均しく帝國民たるの義務を完ふせしめんよ。是吾人のなさざるべからざる一大難事よ非ずや。

文苑

尋花

花の舎吹雪

咲花の使もかなと馬に鞍おきてもまつかひなければのおもひ立ちてへたてぬ友垣一人ぬたゞろゝのかしれいの瓢携へ出立ちほ里遠かぬ油木山へとこゝろさを程にやめて山口にいたりつきぬ見渡せし花ころ山の姿也けれど讀みけん人の心さへおもほはて柳たにかきませぬ花の數いくろはく今を盛と咲そろひたるにいと心うれしく各手を分ちて登れるさま仙人あらぬに白雲にのまゝる心地せふれあなうまゝあふるるのいと心ひかれて行きてぬめりやうとゆる木うけにたどり付みればわか輩より先に集ひ名人々あきたこあたと己うむさうに打むれて酒くむゆり歌ひ出るありさては酔れて一文字たよまぬか足を十文字ふむもあはれ花に戯るゝの一ふしかれややめて瓢とり出て花をあるしの盃をなん汲ていなるめかたてはくまおのゝ酒のみあらず花にさへそひて常よは風よさへ心おふるゝ花をこの盃中よ一ひふはちりてよと戯るゝよ傍よりちる一ひらを

盃にうけてうれしやこれも月ありやといひしに似て花とありとあやけにうたふもめつる心ればまりからめけに心の花に引のるれと日影とし引とめんすへあふねとさも長き春の日足もはや西にうたむきつゝやめて月も出にたり大方の皆家路につきてあたりしつかよ二ひら三ひらちる音さへ耳おとまるに人はしらす我はかへりて心うれそくて立さるかよよと今ハ花守の思はいのあふんも

鶯に今よひの宿をかりて猶

あくりれまほは月よさく

長歌

觀兼六園之櫻花作歌並反歌

松下雅雄

玉銚の道行く人の 雪こそ梢を埋め 雲こそ枝におりぬれ 押並て花はさかりと 語り相品定めきて おむるしくのゝしる聞けは 其の花の面影見はて 暮はしく心落居す 然れとも業し終ねは 徒お今日とくらぬ 宿すこそは櫻狩して 偏愛に免て先と思へど 夜は間のうらろ光ふくて たはやすくうまいかてみ かようくと思ひわひしか やく塩のからくも睡れは 枕上きゝれりこく 閨の戸にあかしく風 枝ながら花吹散し 大雨のはたふり來れり 射ぬ鹿の心をいさみ 朝髪のおもひみたきて 天地の神うら先いと 端近く立むとすれり ぬり玉の夢にそあまなる さりとちとくる押見れど 大空の清くいれたり 等かる人しなけれ姿 只ひとりば

やくも行代て 世のちりれのふゆほと 櫻花見はやさまゝと 世にのさき六種兼ぬどふ
 一花やし巽のうのに 朝またきたきいていけは たれ男の影も見えなく たをや女の姿もあら
 す あされ歌お聲のゑ良さも 狂ひまはるもすそのちりも いまたはしひゝのすたゝす 岩走り
 岩もとゆそり 落ちさまつ松かたのたき 此れはるは雲より落ちば 其末のよとと漂ふ 瓢池鯉
 のをとととと さゝれかみよるゝ毎に うかたか花うも匂ふ 葉を重ね枝さし繁き 叢立の松
 お交らひ うちゑめるわり木のさくら 老せすと散らてをあれや 六の位苔の衣の 蓋ひひせる
 石橋の上に 心やり我ゝ立てれと 蝶螺山山の木の間ゆ 村のらす飛ひこそ來たれ 朝露れ匂ふ
 梢よ かきろひの風ほの見ねて 花れ枝を小蝶の每お 三ひふ四片はなれて散らて 流れ行く緑
 の水に あちによゝ浮るあや織れる さゝれ川岸の柳の 白つゆ乃ま玉乃とゝた なひくともお
 くてなひ々は 我胸のちりと去たせ 我胸のちせはされとも 我なか先未た盡ねは 我眺未飽ね
 へ 歩死先をまさまよふ我を 雲と咲く櫻の木々え 永居すと賤みなせそ 家並の朝けの煙
 八重霞かすみて淡き 向つ尾れ山のをかひよ 春日山白きも花か 空蟬の世の人皆の 白雲と云
 も理ぞ ちら雪と云も先言 岡の上の石にこひて 園のくまさま目に見れは と死も木の色
 もうすれて 咲きはゝく花の字れよし うらゝくと旭てきゝは 花の色たふとまをゝゝかしこ
 人よみけむ如く 言さへくくたられ子等まとも これ見ての大和心をあらさら先やは

反歌

うらゝくと旭に匂ぬさくら花やまこ心どうへもいひけり

手掌は散來る花を受得ては棄るも惜しきものにそ有ける
 うらやまし我もの貌も朝夕ななく花先ほる園のふ守
 見れを飽ぬ深き色香のいついあれと朝けは櫻雄々芳え

短歌

花林臙月 咲つゝく花の林を離れす月のとけ行夜半にも有哉
 花林蝴蝶 飛蝶は夢もむすは咲續く花れ色香のしか定先して
 川落花 水上の雲をわけは歸るさは花に棹さす吉野川かな
 首夏風 名はかりの衣更して花染の下重せんうせさむしとて
 加茂祭 大御世にあふひをわけて籠馬後の國のみて振に去て
 卯花藏水 時なふぬ雪うと見ゆる卯花の下よ氷らぬ山の井れ水
 窓新 竹窓近くすくある國の御手振は露もるむがて立る若竹

今様

山窓の眺光

松下文樵人

賣花翁

羽かせゆかしくあはさひて 筐さふすも花にとふ 小蝶あかふと我いへり 花賣翁ははゝ名みぬ

椿花

子等かほとひてあへ事を 遊ぶ芝生の曲水に 波のうねくさかほきと 見にて浮かへるま椿

山吹

さよたき川の川つゝみ 蹄のあとやたれからむ どへとまたへぬ山吹は 只くちあし乃色ふかし

梨花

ものや思へる色に出て のきのつまをじさきよとど ところにかけし拜領の 翁の面れ彌さひぬ

藤花

ちたり友のかけかせて すえれ松やま其の松の うれこす波は藤の花 またもや暮るゝ空詠光

蛙

さよれ姫かちどしける 花まきかへすあち小田の 溝にみらくれ流れ行く 春を惜まとやあく蛙

乙鳥

昔のみさりふきみれさく 里木の門れさゝれ川 かけを流まてとふ燕 今年もふる巢を尋ね来て

新体詩

若菜摘

花曙散史

をちの山邊を 見亘せば、 峯またなひく うすかすみ、 照らす日影も 乃とかかる、

鹿の子またらに 雪解けて、

春のやよひの 朝ほけ、

ころのふる巢を 立出て、

小枝に來鳴く うくひすや、

花のかを望を 身よまめて、

いほかに睡る てふくの、

ゆを驚かす こち風に、

あひく糸遊 あをやなき、

けむり罩めさる さと川の、

流れの水も 香に匂ふ、

あふ光見あかぬ 淺茅生に、

萌ゆる草た草 ぬみわけて、

うらゐの堤 この岸、

ととと深き 白妙の、

袖ふきはへて 若菜つむ、

乙女すゝのの いとしさを、

花のままひの おもつけや、

うさらぬまゝに ゆきの肌、

ぬきて艶ます くる髪に

つげの玉櫛 さまをゆる、

鶉たき姿 しのりれて、

『あはれ床さき さく木、

露をふく染る ひと枝を、

君か、さしに さま光さは、

に、さよ添ゆる 花の色、

末のちさきは あさくとも、

れもひる深き まこゝろを、

ぎけたまはれ』と 手折を來し、

花のひと枝 さし出せて、

手にうけほくもさすかまへ、

未だ世に馴れぬ 姫百合の、

俯くるうち わけてよ、

髪のかくれ毛 かみしめは、

時あらあぐに うすもみぢ、

散らすや神は、こゝろをかも。

ななき日影も やう／＼あ、

鎮守の森に、くれそめは、

ねくらに急ぐ、も、鳥や、

霞にひびく、鐘はこゑ、

里よと置むる、夕霧に、

あゝと景色、つゞまれて、

ほのうに匂ふ、春の野邊、

あよ／＼風の、吹くなへあ、

あろくもろへす、綾のそて、

包むにあまる、うれしさを、

今日のかへさの、家土産と、

摘みま若菜を、籠にみて、

おぐま、櫻、かきしつ、

たち去と歸る、乙女子の、

淡く消えゆく、うしろ影、

が、つし、を、ろも、あき、く、れて、

見送るそてよ、ひふく、と、

とまるも、嬉し、蝶、いち羽、

あはれ、誰か、魂、かよひ、けむ。

海之城(ウーランド作の意譯)

淡翠 迂人

とひ一

「汝、城を、は、見たり、り、か、

浪うる、と、し、き、海原に、

たかくもたてる、高城よ、

崇大雄偉の、すか、あ、と、

紅の、あ、せる、八重の、汐、

黄色の、夕雲、た、あ、ひ、きて、

殊、よ、け、さ、かく、見、お、お、を、

とひ二

「空も、一、つ、よ、曇、と、なく、

鏡とを、光る、滄海(わいたつ)よ、

れのう姿を、うつしつ、

輝く日影、おちゆ、て、

ひうを、浪に、投げ、け、し、時、

紫なせる、も、ふ、雲に、

かのか腰を、い、ま、と、は、せ、つ、

よ、い、へ、

『さ、お、れ、われ、も、ろ、を、見、た、と、

浪路、と、る、け、さ、う、あ、原に、

さ、かく、も、た、て、る、その、城を、

沈々と、ふ、け、ゆ、く、夜半に、

うす、み、の、黒雲、も、れて、

ひや、ら、に、月影、の、ろ、ま、

寂しく、も、城は、み、え、た、ま、

と、ひ、

「ぬ、さ、く、る、風に、浪、お、こ、と、

あの、城の、邊に、よ、せ、お、た、つ、

文苑

玉と、た、ね、て、り、花と、なる、

か、か、い、き、景色、み、だ、と、ま、の、

そ、ひ、ゆる、城の、層樓に、

この、し、き、歌の、聲、ま、よ、く、

う、な、づ、る、小琴、ま、て、ま、か、

こ、い、へ、

『黒み、渡れる、海原、の、

ふ、け、ゆ、く、ま、に、静、ま、と、て、

た、寂、寞を、感、ま、け、し、

ろ、よ、く、と、ふ、さ、ける、風、も、

さ、わ、く、と、う、こ、さ、い、浪、も、

死、せ、ま、こと、静、ま、り、は、て、

層樓、れ、悲、歌、さ、ける、れ、み、

と、ひ、一

「黄金の冠、いた、なる、

尊き王の、み、王妃と、

綾羅の衣、ひ、る、の、へ、

四十一

なほ歡ひておはしけむ
かたみに笑みつ語らひつ
ふかどのさして登りゆく
ゆゑさ姿見たりしう

こひ二

「ろきのみあふす汝のまゝ

王と王妃にめぐりまれ

其たのどのに登りゆく

姫のすかたをみこりしか

勾愈る花のかむはせや

みとりの髪のうるはしき

ゆかき姿みたりしか

こたへ

『なかりわれしも高樓よ

黒き喪服をまどひて

王と王妃を見たりけり

うるはしき綾羅の衣

いゝよ勢い月と輝く

姫君よ花とにほへる

其姿いつさいにけむ

われの見ざりた

夏季雜詠

ほれ暗らき燈下お鮮喰ふ別れ哉

家出して舟路の旅や五月雨

蚊一つ筆の穂さきに眠りたり

五月雨や閣に轟ろく那智の瀧

江樓や欄紅うして青簾

深潭に魚れ子遊ぶ茂どかな

家すれば水鶏まづ訪ふ田の邊

青簾青柳さて小琴れ音

古宮に乞食同士の蚊遣かな

村茶屋に西瓜の皮のらちもな

夏山や焼てらと塔の尖

寂電

鉄骨

無禪

横行

こだま

磨

笹舟

廉郎

豊泉

同

清泉

燈くらく工藤の陣屋さみだる

妻を去つて刈り後れたり麥畑

一村ハ田植の留守に火と失す

菜の花や土橋越ゆれば一在處

噴火して若葉れ山の鳴動と

二三寸若葉の上の卒都婆のな

夕立の晴れて虹立つ塔の上

夏山れ上に灯ともる社ゝな

幕垂れて上臈達の涼みりか

螢とぶ畑乃中の古榎

同

樂園

同

花曙

傘嶺

同

同

球江

同

同

大寺お晝の火事あり青嵐

大鯉の夕立すぎてはねる哉

婚禮の其日より衣更にけり

ピヤノ鳴る異人の家の茂り哉

木曾お育つて小冠者衣更よけり

水鶏く還俗くさくかつて來た

返歌する小式部賢に夏やせぬ

頼みたる城の裏手の夏木立

窓よ憑て日永の涼車を眺め覺

一望

同

同

修竹

同

同

同

花曙

漢文

村上函峰

祭毅堂鷺津先生文

維明治十五年十月十三日。受業弟子村上珍休。恭具清酌時羞之奠。祭毅堂鷺津先生之靈。嗚呼先生。學足以廻狂瀾於既倒。識足以表大義於當時。此其所下以超然特出于諸儒。而世之人亦以是仰爲宗師上乎。近世學者本領淺薄。浮詐虛文。固陋自畫。嗚呼先生。博覽強記。無書不讀。最精三禮。別出機軸。四方拜門。弟子如雲。西河道尊。薄夫斯敦。是吾所謂足以廻狂瀾者也。幕政頽弛。外患

頻仍。天日無光。陰雲重層。嗚呼先生。振袂奮起。竭方國事。能定國是。嘗以大義。說於幕府。侃々正議。求之古人。俯仰不愧。是吾所謂足以表大義者也。先生垂歿。朝廷既有升秩之寵。又有加勳之恩。維爵維秩。足以榮子孫。然先生之志。固欲著書闡道。誘掖後生。而一疾溘焉。豈特小子追慕傷情。凡朝野之大夫君子。疑奚所諮問。行奚所矜式。人之云亡。傷其何極。珍休受教。十有九載。無狀無成。懼違教誨。先生逝矣。邈不可追。幽明千里。今將從誰。嗚呼哀哉尙饗。

吊硯記

藤紫溟

紫溟合童子夜洗硯。忽聞其哭。奔而觀之。硯墮地破。悔之無及。退嘆曰。嗚呼命矣哉。硯也。盡於此矣。因命童子探筆。且告曰。汝知是筆者乎。毫毛成之。其性至柔。而雖之於盤石之上。猶不破也。獨硯也。爲質至堅。歷年至久。而其破不待日矣。予嘗聞之。至堅易破。至柔不可挫。彼各有取焉。今夫柳枝可以縮。可以纏。而不爲風之所挫折。如松之堅幹。竹之直節。則徃々風撼雪忌之害。其於人亦然。故勇者不得死然。盛怒者必斃。天下物皆然。獨於硯何疑。汝童子不復尤之。遂記。埋之以吊矣。

漢詩

白山

蓉湖漁史

蜿蜒跨三縣。屹峙五峰高。近映芙蓉雪。遙臨渤海濤。天寒玄鷲舉。崖裂白熊皞。朔鎮恒山似。形

雄勢亦豪。

木蘇岐山曰。起四句。如生鐵鑄成。直與王李登岳諸作。作抗衡。

兼六園

曳杖金華畔。雄藩傑構存。邈迤行不盡。穠秀信無喧。樓閣連喬樹。葑田望遠村。笑他李文叔。兼六詡湖園。

又曰。意到筆隨。惟熟於詩者能之。

富山

河號神通也有因。天風吹袂散香塵。反魂藥求余無用。不似長生殿裡人。

又曰。無中生有。巧思可念。

卽事

春到金華麗且娟。奇觀惜未入詩篇。前山尙剩玲瓏雪。照映花紅柳綠邊。

又曰。余梅堯疇春曲云。紅塵眯眼夕陽濃。惱亂烟花一萬重。却上高樓東望好。青天殘雪削刀峰。着想約略相似。

兼六園春詞十律

香陽

東風脈脈入懷新。吹發微茫古越春。翠色千峰霏雨後。芳光十里接花晨。交歡何日不如夢。行樂此生當及辰。來過尾山山下路。滿城車馬起香塵。故侯城裏蕊喪園。風物依稀春思繁。三月櫻雲臺榭合。千年烟樹澗谿昏。玉人拾翠隔西徑。鐵馬嘶

風雄北屯。輕薄少年無籍在。香車寶騎逐晴暄。
 一笑花間看屐迎。香塵滿地落紅輕。霞間蛺蝶痴無力。池上鴛鴦睡不驚。瀾影欺粧顏欲蔽。瀑聲奪
 語話難成。盧家隔水帳相望。狂道盈々銀漢橫。
 繡柱蘭牕閨闔關。排雲遶澗杳難攀。琴中神韻愁清遠。畫裏仙姿妬雅凋。盤上明珠來嶺海。案頭美
 玉出崑山。寶珍萬種渾無用。欲贈腰間一袂環。
 畫舫載花孤棹回。粼粼春水拍池隈。舞歌桃李愁中轉。彈調鴛鴦夢裡催。黃鸝已飛空閣榭。巨鼇尙
 在見蓬萊。婆娑楊柳輕風裏。勾引春人繫纜來。
 武尊按劔立悠然。偉業千年史上傳。神火古收夷虜野。堯風今度艷陽天。竹絲和水情堪挹。蛺蝶翻
 風態可憐。白馬銀鞍花下晚。揚鞭公子去何邊。
 步來緩緩綠池潯。一徑穿花深更深。拾翠人迷岑上得。題詞痕在壁間尋。茫茫芳影今不見。悵悵幽
 懷不自禁。頭上競撻鴉去急。無邊隔樹暮鐘沈。
 翠柳藏鴉夕日殘。輕陰暮歷入奇寒。草烟濃罩荒臺砌。花影危憑古井欄。垂鬟狂窺分面水。落釵誤
 起疊愁瀾。爲誰日暮空相立。寂寞林梢月一丸。
 雨風昨夜夢難圓。伏枕紅亭思悄然。遶屋香泥寒著燕。上簾芳草綠於烟。鬢絲春去如何感。歌曲風
 前未了緣。空剩西施眉字恨。茫茫春曉有誰憐。
 杜鵑聲下對花愁。漠漠春芳去不留。遊子今朝悲噩夢。何人昨夜吊靈湫。湫頭神廟清於水。巖畔梅
 柯凜似秋。飄落相思人不識。微瀾一朵暗香浮。
管公春詞和風料理瀛園遊山樹紅開水綠流
 自古人言春可樂何因我意凜似秋

無題

狂

骨

東風不與我成春。積愁鬱鬱城可築。中夜踏月來東園。獨抱狂骨花下哭。星斗爛然閨無人。如聞山
 鬼嘯林木。痛淚一掬向花灑。落紅撲面香馥郁。花分有情世無道。胡爲教我泣窮谷。目昏昏兮足蹙
 蹙。

送松魚郎東上三首中

懼

禪

骨相燈支瘦影危。莫教美女玉笙吹。爛斑花點雪飛夜。慘澹月殘君去時。風遞嬌聲鶯送客。春欺綺
 夢柳飄絲。嫣然一笑指東去。北地文星光忽移。



批 評

北辰會第十五號誌概評

泪 滄 浪

社會一般文學の製作は、如何も失敗したりこそ、其失敗は單に審美的の缺欠に終る耳あれども、獨り批評に至るとは、其失敗は此に留らずして、併せて道德の缺欠となる、是れ其の必要の非常あると同時に、之より手を染むる者の、小心翼翼龍髯を引くか如く思はざる可らざる所以あり、されども批評といふ文字の意義は。

Art of judging of the beauties and faults of literary

performance of a production in the sine art.

Webster

にして、而して巧拙といふことも實質以外の者かれば、批評の意義を充分に擴大すれば、文學的美術的製作に對しては、善惡美醜の判断と云ふに過ぎず、何とされば、馬と云ふは、鬣尾四足長耳修顔の動物と云ふに過ぎず、其良馬なるを、驚馬あるとは、自ら別問題に屬して、等しく馬なる類を出でざるばなり、余は信ず、批評の失敗を於ける三重の缺欠の中、道德上の缺欠は、其人が虚心平氣の製作に對して心的判断を下さば、こゝを免れ得べしと、嗚呼余をまて最正直な北辰會第十五號誌を

概評せしめと、

論 說 欄

第一先天智識の有無……西田講師……前號に於ては、先天智識を定義して、

Funda mental knowledge 即 Innate faculty として Principles of knowing なりと論斷して、

此に至るとは、一進して、其結果に實在するや否やれ論入る、蓋し近來哲學上の研究は、重々

認識論より始むるなど、而して先天智識の有無の、實に認識論の根本的問題などとして、先

生は此の大問題を解するが爲め、或は歴史的に、或は辨證的に、先天智識の存在を斷定して、以て一

種の經驗派の説を打破せんとすといはく

人類の智識は重に經驗より來れども、其經驗には預想すべき形式あり、又經驗は單に感受作用に由

て耳成立する者に非ずして、別に總合作用に由らずばあらず、即ち經驗以外に智識の因とある連結

作用と判断作用とあり、其の連結作用の形式として時間と空間とあり、判断作用には現實的及び形

式的の二範疇あり以上の形式で範疇とが、即經驗が預想すべき、Sine qua non (Indispensable

Condition) として所謂 Principles of knowing or innate Faculty ありと、要するは先生は、先

天智識を以て Activity として存在を、Mannigfaltiges に形式を與ふる者として之に範疇を歸し

玉へ、且又智識の原理は又 Realitas phenomenon の原理なりと論じ玉へり、銳利の筆法、燃犀の

燭眼、能く此の混雜せる大問題を解いて一糸亂れざる所、吾人淺見の深く敬服する所なり、若夫れ

先生の範疇に對する立脚點は、次號を待て教に接せんと欲す、

第二史海指針……浦井教授……曩に偽作文書研究の一例を示され、次で希臘神話集を出され、今と史海指針と給はる、先生は汪洋泓涵の學と、寸陰空しく費さるるに勵精とを以て、吾人の掖誘も盡瘁さるゝ事は、感荷れ至りに堪へず、而して吾人淺學の、以上三者の中、最深くこの史海指針に感謝を呈せんと欲するなり何となれば第一の偽作文書研究の一例は、教へらるゝ所余りも専門的にして、其の道なふぬ人には、盡く了解する能はず、從て又深き興味を感ずる能はず、第二の希臘神話集ハ、古文古詩を讀む時の外は、左程も利益を與ふるにも非ず、又一夕茶話めきて、幽遠窈窕の趣味も乏し、然るに此の史海指針に至りては、一部より三部に至る迄、苟も此世界に住して、其大勢に影響されつゝある者の、一として讀まざる可らざる者の中と脱せる能はず、讀で而して其教お從ふべき者の中へ出る能はざれりあり、殊々其の文章の例も由て布置整然として、平易流暢よくこの題に添ふて遺憾なきと、吾人は推服置く能はざる所あり、

雜錄欄

無品親王服色考……高橋教授……希望ある者ハ老を知らず、希望なき者の氣力おしどは、終お吾人を欺かざるあり、先生今茲齡既七旬を超へ、白髮顏顏當に隱退して花鳥風月に交はり、靜に天然を樂むべし時あるに、嚮には女郎花考を示され、今又幾十卷の古書を考して、無品親王服色考を物さる、精力超凡、識見秀英、之を讀む者、誰れり、朝夕學校乃昇降さへ危げなる老夫子を想像し得むや、果然、先生は形骸を老いたれ、其の心肉には、壯盛の英氣鬱勃とて、抑んと欲して抑ふる能はざる者あり、吾人は此ハ先生の健康を祝して、尙幸に自愛され、益吾人を教へられん事を切望して已まず、

体育私見

……岩崎柔道部教師……徳ある者必言あり、徳なき人ハ言は、如何も高妙なるも、精細なるも、口ありて手なれば臭味を脱する能はず、蓋一言とハ、窮竟すれば、所謂已むと得ずと發する者おして、孝子の行有餘力則習文と云へるは、動かす可らざる眞理を含むなり、岩崎柔道部教師の体育私見ハ一篇、熟讀する中先生が無聲堂裏に、放校をり日没に至る迄、幾十の健兒を相手に、骨身を盡して柔道を教へらるゝ、颯爽の神采、彷彿として眼に浮動し來り、吾人に與ふる感象の甚深さを覺ゆるなり、勿論其の説論の如きは、尋常一様乃事、生理學者、病理學者乃口より出ていめば、さ迄の深き感象は與へざるべけれ共、され共、先生よまうして云へば、此の平庸なる所、即眞誠に去て、眞誠なる所、即吾人を去て体育或ハ寧ろ武藝に萬斛の同情を捧げ、無聲堂裡先生の教導を受けんと思はしむる所以あり、

但し藤馬卿と筆記の、之を往年吐虹の筆記に比して、甚まき遜色あり、終に筆の先生の妙伎に適はざるを恨まずんばあらず、

京都往復紀行……養愚子……予輩は養愚君の文に接せる事既ハ甚屢なり、或は論文に、或ハ紀行文に、君が北辰會の爲に盡瘁さるゝとは、飽くまで謝する所あり、されども、乞ふ余をして正直に語りめよ、君が文は未嘗て異彩を放てる者ならず、或ハ異彩を放たんとせる者さへあらず、前々號の藤馬卿は、君が御嶽紀行を以て、好箇の催眠劑と批したりき、されども御嶽行の、其の材料の多少の詩趣ありし爲め、さ迄には感ぜざりしが、此京都往復紀行に至ては、僅に其れ一行を以てしても、

絶好催眠藥なり、其の外形内容共に一も成功の迹あり、元來文章と其の文体純粹をさざる可らず、漢文直譯体をさむり、終始然るべし、和文体をさむか之を以て貫くべし、和漢折衷体ならむか、言文一致体をさむか、亦徹頭徹尾然るべし、文章を書くことなれば、少くとも、他種の者と我が文体を同化するの力なかる可らず、然るに今や、君がふの一篇、一体の調子と言文一致体に尤近似して、其文字は和文的れ者多し、されど其の真正の調子の言文一致の處々隙を覗みて、半面或は一閃を現とすあり、加之、漢文直譯体の傍亦臍氣ならず認めらる、一言すれば、この一篇の外形の、言文一致体なるべしを、其調三分、和文体四分、和漢折衷体二分、漢文直譯体一分に、或る目的の爲に、最不調和お混して、而して擾亂せしなり、尙明亮に云へば、言文一致体の流産兒なり、而して其目的とい何ぞや、余は信ず、滑稽になさむ事是なり、然らば其れ目的ハ成功しむるか、滑稽とは先進の定義に由れば、

That quality of the imagination which tends to excite laughter
or mirth by ludicrous images or representations.

にして、この意を文章に由て傳へんとならば、其の外形と内容とが巧に配合されて、讀む者に、智と情とよりして、厭味なれ可笑味を起さしむるあり、故に、如何も外形が滑稽かれと努むるも、内容が眞面目或は平庸の者あらば、決して眞正の可笑味を生ずる者に非ずデッケンス、式亭、一九、れ著作に就いて味へば明白の事なりとす、而して養愚君の此篇の、或は漢文体よ、或は和文体よ、或は言文一致和漢折衷体よ、百方苦心經營して、可笑味を傳へんとし玉ひしが、其の内容即材料は、到底此の

目的を達する者の程ならず例へば伴侶欲しやの中の

神遊觀に往年の壯遊を繰り返しつゝ、大聖寺も過ぎぬれば、一方に割據したる「朋友」と、頓に勢を増して胸腔の全部を占領しつゝ、

の如き全く解し難きに非ずや、

或は未來の大臣の一節

鳥なき里の蝙蝠、我其れ大威張なるを知る、小停車場の驛吏傲慢なる惡むべき哉、我を以て自ら規則を犯しながら、猥に他を尤むと咎むる勿れ、我未だ切券を求めざる者、其青なるや赤かるや、知る可らざるなり

れ如た、徒に文体を以て材料を汚のす責免れ難く、人に譽譽を與ふる耳、

且又材料の撰擇を付いて、吾人甚だ此れ作者に同情する能はず、一日に十九里の一節、

「書生さん〇〇の買ひたし錢をなし」云々、何が故に此れ紀行中の材料となしむるか、滑稽をさむん爲か、將た又諷刺ならん爲り、滑稽を、何人か我々現今の位置を刺されて、可笑とすべし、諷刺を、確乎たる意志ある者、誰か斯かる賤しき点よりの、滑稽的諷刺を感起をささんや、

嗚嗚、余は批評なる名の下に、飽くまで君が文を黜貶したり、余豈に好で人の文を貶する者ならんや、君が文の虚飾なく温樸なる所、大に后来の進歩を預想して、其邪路を陥らんことを危めばなり、嗚嗚君が若りく温樸を筆を以て、其長所を順て勵淬せば、誠實なる論文よ於てと、必ず成功すべしと信ず、彼れ區々たる滑稽や、諷刺や、照應や、決して文章の能事に非ず、要の氣格は如何おある耳、

希くば君が温樸の氣格を以て、邪路に迷ふ事なく、發達成功せし矣、他日日本文壇の一方に旗幟を翻し玉はんことを妄言多罪多罪

文苑欄

第一ちりちりたる梅がえよつけて、友の許よ、……草野吹雪……吹雪君が和文も熱心ある、殆ど每號什を載せざるはなし、北辰會は爲に謝す、この文優雅にして稍見るに足るべき者あれども、其中の棹姫とい何如、棹のさをなり、佐保姫はさほひめあり、此は確に吹雪の不注意なるべし、尙二かゝる折にころいと、門は芥もはらひ、古びたりしむしろをも、清め、待ちつけぬきと云々「まぢけぬれど、は如何、つとぬ」とい共お半過去あれども、つと有意お用ひ、ぬは無意お用ふ、或はイムフアチツクの爲につをぬの代りに用ふれども、つと代ぬを用ふる事は決しておし、むしろをさよめてまぢつくとば、有意なりや、無意なりや、疑もかく此亦吹雪君の失念あるべし、

吹雪君の歌、擬古の病ありて、陳腐の迹蔽ふ可らず、歌壇は終に福井櫻園の獨占する所なる哉、花筐……松下花樵人……今様六首、調何れも降り、引だ懸け、非常な巧に用ひずば、調の卑下するを脱ぎざる者あり、新古今中れ歌よさる、往々此病に罹る者あり、されども、三十一文字の歌に於いては、短少の中お不盡の意味を含ましむる爲先、或と時々なさる可らざる事ありと雖、今様よ於ての引だかけ、余輩更お其の要を見ず、古今様の絶調と稱さるゝ、慈鎮和尚四孝の今様中に、一の引きかなかく、温雅に始りて、優婉に終り、讀む者例へば、春風翠簾を揺かして、黄蝶戯むるゝ處、洋々の琴聲を恍惚の間に聴くが如く、縹渺として餘音長く盡さざるを覺ふるなり、君が屢ひさうけ

を用ひて徒に調を下げられしは惜むべし、殊に春川の中の浮ぶは花水水泡かは、水泡はみまどなり、みづあまに非ず、甚しき輕燥に非ずや、

代悲白頭翁を譯す……櫻園……難なし、佳作ならね共亦十五號歌中れ白眉、されども、余も寧ろ君が豪壯雄大臺閣の氣象ある萬葉集を歌はれむ事を望む、
忍ぶ草……淡翠迂人……全く見るお足らず、調とい危想といへ、歌として見らるべきか、

己が病のいむむには、つれな死を去りもせむ
おにの住家を出でむにも、貧しき際をいかにせむ

此は之れ何の意ありや、病愈えなばを去らむ、され共、鬼れ住家を出でむにも貧する身は是非もあし、然らば先乃病愈えなばを去らんといひしは、偽あるや、或は病と貧とが一物ぢや、やれ窓中の一節「やめるむくろのやせはて、さうふ嵐にきむせむ」誘ふ嵐もやし、軀の消ゆとい如何、古來誘ふ嵐の、常に散るよ用ひふれり、字義上亦固より然るべし、つと、軀といひて直お消ゆとか散るとか云ふは、大露骨、更に含蓄なし、又「精神つかれて、理想にちやみ」の精神理想をどれ字の、あらずもがかと思ふは非か、

俳句壇……例も由て妙味津々、秋竹及び后進の、非常の勵精を以て、常に北辰誌上に花を添へるるの、感謝する所、尙后来れ奮發を希ふて已まず、

に遊不言溪記……村上教授……流石と老練、奇抜からざる想を缺点なく書き廻りされたり、
題夏禹治水圖……浦井信先生……先生れ文、常お千篇一律、必ず上代事れ事實は始て、現今の比較

終る一箇の樹立ある所、或は多とするに足るべきことかれ共、他は文体なれに非るに、余は先生の爲に取らず、且又淡々の大手筆は本色かまじと雖、尙一段れ精采の添ふんこと、望蜀の至りお堪へず、映雪樓記……垂東仙史……仙史近來漢文に於る進歩甚著し、此篇着想奇拔、筆圓熟、温々たる氣格、徒は字句の末お屑々おさらず、結尾韓公新修滕王閣記を脱胎して、意長くして遠し、尙怠らずして其堂奥も入れ、

詩五首……冷骨松心……私の詩壇は常お歌俳句に比して、甚しく遜色あり、蓋し其の他邦の文字に屬して、想の幾分は、之を運用する具に過ぎざる、文字の爲お掣肘され、自在の域に達すること甚難く、歌や俳句に對しては、甚不利あるを免れず、されども、消閑の具として、亦自ら別問題に屬す、

批評欄

批評欄時に健筆の文を出す、九龍齋臨川子藤馬卿、而して積川郎、皆筆端毫毛澁滯の痕なし、され共、余不肖未だ此積川郎の言説は首肯し難き所あり、郎は曰とく「己が心の引たぐに、何やくれやと論ふれれど、畢竟批評が作家の美を顯はして、文壇の木鐸とあり云々」美と顯を耳が批評は本色あるべきか、若し然らば、郎が所謂諂媚阿諛に、陥るある、支那的批評なるなりらんや、且又美を耳顯を者あらば、文壇は木鐸といふべからず、され共、余は深く云はざるべし、何とあれば、此の或は單に君が不注意に屬して、君が眞意は文壇の木鐸といふに在るを疑へばなり、

春秋君樂天と厭世との批評に、理想と現實とが一致し得る者ありと云はれり、是尤余の深く怪訝な堪へざる所なり、人の理想と最も簡單に解すれば、希望といはんが如し、夫れ然と、然らば、希望

と終に現實と一致し得る者なるか、之を歴史的論ずれば、君が云ひし顔子の一瓢陋巷に高臥せし時の理想、或は一切的に希望と、學徳圓滿れ其師孔子の域に至らんとなるべし、而して孔子の七十にして學を廢せず、堯舜ある理想上の人物に達せんことを努めんと、堯舜は其理想上の天或は神といふに至らんと希へたといふらん、蓋し君が議論を確むるには、先づ理想の或る一定の度に留めて、之に固着して上進せざる者なるや否やを、論明せざる可らず、若し或る点より上進せざる者ならば、此は達せば君の云ひし如く、理想と現實とが一致するならむ、されども、顔子が孔子の位置に至らば、此に満足して、其上に堯舜を以て理想上の人物とあきざるべきか、或はミル頓が其イルベソセローに於て現れる理想に一致せし時の、復た此以上求めざるべきか、一截的の云へば、理想が人々に由て異なる以上は、卑き理想の人が、此は達せし時と、より高き理想を懐かざるべきか、或は理想ある字が、有限を意味せずして、無限に高きことを意味するに非るか、何とあれば、古來我々の理想と一致せしといひし者あるを聞かずして、却て昨非今といふを屢聞けば、嗚呼理想が終る現實と一致せざる者とするれば、厭世と樂天といひ、一人々の性質、經過、境遇に、因せざる可らず、ア、予は誤て十五號批評の制限を脱せし、筆を奔走し想を趨く所、終に制する能はざる者あり、寛裕ある春秋君は、必ず孀然一破顔お附し玉はんことを信ず、

與臨川子書……藤馬卿……能く利刃を敵の弱處お推し、貫いて骨に達す、少くとも此は擧げし所丈は、馬卿に賛せざるを得ず、

吐虹去きてより、雜報欄寥落復々見る可らず、而して殊に十五號に至りて甚し、雜報の尤編輯員の眞價を見はすべき所、當に渾身の想と筆とを以て、己の最得意とする文体を運して、雜誌の終ふ大磐石を置き、此は北辰會編輯員の萬丈の氣炎を吐露すべきあり、我が北辰會雜報は、常に劃多き文字を臚列し、外形を飾らむとせる弊あり、是或の絢爛との光彩陸離とかいふに、必要なるべりれ共、難字ハ巧に用ふればよそ光彩も放て、杜撰に列ねては單に侘偻難解となり、終にミーニングレスである、試に少しく十五號雜報の杜撰を指摘せん、春風春雨中に曰はく「春と柳條にこぼれて孤芳嫺然先づ枝に上り、清香馥郁楚々嬋妍として家を遶る、柳は孤芳あるさる既奇なるに、清香馥郁に至ては辭の云ふべきを、終に其の臚列せる、孤芳馥郁楚々嬋妍の派手の文字と、全く無意味に終りぬ、

警鐘亂打れ一章れ如き、全く瓢より馬を出し、者、讀終て何等の感と與へず、醜上更に痘痕を添へて曰とく、白屋苔深きの夕、思を春宵の夢よせ、杜鵑一啼の月に泣く者多し云々、又前校長閣下の條は曰く、幅抑聲を失ひ、迸涕交もく横る、云々閣下謙率通美榮を遺れて、自ら居らず、云々の如き、皆杜撰意味をなさざる者に非ずや、

終に臨て全体を通評すれば、第十五號誌の近來の大劣作あり先生の玉什、俳句壇、漢文壇を除きては、會員れ創作に於て、一も見るべし者あり、會員不熱心ありしか、編輯員怠りしか、十五號誌の殘るを限り吾人不快に念滅す可らず、ア、一火に附して焚了せんか、抑亦留めて以て他日の紀念となし、我が北辰會誌も嘗てと斯く迄衰頽せるを想記して、以て今の旺盛を喜ばむ、噫嘻林靜庵南

窓の下に、遠山の烟雨に明顯隱没するを眺めば、



雜報

初見之辭

鳥兎代り明に日月交錯し、歲華匆匆此に一裘褐、前編輯員諸彦今や綬を解り翰墨を擲にし、將ふ故山に歸耕せんとす、秋風鱗鱗の情何ぞ禁せん、生等非才誤て部長の推薦を蒙り、茲に襲職の命を拜し、顧みて中心忸怩、慙汗背に洩す、惟恐に本會勲建の後年を閱するよと此に三年、會長は誘掖善導と會員の熱誠眞摯とは、會運をして、日に月々旺盛お赴かし先たり、生等不敏敢て當らずと雖も幸に同學は誘導補翼を假り、鞠躬努力驚駭も咎ち、敢て其の責を曠うせざらんふとを期す、庶幾く以て尸位素餐の譏を遁るゝことを得んか、之を初見の辭となす、

初夏野色

漢殿煙深うして長樂乃柳翠濃に、陳宮雨冷のよ景陽の花長に昔と忍ぶ、嘗試に箒を曳いて野外の風光を探らん、柳暗花明の青春は既に疇昔

故有栖川宮殿下の御肖像

天潢の華胄を以て皇室の懿親に當らせ給ひ、明治國歩艱難の危運に際會し、出で、は則ち東征西伐撥亂反正の巨効を奏させ給ひ入ては則ち籌を帷幕の中に畫し、勝を千里の外に決しき給ふ、猗偉ある哉故有栖川參謀總長の宮の御盛徳や、甲午の歲我國覺と清國に構ふるや。聖上遠く輦轂を廣島に徙させ給ふに及び殿下扈從之に従ひ獻謀畫策晝夜怠らず、適才疾を得、戰捷を見るに及ばずして薨らせ給ふ、豈悲しむべからずや、殿下先に北陸に巡遊あらせらるゝや、親しく駕を弊校に枉げさせ給ふ、光榮名譽永く校の記録に存す、客歲相謀りて殿下御休憩の遺趾を卜し、櫻樹を栽培し、碑碣を建て、以て長に流風餘韻を仰ぐんことを期せり、今茲更にお倫理講堂お掲げ奉るお殿下の御眞影を以てせらる、吾曹何を以て殿下の御高德お奉謝せん、即ち徳を修め業を習ふの余、親しく殿下魁岸勇武雅澹温藉乃風手を拜し、其清懷襟度を欽慕し奉るご共に、益々奉公義勇お盡瘁するよ在らん哉、

佛教青年會の創立

古往今來幾多の人士が貴賤老幼の別なき展轉反

と化し去り、いつしの綠葉鬱鬱として杜宇一聲新竹拆の候とはありぬ、顧れば運動場裡綠莎氈の如く、草色芊々として方に新なり、嗚呼夏草や兵共の夢の跡！吾曹蕉翁よあらずと雖も、亦曷か今昔の感なきを得んや、吁趙の廉將軍之鬚髮長齡猶ほ且ほ斗米肉十斤、駿馬を跨りて顧盼するの豪氣ありとさくよ、我四高の壯俊健士、何爲れず往年の意氣萎微消耗一に此に至るの、嘗て聞く、杉霜臺の巾幗を贈りて戰を織田氏に挑むや、曰く請ふ三月の後敢て朴柄粗豪の北國男兒をして忝く盛饌に陪好しむるを得んと、尾濃の將士相顧みて戰慄色を失ふと、謂ふ勿れ長袖子以て事をなすなすと、視ずや視と、向岡丘畔覇を一世お稱するの健兒、如何、將ふ青葉城下久しく願を中原に朶するの儕士は如何、抑も朝も蘇岳の紅霞を吸ひ、夕も白川の清泉に嗽ぎ、軀幹を練り心膽を研さ、銀杏城下多年東上の雄勢を蓄ふる龍南の俊髦と如何、是れ豈に在昔北國男兒の嘗て孩撫して埒視せる所のものにあらざや、吾曹一ふび念ふて此に至れば、豈お一掬の血涙なきを得んや、野球部員諸君請ふ須く猛省一番蹶起して以て吾曹をして此の愚痴を洩らさしむるよと勿れ至囁々々、

側悟せんとして悟する能とず、白駒鬣鬣半百の塵世空しく苦惱憂悶の中に消盡し、到頭一れ土饅頭と化し畢るものは抑も何ぞや、嗚呼人生はるく殺風氣のものありや、あらずや、吾曹靜坐黙考徐るに念を這般の處に驚すれば、天地愴悽として六合冥塞するを覺ゆ、是に於て乎、一道の光明能く煩惱を破りて眞如の境涯を導けるものか、夫れ釋尊の教よあらずや、我故有志此にお相謀りて佛教青年會を設け、去る五月一日を以て當市蛤坂町常徳寺お於て發會大典を擧げぬ、會員無慮二百有余名、是れ日頃徳高訥聘に應じて、來り會する者十數名、吾曹は敢て其の創立を賀し、大道は益々發揮せられんことを望む、此一言を添ふること然り、

松田講師の病狀

枯木槎枒、風死し虫蟄し、乾坤闕寂たる隆冬も、禽鳥和諧し、百花英葩を競ふの陽春と過ぎ、鬱々たる翠綠滴らんとする初夏の候にもなりぬれど、先生の病狀は日一日倒行逆施するやわびしき、先生聘に應じて、鞭を我校を執るや、實は去歲晚秋にてありき、其の巻を抱きて講筵お臨まれしは、僅お數月れ短日月れみ、二豎は先生を

して涙を掉て校を廢する乃已むかきよ至らしめぬ、聞く屬者先生の病勢益々悪しと、嗚呼蒼天にして靈あらば、何ぞ速に此の狡童を驅逐せざる、吾曹と只管に先生の快方に赴のせられんことを禱るのみ、

報道一束

陸叙、吾曹ハ愁思斷腸の中少しく其の纏を慰藉せるものハ川上校長閣下、大島前校長閣下及び左の五教授の陸進是れあり、吾曹は左手蟹螯を提げ右手巨觥を持し、滿腔の歡喜を以て、茲に萬福を唱ふ、

- 叙高等官二等 正六位 川上 彦次
- 叙從五位 正六位 川上 彦次
- 同 正六位 大島 誠治
- 同 勳六等 河合 義文
- 叙正七位 從七位 上田 整次
- 同 同 市村 塘
- 同 同 高橋 剛吉
- 叙正八位 須藤 求馬

新編輯員。例に由り客月之前編輯員滿期に際するを以て新に左の數氏ハ其の後を襲きて新編輯委員に撰定せられり、

内藤昌太郎(法二)、伊藤亥佐鶴(文二)、高橋亨(文二)、月岡眞備(文二)、老田太文理(二)、渡邊忠壽(法一)、松村大吉(文二)、今井貞臣(文二)

本校出身者の現況(續)

尾山城下遙に白嶽の皎潔を望みて、巍然たる宏舎の創立せられてより、年を経る此に十年矣、卒業生を出す、前後百五十有餘名一朝手を江頭に分てとり、東轅西駕、離群索居、落月屋梁の望夫れ誣ひざるものあらん、本誌先よ載するハ、舊友の動靜を以てし、以て先進後進の聲咳を通せし先たり、猶ほ更其の殘香騰馥の以て喜ぶ足るものは、請ふ左に掲げて同學の一覽に供せん、

明治廿九年七月卒業、

- 在法科大學中大路正雄 同 谷野 格
- 同 佐藤 信安 同 中村 孝
- 同 築山 直彦 同 佐藤 家太
- 同 飛石久太郎 同 五十嵐嘉一
- 同 中谷 正造 同 鶴見左吉雄
- 同 佐治 修三 同 三好 久朋

- 同 奥山萬次郎 同 谷野 作治
- 同 森山 守次 同 中司 正朔
- 在法科大學太田 四郎 同 本多 政好
- 同 池田 愛輔 同 林 安 繁
- 在文科大學茨木清次郎 同 小松 倍一
- 同 虎石 惠實 同 河野 元三
- 同 中川 忠順 同 中尾 教審
- 同 有馬 祐政 同 長 連恒
- 同 富士澤信隆 在工科大學岩田 成實
- 同 石黒爲次郎 同 永江 誠一
- 同 信濃榮三郎 同 小西 虎藏
- 同 渡邊 鏞 在理科大學清水 清藏
- 同 今川 一 在農科大學本多 菊吉

本校創立記念日

客月十八日の本校創立第十年ニ相當するを以て、例に倣ひて、同日午前八時靜勝館ニ於て、紀念種樹式を舉行せられたり、是の日川上校長上京中なるを以て、醫學部教授木村孝藏氏代りて壇に立ち、音吐清爽校長閣下の祝辭を朗讀し、且つ樹木寄附者の交名と報告せり、訖て學生扣席に於て校長閣下の茶菓の饗應ありたり、願みれば、本校の始めて金城の下に設置せられ親し

く故森文部大臣之臨み造士育才て壯重なる訓諭の下に盛大なる開校の典を行ひてより、歳を重ねる茲に十星霜、校長交代すること前後四回、其の間經營慘澹、熾目怵心剛健俠武の風と濃厚篤實の徳とは、少しく之を發揚することを得べきが如し、其れ然り、而して我校は社會に及ぼせる聲譽之如何、將た中外に我校に置ける價值ハ如何、吾曹は此の疑問を解せんとする小當り、聊ち狐疑逡巡する所あるを覺ゆ、六百の同窓諸君、苟も血あり、涙ありば、請ふ既往を稽へ將來を謹み、敢て校風の發揚士氣の振肅を努力せよ、吾曹と必ずしも輕躁といはず、浮薄といはず、唯十年乃昔蓬頭垢面弊衣高屐經世報國を以て自ら任じ、時に慷慨悲憤半夜短袖を絞りし士の、今は風丰都雅清癯粧身の貴公子と變遷せるの進歩を驚るのみ、

第二高校との競漕中止

我艇會は創立するや日猶ほ淺く、技未だ熟せず、而も地北邊に僻在し風馬牛相及ばず、久しく中外の高願に負けり、先ハ二高の健士、遙に書を齎せて、約して曰く、願くは盛春四月を以て、東都墨陀の時、東西相會して與に伎倆を較するを得

んと、我艇友乃ち應へて曰く、謹で命の忝死を拜すと、適々二高事あり、三月未だ成がず、我艇友飛書往返商確久し彌り、糾紛益々決せず、是に於て乎議して曰く請ふ之を異日と遺す、亦未だ晩しと爲さずと、乃ち書して以て二高を送る、之を競漕中止の概歴と爲す、

終刊の辭

細雨煙の如く、椽霽滴瀝琴瑟を鼓するの似たり、紅杜鵑腥血滴るが如く、綠陰幽草、蜂蝶翻舞し野花薫ず、或は峯巒起伏し雲烟靄々一幅の淡墨畫中に坐するを覺ゆ、是れ豈に初夏の風景ありや、我が俊髦秀才の同學諸氏、千紫萬紅英を含み華を吐き、靡蔓妖冶、清秀激越、其の識才と博文とは猶ほ現時の風光に類するものあり、其れ奮て本誌の爲に盡瘁せらるゝは生等の感銘堪へざる所なり、茲に學年終刊の辭を述ぶるに當り、併せて諸子に謝すること多しと、(五月十五日切)

松田講師逝く
藥石効を奏せず五月廿日と以て終に鬼籍に上る、享年五十有四、悲哉、謹で吊す、(編輯切後追録す委細次號)

鶴來辰口地方行軍記事

春季休業終りを告げ、衆生校に昇る、一片の掲示と吾人を扣所に迎へり曰く、來る十二日と凡そ三日間の豫定を以て、鶴來辰口附近に、發火演習を執行すと、嗚呼行軍や、吾人が樂みて俟候所のもの、期短しと雖も、以て平素鬱勃たる壯心を遣るに足る、况んや雪花既に飛び罷んで、櫻桃漸く笑を含み、春風駘蕩、菜花半ば黄なるの候郊外の韶光賞するに足るものあるに於てをや、衆生直に筆を投じて、暫く戎軒を事とする所以あり

大隊本部

- 大隊長 磯田正謙
同副官 福岡祿太郎
旗手 長岡 堯
衛生部助手 中川 鯉太
字賀治 修造
松井梅次郎
安村順吉
河合 鷲
金森種次

- 測量手 五堂嘉一郎
書記 堀 覺太郎
水木常信
福井喜彦
伊藤 文佐鶴世
福見 教官
白井 精一
北 豐吉
新藤 幸作
北川 健三
鈴木 條助
鈴木 祇直
竹下 麗三郎
生沼 曹六
松王 敷男
早瀬 三求
中西 政太郎
田中正一
高岡 榮
辻 岡 律
日下 教官
佐々木 雄次郎
朝長 勤十郎
近藤 常吉
石田 莊二
横田 利三郎
吉田 弟彦

- 第二分隊長 山科 祐次
第三分隊長 栗本 貫一
第三分隊長 田鶴 濱次吉
第二分隊長 伊藤 盛三郎
第一分隊長 吉村 盛男
第三分隊長 下村 繁太郎
第二分隊長 野村 淳次
第一分隊長 中村 光吉
第三分隊長 近藤 篤逸
第二分隊長 松田 教官
第一分隊長 原田 永治
第三分隊長 大森 篤次
第二分隊長 山崎 然良
第一分隊長 隈川 豊
第二分隊長 裕垣 文次郎
第三分隊長 二宮 英雄
第二分隊長 松原 武
第一分隊長 江間 圭一
第三分隊長 赤澤 欽次郎
第二分隊長 久保 田 整
第一分隊長 森 又四郎
第三分隊長 森 孝郎
第二分隊長 佐々木 菊若
第一分隊長 戸川 文次郎

- 各中隊幹部
第一中隊長
第一分隊長
第二分隊長
第三分隊長
第二中隊長
第一分隊長
第二分隊長
第三分隊長
第三小隊長
第一分隊長
第二分隊長
第三分隊長
左翼士官
曹長
給養掛
第二中隊長
第一小隊長
第一分隊長
第二分隊長
第三分隊長
第二小隊長
第一分隊長

- 演習本部役員
統監部長
同副員
給養掛
曹長
左翼士官
給養掛
同副員

指揮官兼 歩兵中尉 磯田 正謙
 審判官 宮川 萬三
 設営部長 生駒 廣太郎
 衛生部長 山瀬 時吉
 會計部長 市 村 塘
 村田 金太郎
 宮地 彦八郎
 得田 耕 耕
 柳田 信行
 島 定 保
 永井 尚賢
 泰 秀 穂
 圓山 萬三郎

視察員

四月十二日午前七時、各自武装して静勝館前に整列し、川上校長の告辭あり曰く

本日より行ふ修學旅行の目的は、前年度亦行ひたるもの、目的と異なることなし、依つて本官は、諸子が兵式其他諸指揮官の命令及び指揮に遵ひ、本校が期する所の目的に、叶はれんことを望む

又本官は、一昨夜文部大臣より上京の命を受け、明日出發せられ、今回今井教授をして代つて統監部長とすしめされば、其義を了承せられよ

終つて大隊は行軍の途上る、正に是れ午前八時なり、前日來の雨雪全く霽れ、風は和の日は麗くに、三百の青衫歩武堂々、一旛の校旗輕風を含んで翻々たり、犀川は大橋を渡り、それより左折して街衢を辭し、鶴來街道に向ふ、滿目の青郊韶華通く、倉ヶ嶽の故城址聳然として道の前方に峙ち、其舊歴史を話して吾人を壯んにするもれ、如し、九時窪村に小憩し武裝検査あり、道漸く市氣に遠より、饒頭麥青く菜花黄なる此邊、野禽歌ひ蛺蝶舞ひ、到る處悉く皆陽春、猶進んで途上草青く陰清き處、一二の小憩をなし、正午鶴來町に入る、町之金澤を距ること四里、手取川の右岸にあり、乃ち暫く隊列を解いて中食を命ず、食後休憩の間、遠く去つて白山比咩神社を拜するもれあり、或は金劔宮に詣づるものあり、前者と町の南數町の處にあり國幣小社にして崇神天皇の御宇の鎮座なり、神林翳鬱として、自ら神威は高たを覺ゆ、後者は町の東隅にあり、此町の名依て出る處なり

の小舟僅かに二十人を載せ、船公優然として往復する、遲緩人をして怒らしむ、一時五十分全軍渡船を終るや、日下枝隊長今より演習を行ふ旨を告げ方略を示して曰く

我隊は南軍の一部として、北陸街道を大聖寺に向ひ背進せる本軍を掩護せんことを、岩本村にお出する枝隊あり、今や敵の一枝隊鶴來街道を南進し來り、手取川を渡らんことを、即ち我隊を此に於て敵の渡川を扼せんとす

仰いで地理を按ずれば、突如たる天狗岩の半空を摩し、飽くまで密生せる雜樹を頂いで手取川に突出し、其連脈奇峭壁立して、百尺の斷崖削るが如く、喬松老杉諸處を點綴して、蜿蜒屈曲遠く岩本村を包む、雄なる哉山川の固め、宜なり南軍は此天險に倚りて敵を扼せんとせること即ち第一小隊は天狗岩に隣れる丘阜の麓渡船場の正面の杉林に散開し、第二小隊は其南方の蛇籠によりて散開し、第三小隊は猶其南方形勝の地により密集射撃をせんとし、北軍遅しと俟ち構へたる勢ひは、天魔鬼神も當り難く見ぬより之に對し第一第三中隊より成れる北軍は、二時鶴來を發せり、大隊長告諭あり曰く

本大隊は金澤に本軍より左側掩護の爲、派遣せられざる支隊おして昨夜鶴來町に一泊せり本軍は今日小松に向ひ發進せるを以て、當支隊も亦寺井方位に向ひ行進を起さんとす

一然るに敵(南軍)の一支隊を手取川左岸にお出し、當支隊は行進を妨げんとするもの、如し

一今より警備行軍を移る、但し當町南端れ出口までは昨夜來歩哨線と張りある所あれば、安泰なりと知るべし

即第一中隊は前衛となり、第二小隊より尖兵を出し、南進して鶴來町を離れ、手取川の右岸に出づ、此處川に橋梁なく、唯一艘の小艇を以て往來の人を渡すも過ぎず、今や北軍は此遲緩なる交通器に頼らざれば、此碧浪滾々たる大河を渡るの術なし、而して南軍は渡船場の正面の杉林より、流に沿ひて防禦線を設けざるが如く、白帽點々綠樹の間に隱見せり、是より於て北軍は、先づ此敵を撃退するの策を講せざるべからず、即ち前衛中隊の第一小隊を以て、正面の嶺に散開し敵と砲火を交はしめ、第二第三小隊は堤防に傍ひて南進する凡百米突、森林の敵の側面を砲撃す、其勢頗る熾んかなり、あの十字火お陥りたる南軍は急に兵を收めて續々退却せり、機を見て

取りたる北軍ハ、第三中隊の第一第二小隊を同じく戦闘線に増加し、一齊射撃を行ひしむ、今迄も耳に砲聲を聞かぬ目も硝煙を見ながら、空しく擧を握りて後方より扣へし新手の者ども、掃り切つたる勢を以て火線に出で、後ろを見する南軍を微塵になさんと、爆然たる一齊射撃を試むること數回、硝煙濛々として天日爲めに昏く、砲聲殷々天狗岩に響き、壯絶又快絶、此際に第三中隊は第三小隊の無事な渡川を終り、直に散開して蛇籠に倚りて敵を射撃す、此掩護より北軍は漸次渡川をせり

是より先南軍と一分隊を天狗岩の上へ派遣し、敵の意表に出で、大に北軍を苦しめんと計りしを、機少しく後れて目的を果さず、且北軍の鋭鋒を避けんが爲め、一先づ兵を收めて退却せり、南するものと數百米突、山脈盡くる所田畝の間、地物利用するに足るものあり、乃ち此地をトして第二の防禦をなさむとす、依つて第二小隊を田畝の間に散開せしめ、第一第三小隊は堤を楯にして止まど、又別一分隊を山角の上へ派遣せり

北軍之漸次渡川を終り、將は南進の途に上らんとす、道山に傍ひて敵彈を蒙るの虞なし、山脈の

盡くる所の平原に敵兵を見る、又山上別に十數の白帽あり、蓋し北軍軍に正面の敵は對し進撃せば、其側面を射撃して大に奇功を樹てんとするもの、如し、而して此敵たる小數ありと雖も、地物を利用して出沒自在なり、之を撃退せざれば前進を起すこと能はず、即ち北軍は第一中隊の第一小隊を以て、天狗岩より山上に登らしめ、裏の裏のく妙計と敵の意表に出で、此敵を撃退せしめんとし、本隊は山下の安全地をトし潜まり、つて山上の砲聲を俟つこと少時、寂として第一小隊の消息を聞かず、斯の如くして長時間を費さば、唯恐る士氣の沮喪せんことを、支隊長茲に決する所あり、第三中隊を以て直に前面の敵にむかひ砲戰を開かしむ、勢頗る猛烈、山上の南軍も計の熟せざるを見けむ、退きて本軍と合し頑然たる抵抗を試み、兩軍の砲火益々盛んに戦正に闘なり、此に於て、北軍は悉く着剣し、數聲の喇叭を相圖り總進撃を試み、校旗水風に飄り喊聲山岳を揺かし、轟然敵を衝く、南軍も亦何ぞ躊躇すべし、兵を合せて一團となし、騎虎の勢鋭く敵を逆撃せんとなす、兩軍入り亂れ劍芒相摩するの瞬時、一聲の鐵笛の休戰を報じ、兩軍各隊列をかへる、時に三時二十分、山上を迂回せ

し北軍は一隊も亦來り會す、天狗岩は頂上、山路羊腸として險又險、斥候の敵を發見し發砲を以て之を報せしと、眼下の平原突撃の喇叭響くの時あり、乃ち前後相扶け疾驅して來れりと、荆棘の爲足を傷り血痕斑々たるもの二三、其困難想ふべし、茲に演習終りを告げ、磯田大隊長衆に向ひて、先づ兩軍の方略及び動作を説き且つ之に講評を附する曰く

一敵前に於ける乗舟渡川上陸等の動作ハ、頗る困難なる運動にして、殊は本日の演習に於ける地勢は、南軍支隊にとりて可なり形勝陣地を有するにも拘ららず、北軍支隊はとりて右岸の地形全く暴露せる爲、其運動は悉く敵の洞見を避くるを得ず、從つて其受けたる損害は夥多かりしならん、併しこれは地勢然らしむる所にして、如何ともせべからざるものなれども、或部隊の如きは、其運動の十分なりし爲め、避け得べき損害をも、自ら求免て受けたるが如し觀あり、是等の事の後來に向つて大に注目すべし處とす、即ち某部隊が敵に向つて、側面運動をさせるが如きは其甚しきものなり、斯れ如し場合よは、少くも斜行進を以て適當とせん

一南軍支隊の配備を先づ適當と考ふ、されば北軍支隊は右岸に沿ひて、敵の側面を射撃せんことを力むるの外なし、即ち射撃の功ありしを、南軍は漸次退却せしを以て、北軍は渡川を始先、南進して敵に當りつ、山麓に集り、全隊は渡川を終るを待てり、然るは山上多少の敵ありて、北軍若し散開して前進せば、左側山上より敵の瞰射を受くる虞あり、依つて暫く前進を止め、一小隊を山下へ迂回せし先、此山上も、此部隊容易に到着せざりや、支隊長は山上の地勢を知らず、或は一小隊を登らしめし山路の、此處も連續せざるも亦知るべからず、然るに優々として之を待つも、行軍の都合上時間の後るべからざる條件あれば、斷然突撃を行へり、されどもこれは強ち普通の戦法にあはざることを知るべし

一南軍支隊の一小部を、何時迄も山上へ配備せるは、策の得ざるもこれにあらず、若し敵の突撃を受くることあざれば、此部隊の孤立し、且つ退却の路を失ふに至るべし、併し今は其退却北軍の突撃と同時に早よりしならば、其結果知

るべからず、先づ兩軍又附きて述ぶる所之れにて止む、猶細密あることは、各中隊長より夫々注意せらるん

即ち各中隊長は自己に隊を向ひ、演習中の動作に附いて懇ろに教示する所あり、四時出發南進し三ツ口村にて小憩、五時半辰口村に入り、宿營ふ就く

辰の口の地さる、鑛泉場として頗る名あり、小丘綿々四周を圍み、兩丘の間、遠きも數百歩に過ぎず、東北の丘間僅かに外郊の村落に通ずる一徑を存し、其狀や宛然は一ヶの城廓あり、谿間一帶の平地をなし、家屋約三十、軒を並べて中央より立ち旅亭其多數を占む、四邊の丘陵より松樹茂生して、其常緑の翠色掬すべく、谿流一脉溪々村郊を貫ぬき、清冽玉の如し、不知春宵秋夕丘上の松琴を和して、孤客の恨夢を破ぶること夫幾回や、九時半兵員点檢終を告ぐるや、二百の壯士孰れも、明日の快事を豫想しつ、枕に就けば、終日疾驅奮闘の疲勞は、時を得顔にて一齊に襲ひ來り、一同何時し、先何有の異境に入りて、壯士の駭聲漸く高く、破天動地の響も容易く、彼等の夢を破り難く見えたりける

坤閑寂萬籟沈んで聲なく、軍營の暗燈明滅として孤影榮々あり、今や壯士の駭聲さへ絶えだに、六合に凡て死黙の黒幕を包まれたり、唯僅かに峰の松ヶ枝を掠むる小夜嵐の、折々溪水に入りて淙々の餘響を傳ふるのみ、誰う知らん一抹の狂雲此刹那に湧て、靜寂中夜の夢を破ふんとは、夜まだ深き午前二時なからざるに、鐵笛一聲

當中隊は前哨中隊となり、當村及米丸村附近に前哨配と附せり(假想)、情報に依れば敵は辰口村附近に退却せし者の如き、依て只今より前哨を撤し、拂曉に乗て敵を攻撃せんとす、乃ち第一小隊を尖兵として警戒行軍を移る、是先北軍出發后凡二十分を経て、第一第二兩中隊より成れる南軍は、漸く辰ノ口湯本を發して辰ノ口本村に向ひ、士卒皆枚を啣んで前進し、又一人の語を發する者あり、天を仰げば星斗欄干宵漢を貫ぬき、空しく夜色の凄凉を加へ、爰音の肅肅獨り此幽寂を破る、已にして目的地に達す、福見、日下兩中隊長は南軍特別方略の大要を述べて曰く我南軍は昨日鶴來街道に於て敵を拒ぎ、漸次退却して辰口に抵り、日没に會して此地に舍營せたり、依て敵の來襲に備へんが爲めに、第一第二中隊を、前哨中隊として、派遣せらるる者なり、土人の報告によれば、敵は火釜村附近にあるもの、如し、而して其發したる斥候の如死者二三を認たり、依て第二中隊の第一前哨中隊となりて右翼を第一中隊は第二前哨中隊となりて、左翼を警戒すべし、と第一前哨中隊の、直ち

爲し、其左翼は遙くに辰ノ口本村を中心として散開せる第二前哨中隊に右翼と連絡せしめ、警戒をさし、怠ることなし、星光を借て辰器を驗すれば尙四時、星斗漸く光芒を減し、曉寒肌を迫りて峻烈裂くが如く、手足も淡ひし、曉寒肌を迫りて峻烈裂くが如く、手足爲め感喪失はんとせ、驚死に視線を拭へば、何事ぞ銀霜白く地上を横り、糝糊たる滿眸の山河班々白砂を布けるの觀ゆふんとは、歩歩整然霜水響を發して、足痕徒らに地上に印す、試に劍佩を撫すれば、白露滴りて握るに堪へず、曉風一陣面を吹けば壯士竦然として立ち、人をして覺す遼東に馳驅せし我六師の苦節を追懷せむ、然れども前哨中隊は在りては、火に向て暖を取るべくもあらざれば、貔貅皆腕を撫し、寧ろ一刻も早く、彈雨の間出入せんことを希ひし、戰機未だ熟さず、戰闘開始は拂曉を待たざるべからず、他亦夜間戰闘に最も兵家乃避くる所に於て、徒らに兵を損するの恐れあればあり、乃ち互に警戒に餘念ありしに、戰機は刻一刻と迫り、戰雲漠々として兩軍を覆ふ、是に於て南軍第一前哨中隊の、第一小隊を派きて右側の丘阜を占領せしむ、全丘松樹雜木密生して甚だ形勝

の地さう、蓋し此丘は今日戰鬪の天王山と云ふべき者あり、南軍に在りては特に利害を感ずべき者あり、此丘に在りて若敵手に落ちんか、南軍は殆ん其咽喉を扼せられん如く、甚だ困難の狀勢に陥らざるべからず、故に此占領は南軍に向て、千鈞を加へたる者と曰ふべし、北軍も之を争ふの念なきに非りしも、時間の不足は十分なる作戦計畫を施すことを許さず、加ふるに其兵多からざれば一旦之を占領するも、到底火釜間の連絡保ち難きを察し、恨を吞んで空しく南軍の占領に委棄したり、

時に天色明けあんとて、東天漸く白く、江霧搖曳として山河を包み、曉鐘の響は長く江水を亂して天地の寂靜を破り、草木烟を吐て鶏犬啼く頻なり、曉色乾坤に溢れて爽氣人の肺腑を洗ふ、乃ち鞭聲蕭々夜渡河、曉見千兵擁大牙の感愴悵然堪に難たり、是時に當り北軍の頻り不尖兵を三ツ屋村附近に發せ、丘上林間を搜索するると益嚴密あり、四時三十分辰ノ口本村に於て敵を發見せるは情報、櫛の齒を挽くより急なりければ、直ちに左側なる古藥師山上の一隊を派し、殘餘を水田の間を散開して、戰鬪隊形を取

り、端なく射撃を開始せり、斯くと見たる南軍は、兵を進んで直ちに戰鬪隊形に移つり、第二中隊の第二第三小隊は、水田桑畝の間を散して、右方丘上の兵と、左方辰ノ口村本村の東北端に展開せる、第一中隊の右翼との間に點綴して、全隊の連絡を通じ、蜿蜒長蛇の陣を爲す、丘上に在る者は、松幹雜木を楯とせ、田郊の間に在る者は、畦畔桑樹の陰を據りて身を潜め、待ちも待ち、堪ぬ堪たる満身の勇氣を鼓して、爆然火蓋を切て應戦せり、砲烟霧々曉霧を混じ、銃口より發する火光は閃電を欺き、二百の銃聲を幽林廣野に轟死、般々たる響は地軸に徹し、山精泣て河伯哭す、平靜山河の夢は忽ち破れて、茲に修羅の巻を現じぬ、中原は鹿逐に誰の手にか落ちんや、北軍は暫時主力を南軍の前面に注いで進撃するの狀勢なりしかば、南軍亦之に應じて防戦す、初め南軍の將士皆以爲く北軍の右翼は已に地の利を失ふ、土地抵濕より、小流進路に横はり、蔽障を以て身を隠すべき者あざれば、必然主力を其左方に集め、藥師山方面より進撃するをかんし、果せる哉、北軍の一小隊を放て其前兩田畝の間を展開し、南軍の左翼を牽制するの策を取り、更らに一隊を其左方に派して、古藥師山の要地を

占領せしめ、以て丘上に陣をる南軍の右翼を控制すると同時に、又山下の味方を掩護し、之を去て十分なる進撃を逞せしめんとす、南軍の第二中隊は、左翼を第一中隊と力を協し、能く地物を利用して、首尾相應じて、敵を防ぎ戦正に酣なり、俾り切つる北軍は、飽くまで丘上の南軍を撃退せんと欲し、其第二小隊を左方山上を増加し、猛烈荆棘を排して益々前進す、丘上の南軍亦第三小隊の二ヶ分隊を増加し、應戦奮闘甚だ力む、此時に當りてや丘下の兩軍亦大に接近し、

の勢を以て、南軍の北側を突かんとす、南軍之に應じて逆撃し、兩軍の喊聲天地を動かし、其相接するや、劍芒閃々電霆を欺き、兩軍の將士皆虎奮獅鬪す、是に於て喇叭一聲休戦を告ぐ、實に五時三十分なり、顧みれば砲烟消去て江霧尚ほ深く、山河靜平を復して又流血は慘なし、麥籠菜田霜白ふりて壯士馳驅の足痕獨り班々たり、少時休憩の後、歩武蕭々として、六時二十分宿營地に歸へるや、磯田大隊長、各幹部を集め、之に告げて曰く

本日の演習に就きて云ふべきこと多し、然るに諸子の勞を察し、講評は之を午後延引し、今又別に少しく述ぶる所あらんとす、

士皆殊死して戦ひ、山岳爲たに動く、人々血を飲み傷を嘗むるも、將軍一呼すれば創痕皆立ち、天地爲たに振ひ、鬼神爲たに哭す、應勢已に斯の如くなるを以て、寡兵なる北軍逡巡、空しく時を移して決する所あざれば、徒に兵を損じ、遂に南軍重圍の中に陥りて死地を踏まざるべからず、此場合在ては、退くも不可、守るも不可、若くは突進、數を天に委し、生死を賭して勝敗を此一舉に決せんには、猛烈火の如く熱せる北軍は、己に心に突進を期したり、是に於て其第二小隊をして、再び山を下りて中軍に加へらしむ、鐵笛忽ち砲烟を貫ぬき突撃を急奏するや、全軍突撃に移り、田を涉り、流を亂し、堤障を踰り、迅雷烈風

とす、本朝召集の如き迅速の點よりも、寧ろ靜肅の點に於て、大に缺如する所あるを見たり、此の如き甚だ注意を要すべき點ありとす、而して今朝集合の際、諸隊中比較的迅速なりきは、第二中隊第三小隊及第一中隊第二小隊なりとす、又今朝の演習はなほ引續き午前中に亘らしむる豫定なりしも、砲戦久しきに彌り、從て空砲の欠乏を來せし等、演習として

の経過上面白かぶる点ありしを以て、止むを得ず俄然中止の命を下したるなり
 と、一同宿營に就き、朝餉を喫す、朝敵東嶺ホ上りて、一空纖塵なし、魏繇皆勞を忘れ、或ハ互に團欒して襟懷を開き、兵と論ト戰を談ず、彼等一び陣に臨めば、干戈を以て相見ゆるも、元は一校の同窓其一堂に相會し、臂を取り談笑するも及んで、和樂の快津々として盡さざる者あり、眉宇軒昂肩を峙つる者は、其軍功を誇るなり、大息天を仰て扼腕する者は、窃か後勳を期する者ぞ、敗軍の將大ハ兵を論じて、功臣爲めに屏息す、或ハ荐どに浴を貪りて鐵骨を慰め、悠然と去て舞雩の樂を語り、更に漏刻の移るを知らず、正午舎營命令發せられ、午後五時迄當村附近の散歩を許さる、是に於て三五群を爲して宿營を出で、或ハ田徑を過ぎ、澤畔に吟じて詩情を遣り、山路を踏みて、丘陵に上るは、春光朗くにして大氣温々綿の如く、松筠颯々として獨り古今の餘音を傳へ、山櫻數朶空しく陽春の輕風ハ句ひて啼鳥林に滿ち、溪水落花を浮べて水流緩く、人を去て轉た武陵桃源の奇境と連想せしむ、魏繇皆此烟景に酔ひ、或ハ詩を賦し歌を詠じ、畫筆を弄して其景を寫つし、或ハ悲歌長嘯して其逸

興を漏らし、又落日の西丘ハ沈むを知らざるあり、既わして新月霞を吐て藥師堂邊ハ懸れば花影爲めに朦朧たり、乃ち壯夫皆低回して花月の詩を歌ふ、九時半人員の点檢終るや、一同皆非常召集を慮りて、深く前鑑ハ省み、襪を着り背囊を枕とし、卒ざると曰は、我先登れ感賞ハ倍づらん者と、劍を提げて眠し就きしこそ殊勝なれ、十四日 午前八時辰ノ口を發して金澤に向ふ、九時手取川ホ來り宮内渡を過ぐれば、昨夏洪水の汎濫今尙慘景を留め、兩岸の田畝砂底に沈んで野に青草なく、落々たる舊堤所々ホ壞れ、人をして徒に惻愴の情を起さしむ、顧みれば新堤蜿蜒遙かに雲際に連なり、規模雄大頗る人意を強ふるに足る、渡舟小にして十數人を載するに過ぎざれば、先渡隊は三反田村端ハ憩ひて、后隊の全く至るを待ち、十一時半此地を發せ、時に天色黯淡として南風砂を揚げ頗る吾人を苦しめ、令時半松任に入れば春雨蕭々として降下し來り、何時晴るべくも見ぬざりた、已にして金澤に入り、赤色煉瓦の巍然たるを見て、又降雨を覺ぬざりき、四時隊伍堂々、我敬愛する教職員ハ迎へられて校門ハ入り、一同校庭に整列するや、大隊長豪雨を犯して隊ハ中央に立ち、昨朝の演習

及び今回の行軍全体に就き、講評と述べられたる所次の如し、

第一 前哨及戰鬪に就て

一、昨日の演習は、最初豫定せし演習(夜間より拂曉に亘たる光景)に就た、時間ハ不足せし爲め、計畫にも變更を來せし所あり、兩支隊の畫策及動作に就ては同意し難たこと多く、併し今は其大要のみを述ぶるよ止め、尙詳細の事は各中隊長へ説明すべし、
 一、南軍の前哨配備、地形の利用及敵より攻撃を受けて後の動作と、先づ其當を得たる者と認む、

一、北軍が火釜村より、南軍に向ての行進中、其途上ハ於ける搜索ハ疎漏なりしを免れず、且敵に向ひたる后、地物を利用せる敵ハ接し、地勢低濕、加ふるに前面ハ水流の横はる如た、不利ある地に散開して、長時間射撃と交へたる如た、大ハ不可あり、此の如た地勢は北軍に取りてハ甚ハ不利よしして、若し止むまゝくれば、寧ろ一旦退却して充分なる距離を有ち、徐るに之が適宜の處置を施すべし、余は初より左方の山上に於て、兩軍の衝突起るべきことと豫期したり、又一般に其號令ハ歸せず、散

兵の如きも殆んど其隊形を爲さざるの嫌ありき、併し是畢竟前に述べたる如く、或は豫定せし時間の不足せし爲めからん、

第二 宿營及途上行軍の狀況に就て

一、宿營の狀況に就ては、從來に比して格別惡しきに非るも、夜間及黄昏ハ在て、最も靜肅を保持せべたんとを、各幹部とより豫め注意せしむるに拘らず、稍々喧噪の嫌ありしは、宿營の狀態ハ就て、大ハ其價値に關する者とす、之れ畢竟諸子が真正なる行軍の目的を、輕視せしに非るなき乎、

一、金澤を發し鶴來を経て辰ノ口に抵り、辰ノ口より松任を過ぎて金澤に歸着せ去迄の途上行軍は、頗る可なりしと雖へども、已に前段の欠点あれば、其得全く失を補ふを得べきや、要するに今回の行軍たる、從來に比して格段の進歩を見出すと少かりしは、甚ハ遺憾とせる所あり、云々
 右終て隊を解かれ、校長閣下より配與れ菓子を得、各校庭を辭して歸路に就く、是に於てか行軍全く終を告ぐ
 余輩不肖今や此行軍記事の筆と擲のに當り、一言以て諸君に訴へざる可ざる者あり、我校

六百の學生諸君よ、諸君は其重大なる責任を知り、高級なる位置を自覺するか、位置を問へば國家高等の學校に在る者、天下の耳目は諸君の一身を集り、其云爲の如何は大に社會を動かさずべき者あり、其責任を問へば學術の光榮を發揮すると同時に、防國の務を有する者あり、不幸國家若し一朝警を傳へんか、諸君は筆を投じて國民を指揮せざる可らず、治に居て亂を忘れざるは是れ士に取る所あり、此演習行軍の如き此間の消息を傳へて諸君を利すること蓋し鮮少なからざるべし、且つや本校の行軍は如きは學校行軍として、最高にして又最後なる者、中等教育社會の行軍に影響する所甚く大なる者あり、諸君幸ひに此責任と位置とを自覺し、自后滿腔に熱誠を以て、此行軍を迎へられんことを、

行軍瑣談

ひつろしき行軍記事を書き終へぬ、いざや秃筆を取り直して行軍瑣談を綴らん、三日の期短しと雖も、非常召集と終日の滞留と蓋し異數なり、其わたりの逸事奇談定めて多かりまかふん、されど皆々出づ惜みせら

るゝなるり、一向に聞のして呉れず、漸々に去て書き集めたる此數篇、何んだはまらぬことばかりと笑ひまふな、つまらぬハ種を得るにつまり故なり 記者申す

また行くぞ

會て御嶽の峻坂を登り立山の懸崖を攀ちて、健脚の譽高死河原阿部の諸氏、當春季休業の間、能登越中越後地方を跋渉す、行程百餘里十一日の夜歸校し此行軍のことを聞かや、餘勇を鼓して直軍に加はる、問ふものあれば嫣然顧みて曰く、亦行くぞと毫も疲勞の狀なし、衆更に其健脚を嘆賞す

言葉た、うひ

手取川の役、北軍の某中隊長部下僅かに數名を從へて、前面を偵察せし、南軍の一卒偶々山上茂林の間より之を發見せり、發砲して之を脅めさる、彈藥既に盡きざるを如何せん、而も彼我の間僅かに數米突、乃ち聲をのりて曰く、そきに顯れ給ぬは敵の御大將と見奉るを憚目か、餘り長く其様ある處に立ち給は、砂にてもかけ參りせん、かく申す某ハ桓武天皇百代の後胤(ともいハかんた)と、蓋し敵ハ言葉をかくる、近代の戦史なきところ

暗中摸索

十二日の夜、某分隊員一室に眠る、室に燈火あびて甚だ明かあり、一卒あり毎夜火を消して眠るを習慣とす、今や火光目前に閃きて眠ること能はず、思へど、衆既に熟睡せり、燈火の有無何ぞ、夜三更會々非常召集あり、室内黒闇々として咫尺を辨せず、混雜言語に堪へず(闇仙子投)

福井書記の嘆

非常召集の後、即演習の命あり、第三中隊北軍とかりて一先づ火釜村に赴く、夜暗くして咫尺を辨せず、野徑亂石高くして行歩頗る困難、加ふるに、數條の小川道に横よりて危険甚し、而して道を照す所のものは曹長が携ふる所の一提灯あるのみ、福井書記軍に従ふや、何處より工面一來りけむ、同じく提灯を擧げ獨り思慮なく、列中の士卒皆屢々石に躓きて行歩に悩む、我は則ち然らずと、頗る得意の色あり、途に橋梁破壊せる所あり、中隊長曰く、君暫く此處よしまり一隊の通過を容易ならしめよと、乃ち命の如く去隊の後よ從ふ、幾くなくして獨木橋ありて危険を極む、先登聲あり曰く、提灯早く来てくれ、提灯かり足と、書記乃ち田畝道なきの所を馳驅して、先登に達

を再び橋の番人となる斯の如きもの再三、大に迷惑し嘆じて曰く、匹夫罪なし提灯を抱いて罪あり、今にして始めて古人我を欺るざるを知ると、道平坦とありて、消燈を命せられ、爾來無用の負擔となる、嘆益甚し

好演劇

辰口村の役、北軍支隊長第二小隊に突撃を命ず隈川小隊長命を奉りて一旦山麓に下り、部下を去て着剣せしめ、將一舉して前面の丘陵に突撃せんとす、恰も此時南軍の佐々木小隊長も亦部下を率ゐて丘上に顯る、互に敵の近けるを覺れりと雖も、其多少を知らず、乃ち隈川小隊長山徑を上ること數歩、佐々木小隊長下ること數歩、其間僅かに數米突、互に足を繞りて首を伸ぶ敵の動靜を窺はんとす、彼一步は一步益相近づきて互に知らず、測量手と書記と傍觀して曰く丸で演劇のやうぞ

聲の戦死

同役北軍進んで攻勢をとる、敵頗る優勢加臨るに地我に利ならず、頗る苦戦せり、松田支隊長厲聲叱咤劍を擧げて號令し、攻戰大に力む、戰終り合營に歸るや、支隊長聲全く頃れり、傍人見て(否聞いて)相耳語して曰く、悼まらざる哉將軍の

御聲、名譽の戦死を遂げたりなりと

地藏尊

一卒あり、常小言行の老人ぶりを以て
學友間に知らる、辰口村に一大石地藏あり、もと
金澤小立野あり、一年にして移せるものあり、
卒曰く久し振にて地藏尊を拜す、温顔玉の如く
舊よりて舊の如し、吾生老大學業未だ成らず、
徒々に歲月の匆匆たるを嘆ず、嗚呼石佛のイム
モータリチーも亦羨まじき哉と、其言頗る眞面
目なり、聞く者傍を顧みて曰く、また始まつ
(優々生投)

あぶない

三反田の渡船、粗小を極め多人數を載せよば沈
没の虞あり、第二中隊先づ渡り、次は本部員渡れ
り、渡り終りて進むと數十歩新築の堤防あり、
之に上るため斜に一枚の幅狭き板あり、踏めば
上下お動揺一人を落さんとするもの、如左板を
渡るものあれば、堤上お又銃休憩せる人々頻り
に拍手喝采して、アブナイと叫ぶ、蓋し人を
あてさせんとするものなり、磯田大隊長破顔微
笑板を馳せて堤に躍り上り、今井教授は渡り場
に事ありと思はれけん、頻に後を顧み、木村
教授はうるさうと思はれけん、泰然として獨

遙く迂回す、是に於いてう喝采彌盛んなり(ワイ
連寄)

かえり右

松任より金澤に向ふ途次、各隊軍歌を高唱し聲
頗る囂然たり、時に列中より叫ぶものあり曰く
「かしこ右」と、衆其意を解せず、何等の通行人
吾人の敬禮に値まると、等しく右顧すれば、何ぞ
圖らん街道の傍、數株の櫻樹花正に爛熳として
、芳を闘はし妍を競ふの状、實に一幅れ好畫圖
あり、いつしの軍歌の聲止み、衆皆快哉を呼ぶ(愛
花生投)

千金丹

衛生部助手腕に赤十字章を附し、隊の後より従ふ
路傍に群集して行軍を見る兒童偶々曰く、後ろ
から千金丹が來ると、某之を聞くや、以て衛生部
を評せる言となし、咳て曰く、失敬なことを云
ふと、後ろより眞の千金丹賣の來れるを知らざ
るあり、傍人皆笑ふ某も亦苦笑す

天狗壁の九郎判官

手取川に役、南軍丘陵の背後に據りて天險は利
を占む、丘角を繞りて南軍に通ずる唯一の道に
と丘角の上既に敵軍のあるありて、流石勇猛な
る北軍の殿原も、生田の東門からぬ大手よりは

責めあぐみ、乃ち一隊を派し天狗壁連脈の險と

命の保證

夾撃の奇利を占めんとす、一將命を奉じ兵を引
て山に登らんとすれば、奇峭壁立、山皆裸体にし
て物の攀づべきなし、彼大に苦しみ奮躍一番辛
ふとて先づ上るを得、岩頭に立ちて顧みれば從
ふ者僅り三騎、乃ち叱咤大に士卒を勵まし突
貫して上らむ、丘下れ一士笑て曰く昔者源軍
の騎隊鴈越を下るに惱み今は我軍の歩兵天狗壁
を上るに苦む、嗚呼行兵は難千歳を経て異
る所なしと、已にして丘下の本隊突撃の喇叭を
急奏するを聞き、彼喧嘩を應て丘を奔下り、頭
上より敵軍を衝きて一泡を吹かせたり、一卒此
狀を見て嘆じて曰く、嗚呼是今日の源九郎判官
鴈越を再演したる者なりと、傍人忽ち横槍を入
れて曰く、成程御尤の様が舊史にて義經爲人
精悍短小とあれど見給へあの先生と雲突く許り
れ大入道に非らずや、卒屈せずして抗すらく君
言ふを己先よ、義經曾て鞍馬山の天狗より兵法
の虎れ巻を授かりされど、あの先生は今直々天
狗壁に上りたることなれば、義經も段々進化し
たるものあるべし、且つや赤子も十年たてば十
歳にさる、八百年たつた義經殿ちつとハ身丈も

のびたらう、(紫溟)

手取川の役、南軍川を夾で陣し、戰鬪正に酣
り、硝煙の天地を包み、砲聲山河に震ふ、村夫三
四南より來て此狀を見、すは一大事起りたりと
や思ひ々々、怖惶措らざる者の如し、會南軍の一
將連りに叱咤、士卒を督して傍よりあるあり、彼等
恐るる將軍の馬前に跪き稽首して曰く、此所
を通りましては怪我致しますまいかと、某將笑
を湛して答ふらく、大丈夫だ貴様達の命の儀と
僕が保證する、

蕪婁亭の恩

曉戦の際、南軍前哨を張るに當たり、第一前哨中
隊の一部は丘陵一農家の前に屯す、歩々ば左程
にも感せざれど、かく静お立ち留りては、激烈
なる今朝の寒氣中々堪ゆべくもあざれば、窃り
に農人を起し、其爐に薪を投して火を作る、家
れ者共我等の風体を見て措駭言葉もあし、我等
一向其邊お關係なく、土足の儘どしどしと床
を踐んで爐邊に集まれば、室狭く人多く、薪濕り
たるが上は、戸をしめ切りたる事とて、烟は波の如
く渦をなして家に満ち、人々徒々に涕泗を催ふ
すのみにて火の遙に前方にあり、唯僅の火光

を眺むるのみならず暖味又興かる者甚た少し、去れど一人の不平こぼす者もなく、戀々唯片時も永く留らんことを願ふ、一生あり突然叫んで曰く蕪婁亭の有りがたみ今日思ひ當れりと已まうて前哨派遣を命せらる、此家と去るに臨み金數十錢を醸出し農夫と酬ふ、

曉天の長嘯と楚歌の聲

辰ノ口の役、第二中隊の右翼前哨を張る、中隊長乃ち一隊を派して右側の丘阜を警戒せしむ、中の一卒あり、體軀魁岸、意氣豪爽、力能く百貫目の鐵挺を百揮するに足り、劍の一人の敵と雖も尙能く葉武者數十を仆すの腕前あり、彼常に自ら項王に私淑す、音吐又高朗、吟詩に妙を得其技超群、蓋し其堂奥に上れる者の、是を以て四高の青衫又彼の ぞ知らざる者なり、彼今遣中にありて右側の丘阜を警戒しつゝ、進む、時に辰器尙四時、星光淡くして炊烟未だ起らず、白露江横にはりて烟夢野に滿ち、爽氣乾坤に磅礴して、殆んど塵寰を脱しふるの思あり、彼感迫まり、興湧きて自ら禁ずる能はず、乃ち低聲一呼して曉風に長嘯すれば、草木躍りて白雲舞ひ、人をして茫然自失し愴然として悲しみ、魂神の爲めに飛去するを知らざらしむ、昔者項王虞姬の楚歌に泣

て、今之其味方をチャームす嗚呼是又何等の對照乎(紫溟漁郎)

第二回春季大競漕會

處は何處蓮江の流、時は陽春四月十七日、我第二回春季大競漕會は、豫期の如く、碧波漾々れ間に催されぬ、日頃、蓮江の晨水、北海の晩潮に鍛へ上げたる健腕、其如何に壯絶又快絶、總十九回の競漕として千秋樂を奏せしめしか、調劣の筆能く盡くす所に非るも乞ふ以下記する處に徴して其一般を知り給へや、宿雨一霽、東風徐徐に春景十二分、橋上の朝景色、淺緑に萌ゆる初めたる柳の梢靜かに、桃花の色好く咲きたる露を帯びて匂とく、川此面は淡靄の網を蒙り、水紋微かに動きて曙光の色を彩る、何等壯快の春晨、閑雲流れて、霞に籠る鶯の遠音さへ、何れ萬福の種からぬやあき、豈唯會員諸氏の喜のみならん、八時といふ頃、嚙々たるベルは、水面を亘て開會を報しぬ、蓋し今回の會場たる、昨春稍や狹隘の嫌あざしと、避けん委員の御注意もて其對岸に設けらる、旗林風お翻られて翻る處、幾棟の假小屋、賞品授與所あり、來賓席は隣り茶店あり接待

所と軒頭相並び、競漕者の支度所と帷幕を繞りて一隈おあり、壯麗記す可くもあらず、既にして第二のベルを鳴り且つ、響お應りて撫腕せる諸氏は三艇に分乗せり、衆眸は均しく之に注げり、各艇獨力にて發漕点に漕ぎ上りぬ、衆已に氣遣へり、能く觸接の憂多からんかを、蓋し今回の競漕川の狭巾なるお拘はらず三艇相並べ觸接も瑣瑣とせずといふに有ればあり、忽然硝煙の上りぬ、觀衆は動搖げり、艇影如何にと見れば、赤先づ前に青白之に次ぐ、見る／＼青勢俄のお得て中流に漕出ぬ、赤亦さる者右流に出て、今も赤青二舵の競漕たりしも、而も大勢は既に定まりまか、勝は遂に赤小歸之ぬ、青の四番流權せること、舵手のコースを左流と取過ぎし亦故なだに非ず、以下勝者の氏名列記せん

舵手 整調 五番 山縣平作 糸井仙之助 松原 武 増井佐藏

三番 二番 船手 永野八郎 宮入 義雄 吉川三雄司

第二回 スタートを距る百五十メートル、青は俄かお先づ白を抜のんことや、強漕を以て舵行しぬ、果然白の觸接の禍を蒙れり、如此する前後二回、遂に赤をして獨舞臺の吞氣を演ぜしめぬ、

高松 勇 高梨恂一 米村敏郎 山科祐二
元田龍三 橋 左内 宇賀治修三
第三回 一位に在る者白にして、赤之に次ぎしも、青亦決して慢る可くなく、見る／＼赤を抜で白も逼りぬ、而も白と平然更に噪げる色なき、蓋し自ら期する處あるが爲か、果然青赤の二艇觸接も投せらる、白得意氣に悠々コースを左流と變じつゝ、其對手を待つ者の如し、既にして青赤亦漸く近死ぬ、僅りに尺余の差に在る三艇、共に最後のへびは各艇より發せらるぬ、惜哉青艇整調其人を得ざるも、總して權の不調、爲に審判船上砲煙は白旗を吐死ぬ

舵手 整調 五番 浦井鏞次 岡田光次 上田範次 植木隆太郎

三番 二番 船手 田中秀夫 瀬戸孝一郎 保坂正次

第四回 青の獨舞臺第二回の二の舞を演じぬるに過ぎず
舵手 整調 五番 近藤常吉 中村與二郎 早川外吉 水上佐太郎
三番 二番 船手 山本孝男 安藤 豊 金森種次
第五回 發して數秒、三艇大差おかりしも、既に

して白逸早く漕拔ぬ、彼ハ勢倍せり、端なく一大頓挫は二番の流權又流權に由て招かきぬ、赤勢亦進むに從て衰ふのみ、於是か期の熟せるを見て、青艇奮起しぬ、強漕一番突進せり、權能く調ひビツチ亦宜きを得、然れども白亦勢衰へしに非ず、舵手其人を得て而も整然、呼吸宜きを得て一進一退、稍や青の憾を買ひも、コース特に伸るの理なく、吋時已遅し、號砲ハ無情を告げぬ、青白ハ先づ僅々尺

- 舵手 整調 五番 四番
- 朝長勘十郎 岡田光次 中村光吉 阿部莊二
- 三番 二番 舳手
- 鷹取鶴次郎 兒島亮吉 倉茂範行
- 第六回 ビツチ早きに終始其權の亂れざる、特に整調其人を得たると、青の勝蓋ハ偶然に非るなり赤艇の舵手其度佳おして、漕手亦能く勉めしかど、舳手の轉倒與て力ありり、白艇は到底二艇に及ばざること遠し
- 舵手 整調 五番 四番
- 青木澤五郎 後藤正堯 栗本貫一 白井精一
- 三番 二番 舳手
- 平澤象二郎 堀覺太郎 永野八郎
- 第七回 青勢衰へし非るも、ハウルお挫かれ

しのみ、白亦激しきハウルお、艇損じて健腕又施そよ由なく、空しく舷を叩いて長大息するのみ、不圖りき二艇のハウルに非ずして、迭りに遊船にハウルせんと、赤の亂權蛇行、聞苦しき曳々聲して、決勝線に入りし御手際を見れば、遺憾さこそと思ひ遣らる、不知共お青を舵手に歸するの止むなきのを

- 舵手 整調 五番 四番
- 吉川貞二郎 朝長勘十郎 阿部政二郎 高梨恂一
- 三番 二番 舳手
- 高橋亨一 野崎 安近 高見 茂
- 第八回 是は之當日の一奇觀、見る者をして神逝き魂飛ぶの思あらしめぬ、初の程は青最も勢強かりしも、中原の鹿、やむく慢り難き赤に握すべきと、底意地悪き舵手ハ、徐々に己が余勢を示しつつ、赤をして左流へ岸へ々々とたしゆきぬ、無殘遂に赤は敵の術中に陥りしと思ひし一刹那、赤もさる者此處命の瀬戸際と、舵手ハ雙手を擧げて奮起せり、へびの命は下りぬ、果然舳手ハ轉じて敵背を掠れり、發矢其艇体ハ衝かれし青と、余勢爲よ迸て怒濤の如く、焉々舵手が一健腕も能く支ぬるに暇あらん、吋已遅し、青艇は狂奔して、沙岸に衝納し萬事休矣、於是禍を以

て福も變ぜし赤艇、今ハ復た眠れぞと思ひし白艇、何ぞ計らん奮勵一番、飢虎の如く突撃し來り、舳既に相並ばんと、最後のへびは同時に舵手より發せられぬ、孰れ劣らぬ龍に虎、赤と呼び白と呼ぶ喚聲、水爲に湧かんとす、而も桂冠は遂も赤艇も落ちぬ、惜哉白の舵手、ウイニングラインの斜あるを氣付き、少く舳を左方に取らんまは、遅るゝと見へて烟は白旗を吐くものを、

- 舵手 整調 五番 四番
- 小藤孝徳 住田寅二郎 戸川文二郎 近藤雋逸
- 三番 二番 舳手
- 高橋清一 長谷川勝三 高桑確一
- 第九回 青の勝にて、格別目覺しに競漕ならざりしハ蓋し數の定まれるに依るの
- 舵手 整調 五番 四番
- 久保田整 小藤孝徳 上田範次 林 直
- 三番 二番 舳手
- 平澤象二郎 堀覺太郎 松原 武
- 第十回 各艇過半、本校チャンの乗組あれば、此處一段の壯觀を博せんと思ひしも仇や、有繫も古狸を以て自任する丈、其一舉一動、皆其度合宜したを保さし、意外呆氣さきお似て噓しおりは、勝者赤艇の面々と

の御手際

- 舵手 整調 五番 四番
- 杉本勉吉 水木常信 小松然三郎 白井精一
- 三番 二番 舳手
- 佐藤芳太郎 三谷義種 金森種次
- 第十二回 (來賓競漕) 出でざるお何事か、漕がざるお何れも、觀衆ハ浪立てり、赤勝て白負くるかの喚聲耳爲お聳なる、無理ならじ、今や師範(赤)と尋中(白)二校の漕手と、迭りよ己が秘訣を畷々せるをや、水上來賓の嚆矢、不知初陣の功名、桂冠果して何れに歸するを、遙のお硝烟は上れり、赤艇逸早く右流に漕出ぬ、白亦焉ぞ屈せん、一漕一進共お苟もせず、端々も白の舳手ハ流權し、勢頓お挫かれぬ、見て取る赤艇、機失ふ可らずと、果然舵手の嚴命は下りぬ強漕又強漕遂お白艇のコースを奪り、白艇今も死力盡

- 舵手 整調 五番 四番
- 鈴木小一 曾根廉郎 石黒 健 吉村盛男
- 三番 二番 舳手
- 大森保之助 中村與一郎 田中秀夫
- 第十一回 青の能く赤のコースを奪て、中流に強漕し終始白艇の行路を妨げつ、中途其三番の流艇も瑕とあらで、安々勝を握さし、舵手の御手際

して暴進に意決去たらんか、舵手其人の雙手は
 擧りぬ、然れども逆髪朱眠狂せん許りの心も操
 撓の能き意氣と相隨とざるを如何せん、又もや
 白の二番は轉倒せり、一漕又一漕益々亂る、大
 勢既に定まらざる、吁事已も休矣、只見る審判船
 上赤旗の風に翻るを、要する赤艇亦白艇に勝る
 遠きに非ず、發するに先ち觀衆は擧て白艇の必
 勝を期せしも、如く意外、よし白艇の整調其
 人を得ざるも、赤艇多日の練習豈之を凌ぐの余
 威おのふむや、言はずや、形と責任の避所に非
 ず、特に運用其宜況を待たのみ、運用の妙は一心
 に存するを、勝者誇るに足るも、敗者亦何ぞ耻
 づるに足らん、爰は名譽の諸健兒を録すれば
 赤(師範校)

舵手 整調 五番 四番

石坂三藏 本多藤吉 早本一二 熊田克雄

二番 二番 船手

中倉泰太郎 中村爲吉 若狭與吉

第十三回 (職員競漕) 百メートル(赤艇白艇
 に及びざること遠し、櫂の曳々聲と喝采の中お
 迎へられぬ、嘗て水上の各個教練を見るが如し
 と迄評せられたる諸氏の、見上げし腕になど給
 ひぬ、流濯、轉倒、臨時休、の三銘を擔る、御手

際も、今更お云はずもが、例に依て一段の興を
 添へるに、勝て義理も、茶店の祝酒に葬られし
 諸氏ハ

舵手 整調 五番 四番

佐野助教 宮川教官 蒲原助教 宮地書記

二番 二番 船手

今井教授 村田助教 丸山助手

第十四回 すいや一段の見物ぞと力まきし觀衆
 ハ鳴り出さぬ、見るるも恐ろしき荒船頭、總勢
 廿有余名、濫紙もて包める如き、裸体に赤輝の好
 配色、素より撰りて荒武者原、而も大傳馬お搦
 櫂を握て立ちし時の勇ましさ、北海の晩潮に銀
 へくし鬼腕、一つの力まき、騎虎千里、此擧握りつ
 ぶさでやは、諸も學生原の小腕立笑止と、いはぬ
 許りの形相亦一段と恐し、端艇のど見れば、是は
 又稚兒を馴染まん、孰れ劣らぬ花若殿原、優
 き中お凜々る風采、蓮江乃晨水も、練りて鍛へし
 健腕格するに敵なく、時失ゆるを慨せられ七
 撰手、流石も今眼前此強敵を叩へて、更も不足の
 面なる膽太さ、げにや猛虎に眠獅の件ふが如
 く、兩々相並で漕上りぬ、觀衆は猶氣遣へり、能
 く端艇の敵し難さかを、己にたてスタートの砲
 手は身構へぬ、用意の號令下れり、硝煙の空を

切て昇りぬ、一漕又一漕、和船の曳々聲ハ擊濤に
 和して如何お凄まじかりしか、端艇豈焉々徒々
 に噪がらんや、ロングステでデイーを以て悠々漕ぐ
 こと二百メートル強、時既お和船に先つ事三艇
 身、然もころこいはぬ許りの舵手の面もち、而も
 最后御定まりのへビーは、苦笑の中に發せられ
 ぬ、船端水煙を迸らて時からぬ吹雪を現せば、
 舵手得意のシヨートの命ハ次で下りて、神心更
 に爽快、怒濤早瀬となせて決勝線に飛入るぬ、時
 を費す僅のに四分廿秒、觀衆暫時鳴りも止まざ
 りき、いふ勿れ長程或は知る可はずと、七氏の即

秋澤貞猪 橋 左内 林 義輔

第十六回 禍變じて福とならざるもの、蓋し故
 なきに非ず、發するお先ち、浮標と流れて赤艇に
 禍いぬ、止むなく赤は一廻轉して、二艇に船を正
 さんとするや、多少漕手の力を損せしむ、硝煙昇
 るの時、猶艇又隋勢を得たる赤と、見る々々二艇
 に先ちて、遂に舵手の御手柄とありぬ、

舵手 整調 五番 四番

東郷 直 後藤正堯 野村淳治 吉川貞二郎

二番 二番 船手

藤田良平 稻垣文二郎 大津 胖

第十七回 (寄宿舎餘興競漕) 時習寮の專賣、抽
 籤を以て成る各艇の漕手、固よりシートは良否
 を問ぬの暇なく、稱して餘興といふ、見る者亦豈
 に餘興視せざるを得ん、笑聲を以て笑聲に終る、
 和氣霽々の間、艇と勝を握て咲笑せり

第十八回 (醫學部撰手競漕) 寧ろ單二分科競漕
 と言はんのミと或者といへり不知果して言の當
 れるや否やを、時を費す五分廿五秒、其ま之れ
 が爲か、兎にも角にも練習の効、赤艇(四、三年)
 れ勝負可もあらざ

舵手 整調 五番 四番

松村大吉 横山正夫 高橋享二 白木 質

二番 二番 船手

松村大吉 田宮春策 石黒 健

第十五回 漕出で、百メートル、赤艇にハウル
 いて僥倖せざる白艇、青艇を追ふて決勝線を距る
 百メートル、又もや之とハウルして、漁夫の利ハ
 遂に舵手の狼手段に歸るぬ

舵手 整調 五番 四番

松村大吉 横山正夫 高橋享二 白木 質

二番 二番 船手

中野玄次 白井精一 河合 鷺 北川健三

三番 二番 舢舨手
 橋 左内 生沼曹六 森田齊次
 第十九回(大學豫科撰手競漕) 時將に哺なふん
 とす、觀衆は半ば減せど、憐れ割愛の恨ハ早くも
 爰ハ告げられんとハ、然れども其競漕が如何に
 目覺ままのまかを思へば、此時此恨亦何ぞ若
 かん、いて先つて諸健兒を紹介せん
 赤、舵手 整調 五番 四番
 石黒 健 曾根廉郎 久保田整 高橋 堅
 三番 二番 舢舨手
 松村大吉 青木澤五郎 江間圭一
 白、舵手 整調 五番 四番
 鈴木小一 赤澤欽二郎 田中正太郎 田宮春策
 三番 二番 舢舨手
 大森保之助 小藤孝徳 高松 勇
 白艇逸早くもスタートへビーを以て漕拔さぬ、
 赤艇に先つ已に一艇身強、而も赤艇の平然たる、
 舵手得意比(落付々)の命下しのみ、泰然とし
 て動かざること山の如く、徒言苟もせず、大に期
 する處あるが如し、既よてスタートを距る四
 百メートル、果然赤艇勢頓又加かり、敵の中堅を
 指して突進せり、白艇亦さる者雙手を舉げて勵
 ましつ、赤艇がコースを壓せんとす、赤艇亦焉

ぞ敵意を恣にせまむるの迂を學ばん、漕一漕操
 撓宜きを得て、勇之倍せり、何事ぞ觸接の恨と波
 間に湧たぬ、接しては離れ、離れては接す、如此
 すること前後三回、白艇今は意急ハ舵手が髪は
 逆てど、へビーの嚴命は彼が雙手と共に下りぬ、
 一漕一進如何せん糧益々亂る、果然整調は流權
 一勢稍や挫られぬ、得たりとつけ入る、赤艇舵手
 彼が眼は朱を注げど、均しくへビーの命は下り
 ぬ、雲起ど風生ト乳虎又齧くは痛快、切迫して
 之電光を迸りして榮燦閃爍、水陸叫喚の聲山爲
 に崩れやせん、發矢寸餘の差呼時既に遅し、忽ち
 聞く號砲一發、白旗ハ風に翻ぬ、時を要する僅か
 に四分卅五秒、春風更に清く、江流更長し、時
 正に晚鐘六點、目出度茲に千秋樂は諸ハれぬ、松
 風寒く露落ること多し、落暉と遙峯に一角餘香
 を止めて、水村山郭半ハ黄昏、金城影依稀として
 見す々々消ゆるんとす、唯漁歌濤聲と和して急
 かるを聞くのみ、(露生記す)

附 録

行軍中の獲物

市村 塘 閑
 島 定 保 記

當第四高等學校までは、去四月十二日より二泊行軍野外演習を能美郡辰ノ口(山口村)附近に於て
 施行するが、予等其視察員として出張を命ぜられ、旁植物採集を其沿道に試みたり、行軍三日間
 と雖も第三日之山岳に縁遠く唯官道を素通せしのみあらば、採集を試みたると前二日間れみ、而も
 行軍視察員なる掣肘はあり、到底満足ある結果を豫期すべからず、聊り左に紀行一斑を擧げて
 諸君に一覽に供せん。

十二日午前八時隊伍整々校門を出づ、霖雨既に霽れ旭陽輝々心活動す、聽て軍隊市街を離れ郊外に
 出づれば、一望の田圃未だ全く春色整はずと雖も、麥の穂々として露の滴らん許緑に、アブラ菜は
 當り眩ゆき迄に黄なり、田澤れ白さはタネツケバナの花盛なればあるべし、山嶽亦未だ緑ならざれ
 ども、色自ら變せるが如し、地黃煎、圓光寺、窪諸村も譯なく過ぎ、額谷村に至りて、予等隊を離れ倉
 が嶽に登る、嶽村に至るの間遠くは江能二郡れ平野を望下し、近くハ蜿蜒せる手取川と共に石川の
 諸村を脚下に見る、廣野に諸村の散在せる状態も海洋も島嶼あること疑はれ、源平島、水島矢頭島、
 向島、漆島、森島、明法島など矢鱈に島名多きも理りありと思へり、已として山間水清き處ハ於て
 晝飯を濟し、嶽を辭して月橋村ハ降る、斯くて鶴來に向ふの際、右方に當り砲聲盛み起り、直に隊は
 所在を知る、急ぎ河岸に至れば戦正に酣なり、乃ち舟を雇ひ手取川を渡り本隊と合して午后五時半
 辰口鑛泉宿松田屋に投宿す、此日の獲物見物概ね左の如し

しやうくべいのめ Helophopsis brevicauda (花) (百合科)

- いしがしら Blechnum spicant (芽胞) (水龍骨科)
- かんあふひ Asarum albivenium (花) (馬兜鈴科)
- しゆんらん Cymbidium virens (花) (蘭科)
- せんぢをいふらん Anemone altaica (花) (毛茛科)
- せんぢをく Hamamelis japonica (花) (金縷梅科)
- うたこゆり Erythronium denscanis (花) (百合科)
- つるありあうし Mitchella undulata (果實) (茜草科)
- るびしちぢ Rubus trifidus (花) (薔薇科)
- かたすげ Carex morrowi (花) (莎草科)
- じぎにひぢい Carex decumbens (花) (唇形科)
- せんぼんぢぢ Gerbera anandria (花) (菊科)
- せんぼんぢぢ Saxibraga cortusaeifolia (嫩芽) (虎耳草科)
- なるこまげ Carex curvicaulis (花) (莎草科)
- うすゆり Liliun cordifolium (嫩芽) (百合科)
- こぼぢも Fritillaria japonica (花) (百合科)
- ひめかぢみ Schizocodon ilicifolius (花) (岩梅科)
- たうげしげ Lycopodium serratum (芽胞) (石松科)
- はうりぢぢ Epimedium maeranthum (花) (小蘗科)
- くぢぢくしだ Adiantum pedatum (無胞) (水龍骨科)
- もぢぢのせしだ Asplenium incisum (芽胞) (水龍骨科)
- のあらん Metanarthesium luteo-viride (嫩芽) (百合科)
- ゆづりな Daphniphyllum macropodum (無花) (大戟科)
- こぢをたじーだ Aspidium tripterum (芽胞) (水龍骨科)

- むらさか Purga japonica (花) (山茶科)
 - あぢぢぢー Cornus kousa (花) (山茱萸科)
 - あぢぢぢぢ Daphne pseudomezereum (花) (瑞香科)
 - むかんぢぢー Irunus niqueliana (花) (薔薇科)
 - うぢぢぢぢ Salix purpurea (花) (楊柳科)
 - ひぢぢぢんてぢ Arginnis. sp
 - ひぢぢぢーてぢ Arginnis. sp
 - 睡れぢぢぢぢぢ Tadopole of kana
 - うぢぢぢぢ Ranuncus marginatus
 - たぢ Acepiter nistus
 - せぢぢぢぢぢ Motacilla japonica
 - あぢぢと Treron sieboldi
 - ひぢり Alanda japonica
 - ひぢ Chlorospiza kavarahida
- 十三日午前二時、不時呼集あり、視察を趣く、同七時發火演習を了る、此日辰口滞在なるを以て直に採集の爲近傍の揚原山を目指して出發す、館村より山路にかゝり金剛寺村坪野村を過ぎ、鍋谷村より降る、夫より寺島和氣徳山諸村を経て、午後四時半辰口の旅舎に歸着す、此日も天氣快晴にして頗る暖氣を覺ゆ、途中遠望の佳景なりと雖も悉く山谿幽邃の地、間々樵夫の斧響牧童の謳歌を聞くのみにて、自ら仙境の思ひありたり、此日新たに見及び採りたる植物ハ
- みやまかたばみ Oxalis acetosella (花) (酸漿草科)
 - あぢぢぢぢれ Viola keiskei (花) (堇菜科)
 - あぢぢらん Linope graminifolia var densiflora (果實) (百合科)
 - うぢぢんぢだ Aspidium Viridescens (芽胞) (水龍骨科)

びんざん	Bulbophyllum inconspuum	(花) (蘭科)
みぶし	Magnolia kobus	(花) (木蘭科)
むひね	Galanthus discolor	(嫩芽) (蘭科)
ゆきけのこ	Lanimum amplexicaule	(花) (唇形科)
くろもこ	Lindera sericea	(花) (樟科)
きんげい	Ranunculus acer var japonicus	(花) (毛茛科)
ぢびくけか	Conocephalus conica	(苔果) (地鏡門)
ちやるめ	Ajuga pygmaea	(花) (唇形科)
りんたう	Mitella japonica	(花) (虎耳草科)
たつほすみれ	Gentiana scabra	(嫩芽) (龍膽科)
かまとうし	Viola silvestris var grypoeras	(蕾) (堇菜科)
ひび	Nepeta glechonma	(花) (唇形科)
いぶさ	Thujopsis aolabrata	(無花) (松柏科)
みつまた	Juniperus chinensis	(無花) (松柏科)
まのねの	Edgeworthia chrysantha	(花) (瑞香科)
あなだ	Lycoris radiata	(嫩芽) (石蒜科)
くまじや	Aucuba japonica	(菓實) (山茶藨科)
ほらしの	Rubus morifolius	(殘菓) (薔薇科)
とりあし	Lindsaza pyxidaria	(芽胞) (水龍骨科)
ぬのみ	Astilbe thunbergii	(嫩芽) (虎耳草科)
みづね	Pteris serrulata	(無胞) (水龍骨科)
さらし	Chrysosplenium grayanum	(花) (虎耳草科)
	Rhododendron indicum var obtusum	(花) (石南科)

つばた (花) (山茶科)
 しばひん (無胞) (卷柏科)
 とんろき (花) (樺木科)
 しめぐす (無花) (樟科)
 しゃじくも (芽胞) (車軸藨科)
 えびも (無花) (眼子菜科)

よして、途次時よハルゼミ四十雀の囀聲を耳よしと、又右和氣村を産出する綠質凝灰岩、鍋谷村より産出する粘質凝灰岩、及び粘土、皆陶器の原料たど、予等其生産現場を一覽しと。
 十四日午前八時辰口を發す、此日曇天少雨あり、途全く隊と同行して採集をなすの山谷なし、岩内村より渡舟よて手取川を横切り、三反田村に着く、沿岸殆んど舉て田圃の荒廢せるもの、如左、就中巨石大木を流し込みたる状驚くの外なし、中に一疆樹あり、周圍凡そ五尺は餘る、其枝裂け幹碎け居れると其材質樹皮とよより漸く上流の深林より推し流したるブナ樹なるべしと推考するよつたても、昨年の洪水が如何に猛烈なりしかを想起せしめ、不覺悚然たるよと久しかりき、尋で松任よて晝食午後四時悠々歸校せり。

附記 辰口鑛泉の性質等ハ左の如しと云ふ。
 無色透明にして微少硫化水素臭を帯び微に鹹味あり、反應は中性にして煮沸すれば弱アルカリ性となる、其温度は常溫華氏四十一度九分、於て華氏七十八度八分あり、然して其一千立方センチ中三八三九二瓦の乾燥固形分を含有し、其固形分は左記の成分の瓦量より成れるものなりと。

硫酸	〇、九八五一六	ポッタシユム	一、四〇五三〇
クローリン	〇、七二二二六	ソヂユム	〇、二二九一五
硅酸	〇、一九八〇〇	石灰	〇、一八八〇〇
硼酸		二酸化鐵及礬土	〇、〇七六〇〇

炭酸

痕跡

有機物

三、八二六七二

(了)

七國の春の旅

播水 眠坊

宵の雨いと静ま柳系縁をうえて春の水ゆるむ、八重霞たなびく里より雪は消えそめて、山の木は芽も打烟れば、花の香さうふ嵐、心もさき紅梅れ一枝を渡りて馬蹄跡の水ををさだ、軒端は來鳴く鶯の外さうの調子の、浅みどりなる彌生の眺を我物顔に歌ひさるも心悪くし。折にふれさる此頃の徒然の窓に、指折れなさながら渡水、雁歸る越路の空に旅衣憂さふ一繁しと啣されし身も、いつうも積る三年は春秋を重ねて、名よおへる深雪のしだく折に、炬燵黨の總大將とまで銘打つさりし男が、をういや何を智識にことし北溟の狂瀾に田舎修業は泥足を洗ふの成竹ありと寝惚りてか、母をバのれ待ちまじ給ふ夏の短夜の土産話にも、と鳥も通こぬ奥山里の花吹雪に撲たれて、大人をびたる歌袋などいふもの肥やさんと企てたるを笑止なれ。さても三月二十九日小雨をば降るの夕まぐれ、播水ゆくりなく不眠庵を言訪きて、青息洩しつ名乗りも掛けぬ手詰の談判、たふ眠坊殿さのふ今日、面の當世世にも恐ろしの閻魔王廳の吟味さ愈果て、背負ひし萬貫の重荷のかるしつる心地はすれど、腦漿も碎けよと毎夜くの苛責拷問も、露まどろまぬ七轉の苦しみの名残り、これ此の通り骨そばさちて豊頬は微紅も驚くばかり瘦せ、雙星と云これた優しき眼まで弓なりに凹み落ちた、あ、此の際衰ふ軀幹を養ふ恵みの好校眼、翠簾のうら事もなく手枕に通ふ霏々の春雨も低きよめて、糸遊燃ゆる紅の韶光に背くも本意なければ、いやる心の春駒は一鞭くれて觀光の身にやつし、花影殘月、行き暮れて花を一夜のあるに眠ては、紫だつ横雲に明く鳥の飛ぶを慕ふて清女が筆はささびを想ひ、礪道の溪深く鶏の聲も覺めて、曉光寒き岑參が詩もあゝる折

にやなど忍び合せなば、永き折盤の衰憊も、一炊の夢より淡く癒えて、壯膽浩氣爽朗乎として神に入るべく、一つは亦萬目の羈愁を霞も流して、日頃坊等が思ひ寝に通ぬなつかしの詩神にめぐり近ひ、天然と人物との至聖至美に髣髴たるもれを探らんもさかきに面白し、眠坊返事さきと不承知りと威丈高に差寄る、青天狗の播水め、うぬ小嶺を障る言振りも小腹を立てど、兄株の手前もあり固より願ふ旅路にあれば、眠坊胸かて卸して横手をうち、これいつたり播水殿近頃天晴れの御名案、坊も至極賛成いたして御座る、思へば「春の花のものと夏は涼しき川添に」と古歌れ文句おさへ唄こる、三春の旅は行樂、よしんば綺羅のすすもれを翳して、丹青の色どりを翻巻を白拍子れさぶらふ風流はなくとも、坊と播水と鼓弓すくせて門あする深編笠の手振りを學び、山と川とのだみ調子を合せて、雲を分けては雲に入り、若草の下崩ゆる清水を掬びて、踏み習はざる玉鋒の道も七曲り八坂の畔に草臥れたるを醫し、興浮び來らば、野風爐を扇いで樽を枕の奴ご、ろもか尻捨てあふぬ上々吉あり、ささ給へや諸共よと互に手よ手と花雨の、降る山人山は櫻狩り、花ずり衣ふりはへて吳座に轉げぬる十四日間のはせ風流、十足の草鞋は二百八十里程を踏みにちりて、これやそれと産み落したる、可愛や、女なふば小町櫻の村雲の中よりこぼれて、巫山の神女の雲となり一面影も之にも過ぎど、男とみば金鸞卵を出て、業平のわらひ姿々花紅葉の奴袴を穿たさりけるも斯くやと思ひぬる、ても不思議勿躰なり、そもいつの間にも如何なる花情があら初戯れぞ、水莖の心も漏らさじと誓ふ武骨男の情け宿りて、荒き鶯の巢の妙ある鶯を羽育み懐は、紙や知るらん硯にや問ひませ。

春雨や若殿原の草まくら

花よ明け花に暮れたる旅寝のさ

播水 眠坊

暗夜醫王山を渡る(第一日)

久方の光長閑なる彌生の下浣、氣色晴れく、水と皎ろく風はゆるし、尾山城の畔り榎榎たる老幹、一朵の白雲も薄紫の霞を引渡りて、春日野は飛火は野守も土筆摘む手をゆるべたふん朝なり。十

時過ぐる程、播水旅裝甲斐々々しく眠庵を叩けば、あるじ夜來宿病に呻いてや、逡巡の色あり。播水絶望がかり吳座投出して炬燵にもぐり、臆て辨當寺と使ひて、やよ眠坊よ、此の度れ起行の止むべし、花は歳々變りなく笑へば手を携ふ觀光の草庭今年にも限るまぶ、吾ハ津幡とやらんまで鬱晴らしの逍遙すべき程お、君が快癒の日を待て天下の青山白水を踏破せんと立ち出づ。眠坊すまぬ、れ百萬遍も唱へて玄關に送りしが、濟まぬハ心盡しの可愛なる友垣に、斯ばくりの微恙に胸亂させて、年來の宿懷を死灰にする遺憾なり、とや斯くと暫し嗟嘆に暮れしが、動と胸板叩いてよし我も一貫れ男子、高が是式の病魔に腰折りて男兒弓矢の譽を汚すも行末の冥加恐るし、待て播水の後追ひかけて、いづく迄も旅衣道づれれ情を汲まんと、急喫結束して眠庵を飛出し、犀川橋より車を買ふて越中街道を馳せ付ける。雲雀上る野路れ里を幾廻りして、ぬと兎ある茶店又慰ふ男あるを差覗けば、今しも草鞋すげんと播水のイみ居る處あり。首尾よしと飛下り俱々に發足しぬ。森下町近くよと蜿蜒する左側れ丘陵を攀ち、無二無三お暴進すれば細やかなる村路又出づ。浦波村に通ずるもれなぞとぞ。一里許り進んで日當りよき枯芝を尋に寝轉び、地圖を繕きて二俣村を探らんとの動議成る。河北瀉を左に醫王山を右手に仰ぎて進む、浮世又疎き山路の風も當てぬ春日和、さやのなる鶏犬け聲に涼々たる溪川の水管危て、賤が妻木の音遠々しく牙に響け來るも桃源の風趣なるに、樵路れみぎ左り馥郁たる幽蘭の香獨り山路の春を占先顔なるほど床し、眠坊取りあへず、

眠坊

鳥路熊徑伴ふもの之洞流と松籟の彈琴は似たるを索ねて、覺束なくも分け行々ば、人跡稀れなる岨道は、蘭の花愈繁殖は愈咲け亂れり、兩坊矢張り野に置かれ雅諺をも忘れ、手折りて帽箱にかざしつゝ、ゆく、播水上藜の情けをや偲びなむ、

播水

蘭とつて深窓の佳人ののばる、羊腸更し羊腸を加へ、溪又溪をふみ行れ、木れ間に洩る、入相の鐘凄々二俣村に着く。茅舎五六十山中の寒邑ふして村民皆な紙晒らしに従ふ。川あり鬱々の音巉岩に碎くる處一橋を架す、白梅

十數株岸をこさみて清香輕るく衣に移る、一。一。劍。有。聲。落。花。村。を繪見るが如し。暮れれば宿借かんと徘徊ふに、丸木の柱茅の檐ゆがえるま、お、竹椽三尺持佛壇の外之座敷ある家も無ければ、兩坊ひさと困憾して、あられ平等真如の露の一夜を扉落ら月洩る辻堂にてお尋ねたれど影もなし。終は燒腹とちり彼の白皚々の醫王山を跨に懸けて、今夜越中福光町を打て出づべしと軍議す、それ面白しと一決して晚餐を認先、提灯と蠟燭を求て俄に峨々たる雪嶺を登る、十町許にして赤陽西海に沈み、暮靄蒼々遠く千峯の頂をかす先て、山峽の夕ばへ紅よりも赤し、暮雲青巒に起りて行末をさだめず、深谷を渡るの風峯上に通ひて四顧瞑茫襲ひくる夜陰の物寂しと言はん方なく、灯花寂々と燃え残りて嶮次第に加はりぬ。勇を鼓して登るよ、峯の白雲むら消れて踏先ば救々、谷の水音浚々として百尺の斷崖膽を寒のふしむ、

溪川の音のみさうし星月夜

播水

暗黒々れ間を縫ふて灯火をさよりつ、吟聲勇ましく二里許進みし頃、遙く木闌とら幽なる燈火の見隠れするあり。柚人け家懷のしと急ぎしに、程近くおて眠坊ばつさり岩角に躓つて熊笹生繁る小川の中よこけ落も、糞と刎ね起れば、暗中にぬつたり六尺の大入道蓋あり、みやつ畢竟迂論の山賊、膽玉ぬれくれんと播水聲荒くげ、オッサン福光へ超ゆる道いふれケと怒鳴り付くれば、男立留りてヤア、此は加賀越中の國境で御座りみす、福光へもモ二里餘り峠も段々下りに成るみす、と愈づふくし不敵の振舞組伏せて捕虜よせんといひめければ、何人の馬鹿とまや、老ぼきたる一個の樵夫が、粗朶背負ひて跟々家路を急ぐ處ありけり、

間もかく國境の木標ゆる處なごうざり見て過ぐ、此れより山道一倍嶮しく老松枝聳て閃々たる星光をのくし山越の夜風いと身おしめて、秋風渡かねと妻戀ふ鹿の聲子を悲む猿の聲さへ聞ゆる心地す。遠がり上り巡り上りて眞壁なと峯も何時しの極より、小又と云ふ處よりだらり降りとなりぬ、山本村お掛りし時、四十前後の村婦角燈さげて門出づるに會ふ、突然呼びとめてお噂福

光へ何里あると驚くせば、ギョツと身慄ひいて一里と答へ、けいんな顔して兩坊も見詰めるをかし。

四方の山々黙念の低く座禪の相を現し、燈影点々彼方暗みよ明滅せるを見て、早や平地間近と氣を勵まし、小歌など駄調子にはさまて降る、十時終ふ福光町に着て、旅宿求めて足を伸ぶれば、三更の快夢醫王山畔の夜景を載せて更愈深し。行程八里餘。

細尾峠の深雪になやむ(第二日目)

隣房の喧々お曉丸の夢破れば、立山嵐颯と十里の疇田を吹たまくりて、旅情冷やうに懐に入る、九時朝餉を終へて立つ、一商店にて巻煙草を買はんとて立寄る、播水店前の一個を手にし、六厘の封印紙あるをみて、オイ是は一錢二厘だろ、六厘の印紙だから、主人低頭してヤア左様で御座ります、煙草は二割の税でヤア一錢二厘で、と頻にお世辭作れば播水得意となり、六厘印紙の二倍を以て原價なりと速算し、銅貨三錢横柄に投げつゝて二個を買取れば、難有の七八遍も喋りて亭主六厘は釣銭を返しぬ、安い煙草だナアと兩坊香煙を吹た畫いて揚々然たり、やゝありて六厘印紙の煙草の一個三錢に當り、都合六錢の煙草を二錢四厘の低價にて買取りしに氣付れて、播水の手柄を譽えろやし三錢六厘を損失する亭主の間拔を笑ふを咄々として抱棒絶倒したり。行く一里強小矢部川を渡りて曠漠なる越中の沃野に出づ、眼眸の及ぶ限り平蕪崇田十二分の春光を呈し、竹籬樹木をめぐり柳條うち烟まる處、水にせまる、水車の轉々閑景を忙殺したる、五六の村童の清流お浸りて他愛もなく遊興しる、眞個詩中の雅韻あり、即ち

水車竹籬のそとの柳哉

里の子乃笹舟流す春の水

播水 眠坊

十一時山田川の珠流を渡りて城端町に入り晝餉を辨す、茶店は亭主坊等を敬拜して、お役人様となり、卵焼を調理せんと騒ぎ立つ噂をうらみて、そんな粗悪な醤油では相濟まぬと叱れば、主婦貧乏

徳利を抱いて早速醬油買ひに走せ行くなど可笑し。播水市中に一銀行に至り、二三金許り小錢の交換を頼むお、お生憎様とはねぐる、一二圓の融通さへ叶ぬ銀行ありと思へば情々なし。此町の西端一巨刹あり、善徳寺と云ふ、蓮如上人北陸巡化の際の創建にして、門扉棟楹の彫刻伽藍の結構頗る壯麗、此日恰も上人の法會を營み、善男善女絡繹として賽す、兩坊序なればとて境内をづつは鐘樓大鼓堂など拜觀して出立しぬ。此より路は漸々爪先上りとなり、迢々又連婉として遙に細尾峽中に没す、幾何もかく透蛇たる淵流に沿ひ、曲折蛇行して繞々山阿の裾を縫ふて行く、進に従ひ溪愈幽邃水いよく紫明、さあが唐人畫中の風を、折柄峽中嬌々たる鶯聲を聞きしるを益捨て難し、鶯や水村竹籬うめの花

尙登るに茅舎七八軒を獲、瀬戸村あり、家々皆牛を飼ひ野翁蹣跚として曳て歸る、鈴聲漿々遠く深峽は落ち神影漂渺羽化して雲に上るが如し、

長閑さや牛と牛との歩みくら

眠坊

是より奥ハ白雪皚々として峯巔を鎖し、徑路盤曲高死に上り、低さに下り崎嶇羊腸として高嶂の雲お入り雲を出づる處、樵夫牧童も猶通はず、一步一喘百歩は百歩の苦患に堪はず、見上れば萬丈の峻巒雪を抜いて天漢に屹立ち、見下るせば千尺の青崖刀して削れるも似たり。吹さねる風煙面を撲けて冷肌粟を生ずるも、背よ猶流汗淋漓拭ふべからず。進むに従ひ巍姿岩態一倍の峻を加へて、人跡全く絶は巖峯稜々煙霧濛迷として常に微雨あるが如し、雪坂のゆるむ處巖岩お息ひて眼を決すれば、高嶂幾疊々、龍驤の如死もの虎嘯の如きもの、吼ゆるもの怒るもの虹を吐いて萬里に連り、日は晴雪を射つて皎いよ、白ろし。瞰下は平茫々たる蒼野を隔て、越山能水あすか煙波の間お隠見し、天蒼々山高く眺遠く一望千里胸懷頓に洞然たるを覺ゆ、

春の野や青うを原よつゝさけり

眠坊

あの千難を嘗め盡くしたりし醫王の雪峯も今日ハ手毬の如く脚下に轉ろげなるなど、壯絶快絶又以てこの嶮嶺の高きを知るべし

霧こむる峠の上の峠ある

播 水

の吟あぞ、峻態巍貌寫しえて餘蘊なしとや言ひむ、登るふと三里餘、嶺死わまりて徐々降り坂となりしも、満目の皚雪此に至て愈深きを加へ降下の苦難言語につくし難し。程も亦か裳をか、げて一溪流を渡りける折に、五体氷凍してともすれば立往生を遂げん許りなまじ、が、満身の覇氣をしかり互に相勵舞しつ、深雪を滑り行く、誠と生死一髪の巷を踏みて極北の雪野をさらふ囚累れ如く、大雪に惱みて宗清に捕はれし常盤御前の苦みまで、ありくと想ひあはさる。何の大丈夫かと空勇みして驀直に雪蹴散らして進めば、積雪いやが上に深くて一步あやされば忽ち百丈に奈落小轉げ、その儘婆の別れとなりぬべき箇處のみ多きに、さとの兩坊も今の豪氣も血氣も抜けて、疲勞と寒苦とに縮み上り、僕凍死せば直に四肢を摩擦してくれ給へかど後生を祈るもいと可哀想をぞ。斯る中に雪嶽の間は炊烟擧る二軒の樵家あるを認め、地獄で佛も遇ふ心地して馳込む、旅の兩人峠は大雪に凍死せんばかりの苦き、しばし爐邊借して救ひくれよと水鼻すゝりながむ旬に寄れば、煤黒顔の老爺叮嚀に會釋して、ゆつくりあたふツいやれと席を譲りくれぬ。忝けなしと凍脚投げ出して手足あぶりつゝ物語を。見れば戸棚も亦く疊も亦く障子もなく天井もなし、五尺四方の火爐を中央に二三枚の破れ蓆を敷きたるの外、鋸、斧、鎌、薪、蓑笠、夜具、かけ茶碗など仲善く雜居させ、何十年掃除したる様子もなく、煤塵處得顔を集積したるのよも人間の棲息すべき家とも想われず、三十前の嗚一合入れ位の古茶碗、溢茶汲みてだど。手頭の垢臭きに髪頭醜氣紛と臭ひ移りて受取る勇氣もあきを、お茶召せと更な波々と差つがれて兩坊避易したると甚し。老爺今年七十幾歳、二三年前本願寺参りまで濟まして、一世一代の願望も遂げたりと嬉ぶ、然らば來世の極樂淨土も生るべしと笑へば、爺にこくとして南無阿彌陀佛々々々々、無邪氣なる老爺ある哉。

應て元氣恢復して此家を去り、亦深々凍雪を蹴立て、連峯を遠ぐり下るに、漸々雪解けして雙脚を埋め、僅かお樹梢に傳ふて歩行す。句あり

雪消えは楢の木びんとハねるへる

播 水

半里許り行きて一小部落あり、梨子谷といふ、戸々未だ冬籠りの様なを、村端を流る、溪川の水嵩増して橋上と浸しるを渡る折、

雪げ水小橋の上をひたくと

眠 坊

行く幾何もなく路傍飛瀑あり、磊々として雪齧の頂より落つ、奇觀譬ふるも物あり。更に行く數町雪路俄かに急坂となり勾配七八十度を量るべし、兩坊佇立多時、播水先づ樹枝と手蔓として前驅せ、去が突差一步をあやまりて、見事もんどり切けて數十尺、雪嶺を轉るげ落ちたり、眠坊、崖頭より拍手して快哉を呼べ、遙の磐底にて臀部の痛手さし押へ乍ら、彼奴宛友情に乏しと、負け惜み喋舌る様子聞ゆ、眠坊聞かぬ真似して徐々巧に降りぬ。斯くて五時過ぐる頃、散らばく雪を衝て五箇山内の富村と聞し下梨村に着させれば、

雪解けの山を超れば梅の村

眠 坊

山廓僻邑素より旅宿ある由なし、梨子谷にて教ゆるし、豪族水上豊三郎氏を叩きて刺を通ず。主人洒落にして横直、戸に迎ひて兩坊の風采を視、更な刺名を一瞥して、ハア茨木縣水戸……大分遠方だなア。ウーソシテお前達何にハオ來たか。ハオ五箇山地方遊歴は参りま……したか、ついひが暮れまして宿泊せる處も御座いません、夫故何んども申兼ねました。が實は……ソカ夫れな宿めてやるが何も御馳足ハかいぞ、死たかい處がまア上り……と應辭恰も婢僕を使願するが如し、兩坊や、惘然、無心乞ふ身の是非云險力もなく、恐縮れ体にて草鞋脚半ちと解き臺處にすくむ。れ洗水の聲待てども、氣は利く様子なければ、もしや足洗ふ處ハ何處ぞと尋ねしに、オ、足り足あふ向ふの小川で勝手に洗つてくれ、と坊等相見て呆然返す言葉なく、やをら有合ふ繩鼻緒の天下駄引きさらへ、霏雨にそぼ濡れ乍ら足洗いで来る。偕て案内を請ふよこ、危寄て暖られよと、主人爐火の炭を掻起しぬ。朴柄粗簡天真の流露たる坐る掬するよ堪えたり。行程八里

五箇山の夜語

暮雲檐廂に迷ひて、雨糸しめやりに幽邃、六百年の春を降りくらそ。昔し龍頭鳩首の船に詩歌管絃の宴を載せて、勾欄のもと綺羅は堪ゆる三千は美姫を侍んべふせ、衣香扇影、春宵の徒に明けやすさを怨みにし平門の榮華、竿のしづくも花が散るけると謳ひしも夢あり。九郎が馬鐵枵が嶽に嘶いて、檀の浦の小夜嵐、斷腸一縷の面影を今も語りつぐもれば、哀れ肥越山奥の五箇莊あるのみ、松の露朝も落ち樵歌月を帯びて往くの夕、翡翠のうづら花耻づかしき公達か、落花廳亭、苔庭床敷く埴生の宿にささ變りし當年の怨魂、將たいづるにか彷徨はんとすらむ。山河依稀たり歳華獨り茫茫、星移り人の逝きて、落人膽冷やしむ野面の案山子が、野武士めだたる両坊の旅装に驚き顔あるも今更の縁なり。

五箇山の舊歴史今ハ大概湮滅して尋ねん易すがも無し。唯僅か用明天皇(三十三代)ハ御代に大潮大師の開基せる一寺院今尚存在し、手桶大の白木椀、黄金佛像ハ彫刻ある一靈鏡等保藏しあるを見れば、平門没落以前既ハ人烟の簇々たりしを認むべ也乎。その確實なる記録を存するハ、實ハ前田家の横領に始まり(天正十六年)、以來連綿世波を隔て、一桃源と作り、花静に月團るく晏如として終ハ王政維新ハ及びしとぞ。莊内の舊族多クハ平家武者の末流を汲み、當家(水上氏)の如きも赤沛の驍將長谷部信繼の苗裔に係るといふ。風俗太だ質素、優に二三年前の風儀を残して何となく一種の雅致を帯びさぞ、衣服ハ皆な筒袖にて老幼の別なく居常奴袴(義經袴に似たり方言タツキと呼ぶ)を穿け、一見頗る奇異の觀あり、言語尤も優麗清澄にして、加越地方のチャク、的調子なく、京都辨と名古屋調とを混じたるが如し。家の入口ハ古臭き荒庭を垂れて戸障子に代へ、戸々悉く五六尺四方の火爐を設け、終日樗火をさきて、繞坐喋々一定の職業を取るものあり。五箇山一帯凡て高嶽嶮嶮の深溪に散在したれば、固より田畠乏しく、山腹僅に礫礫ある數傾の耕地あるのみ。物産ハ蓑、紙、硝石を出すに過ぎざれども、

古來生活頗る安逸にて、半日の勞作は容易ハ一族ハ糊口を肥やして餘分ありしと云ふ、去れば道路を修めず、河溪を通せず、特更に嶮道樵路を嶮嶮ハ鑿ちて、以て他國人の侵來を斷ち、近年迄二三の行商の外出入するを嚴拒せし、加賀領の砌ハ土地寒僻人馬不通の別寰宇を以て目せられ、大逆無道の兇漢の流刑處たり、村内ハ貫流する莊川(射水川の上流)の東岸八部落を以て配處に充て、村域七里の溪間に十二ヶ處の籠渡りを設けて、(又猿橋とも云ぬ今は大抵釣橋に改め残るハ唯一箇のみ)流刑人ハ不虞に備へありしが、廢藩後橋梁を架し山林を開き農事を勵まして、や、舊面目を一新したりとぞ。(中略)流刑人中ハ三大巨囚の人聽を聳動するものあり、大槻傳藏(姦惡)久世平介(忠臣)戸田彦左衛門(學者)之れなり。(中略)又藩政の當時、莊内三十戸の硝石製造家あり、世襲として勢望地位他族を凌ぎ、年々藩侯より八百石の扶持を賜ふの優遇あり、水上氏の如きも四十二石餘を拜領して、一族の扶養ハ差支へなかりき。從來全村の戸數に嚴手たる定限ありしが、明法十三年禁制を解けて、自由建家を許可せしより、俄然戸數繁殖し、活計頗る困難を招いて、哀れ幾春の夢温かなし名門の末族も、茲に再び涙脆々此の好桃源に別れて、續々北海道の曠原に第二の五箇莊を開拓するに至れりとぞ。兎まれ元來此の地、秋風ハ木葉を拂ふまよもく冬籠りして、續々たる半歳の雪乾坤に入ると、三冬の眞盛りには二丈四五尺より少くも八尺を下すの深雪に封鎖せらる、郵便物の往復さへ廿日間位停止すると珍しくかゝぬと云へ、餘り感服の出來ぬ仙境と云ぬべし。

論滾々四隣人あり、主人痛く博識を贊賞し小首傾けつ、感佩のさまふり、やがて主人言葉柔らかに、時ハお前(尊稱)因明學を説き聞かせよと問ひのくる、播水物知顔に左様さ、因明學は随分眞理が奥深い、お前朝一夕に話が出来ません、と誤魔化す主人愈敬服して、お前達ハドローして因明學を勉強した、と切り込まれて播水はたと返事よほまる、眠坊見兼ねて、因明學は餘り深く學校では修めませんが大体ハ誰れでも分りましたよ、と助太刀しつゝ、折柄近隣に祝宴ありとて使者主人を迎へ去りぬ。播水をツと冷汗拭いて、お前眠坊因明學とは何の事だ、僕は少とも知らないて返事をし

たが、實に冷々しむよと私語す。眠坊覺えず吹死出し、そ、君も知らんのか、僕も善く知らんのだが、因明學とは、髓又論理學の變稱たると思ふて答辨せよ。何んでも印度哲學とやうの一部分は相違ない。何にかまわぬぞ、吹くべしと惡智識と絞るも苦し。

主人出て行くの後、奥坐敷に請せられて炬燵を惠まれ、七十許は福相なる隱居殿の昔話を居眠り半分に聽聞す、暫時にして隱居殿一間に立去りけるを、嬉れしやいざ白川夜舟と他愛もあらず手枕させ、忽然又一個の大和僧隣室より現われ、床の間に續き唐襖押開きて、金碧燦爛たる佛壇の前に瞑坐し、燈花細やかにともして、南無阿彌陀佛の念佛聲高に始りぬ。兩坊狼狽度を失ひて凝視すれば、笑止や隱居殿が一寸黒染の袈裟衣を纏ひて、天晴れ上人様と化氣するなりき。先安心と行儀繕ふて黙聽すれば、老媪、嫁女、孫娘、次男坊、太郎作まで順列び出揃ふて、上人様の讀經に連れ南無阿彌陀佛々々々々々々。坊等も間拔け去り持無沙汰に小聲にて南無阿彌陀佛々々々々々々。程もあらず木魚の音やみて扉のさざれ、上人様再還俗して又坊等の爲に長々と懷舊談物し給ふ、兩坊目睫既に閉鎖して、心妙に返答許り申上ぐるにも氣付き給はず、上人愈興がりて自慢話ます、更け渡りぬ。眠坊たまらず無雜作に耐つくれ、上人名残り惜げに明日は是非隱居家に御滞在をと歸り給へり。待兼たりと蒲團延べさせ旅心地の夢面白く床にすべる。後播水使用のめけし様子ありしが、倉皇匍ひ出で、おい眠坊大變しと起きてくれと揺り動のす、何事かと枕除くれれば、僕は今便所中へ大事々々の財布を落した、餘程深く取れさうも無いがドローしたらよからんと青褪めて泣付く、一夜中お面倒臭い少許のエムを僕が用意があるから捨て置き取り合はず。少許り處の大枚十四五ページも書いて居ると云ふ、不承不承起出でて播水は洋燈持たせ、眠坊糞桶の中へ頭突き入れて探し廻す、遙かの糞底に紫色の小財布安坐せるを見當てたれど、深さ五六尺も有りて、眠坊猿臂伸ばせども、屈のず、醜臭紛々と鼻頭を刺し、久く覗か居るも叶はぬに兩坊百計盡きて唯茫然とるれみ。餘義なく奮發して家人を依頼し、暮々も不注意の申譯しあがら助力を乞ふ。

此家の次男殿素早く納屋より屈強なる二本の薪木を持ち來り、苦心して漸く釣り上げくれたり、彼是れの馬鹿騒ぎに早や初更も過ぎて辛く疲れを横ふれば、悪くや兩戸打つ夜雨蕭條として、篋の水の音と、遠々し。

雨を衝いて飛驒の白雲に踏み入る(第三日目)

善き程に起出で、障子排せば、夜來の雨徒らに冥濛、糝糊たる嵐煙の裡より峨峰峭然軒端を壓して五箇山の春曉轉々物凄まじ。朝餉を認めて發足せんとするに、談話好きの主人、兩坊を炬燵に喰ひ留めて容易に放たず、快談娓娓善く語り笑ふ、やがて兩坊が法律屋の一分子なるを聞き、一問題の解釋を願ひたしと俄に威儀を改む、因明學にて昨夜失敗したれば、又もやと直に心臓の動悸亂打しそむるも可笑し、されど今更のつ引かぬ難場も、糞度胸を据わて何事件でもと乙に辯護風を吹かぬ。主人曰く、近頃果てました私れ妹の夫が、妹れ所有せし動産を分けて勝手は處分致しまして、里方ある私は何の相談も分配もしてくれませんが、夫自身は兄弟はドン／＼分て遣つて居るのであります、餘り残念ですが訴訟しよふと思ふので御座ります。成程、それ御氣の毒れ次第です、私共と未だ専門は法文を研究しませんら、確乎たる條理の存じませんが、兎も角現行法上では人權が誠不完全で少も發達して居りません、從て夫婦父子間の權限問題は、諸外國の様立派お世人の渴望を満たすとは出來ないので、今の處で、一家の財産も凡て戸主の處分に任ずる制でもか、妻の動産も勿論夫の自由で、里方より彼是と苦情を容るる事と到底出來ませぬ、尤も新民法が實施おかれれば、多少此邊の欠点も補はれる、様で、と滔々大氣焔を吐く、主人落膽して談柄どぎれを幸ひ、旅裝整ひ歡待の謝禮を包みて匆々逃げ出す、隱居家の戸口お例の上人様坊等を待顔お佇立したれど、旅程急ぐとて辭退し奉る、折柄何處ともなく雉子の聲聞ければ、

雉子鳴いて平家の落ちし在處かち
くる／＼げお落人村のたじの聲

眠坊
播水

霏々の雨を衝いて下梨をいで、雲霧迷々たる莊川の西岸を沿ふて行く、川の兩岸雪嶺屹兀として迫

り、聳然と去て千尺に削壁となり萬丈の劔屏とある、脚下の奔流ハ聲々響々激々岸を嚙み、旋流して渦を生ト潭を作りおどし、彼處此處の谷蔭にハ荆棘を結びたる草舎蕭條としてゆがめる儘に立てり、梅散るとも人の訪ふ例めしき此の深山の奥、住み習ひては茲に九重の春を學ぶ谷鶯の聲やありん、舞殿の翠袖樓臺の柳峰の枯木に立換はつ、鸞輿屬車の手車も碧蘿の錦に織り換へて、明くるも山暮る、も山のさびさきに、君ならで人にして人に非ずと歌ひし一門は公達、有りし花宴高會の夢如何ばうり戀ひしかりん、と其の上に落武者ども、面影坐るよ追懐すいと哀れなり。

五箇山の壽水の春をしのびけり

やま幽邃六百年のうめの村

梅散るや榮華の昔侍ぐる鐘

同 播 水 眠 坊

語や蕪なりといへども、感愴多恨の情燃ゆるをみるべし、右顧左眴行く一里許り、路傍一瀑あり轟然として白雲の山巔を懸り、路を遮断して莊川に落は、播水取合へず、

瀧千丈玉をとばして霞みけり

播 水

般々たる響は百雷の落ちたる如く、泡沫四散し水渦烈くして近き難し、如何いせんと躊躇ふうち播水右手の急崖を、危く二十丈も攀ぢ上りて、怪岩牙石れ凸凹したる瀧つぼを巧にちち渡り、洋傘をふりあげて瀑下に待てる眠坊を招く、眠坊心得たりと差圖りて登り、矢庭に瀑中に飛込みて、半身つふ濡れとあり命がら／＼彼岸に匍ひ上りぬ、斯くて中畑村に差掛り一頃、風雨次第に迅烈を加へたれば、二十許の村内をかゝ廻り、屁理屈言ふて無理に吳座二枚を買取りぬ。村民坊等の洋装を奇怪と見て取置、お前と何處から來たと問ふ、東京から來たと云へば野爺禿頭左右お振りて、嘘／＼、東京の／＼こんか山奥へ來る筈とかい、と頑張りて承知せず、金澤からと白狀すれば、鑛山の道路のお役人、ナァ、然し今頃お前達のくる處でかい、と忠告ささ大丈夫だと威張り込んで別れぬ。峽道に生ふる露の朝露ふみだれて、猪谷、上梨村まで過ぐるに、五箇山の風色愈崇岩となり靈邃

を極め來る。白雪に蔽られたる奇嶺傑嶂は、崎嶇として雲煙をさしはさみ、幽峽重壑は寂々の中お飛泉を懸け亭松と生さ、莊川の急湍矢の如く巖洞に碎々流きて音響々たゞ、此の山此れ水此の境、眞に一幅の墨畫を展べざるが如く、山巒烟霞は美殆ど人世の境にあらざるが如く、一步一歩快哉を絶叫して峯深く分け入れれば、二里に一橋、三里又して寒村の鶏犬を聞くべく、棧道を一繞りする毎に、連巖奔河の風趣萬變えて、雨霧の裡より重峯の皎雪むか消ゆて見ゆるは、萬朶の櫻雲満山おさなびくのと疑はれ、澗崖をさり絶壑に沈みて架け渡しする釣橋は、仙人村の莫寂を添へて上帝の築造したる虹蜺の横はるども見るべし。岨を廻り磯を盤りて、十一時小原村に着けば、一釣橋あり、天を障ゆる雲樹森然たる碧岬に繪の如く懸る、兩坊小躍りしつゝ渡るお橋梁廳々として身は雲に駕し仙登するれ氣持あり、珍らしければ橋上を幾回も行きつ戻りつ、

春雨や釣橋斜め吹られける

橋廳々氣もたまがへる雪解水

同 播 水

と播水立ちおころに凡調をやぶかす、夫ハ俳句でない、何ハ實景だと橋上の同士打ち始まり、やがて其儘吳座片敷きて、四周山川の雄風を飽かず吟賞と、折しも二樵童あり、薪木背負ひて東岬より下り釣橋お差掛り來りぬ、目禮して兩坊の面前を過ぐるを見れば、二八頃あるお兄と覺しく、弟は漸く十一二の坂を超はたる許り、五分刻りの頭お古びたる義經袴はきて、色や、淺黒々れど、隆準丹唇眼朗りに眉秀で、愛嬌づ死し天顏美貌と、月ならば五日の影花からば梢の苔、まこと女性にして見まほした美少年あり、おそれ此の奥山は平門乃流れを酌み去童子なりやと想へば懐かしく、呼返して物柔らりに道路の難易など問ふ、君もなか／＼少年黨の策士なりと急所を衝かれて、女色黨の誰れやとより罪勿かるべしとすりさず一本返上し／＼り。

此より一里許新屋村の釣橋、客秋の洪水に落ちたるまゝにて渡るよし無れば、餘義なく右手の高巒を登り超ゆ、岨巖をぬみ長蘿にすがり、或ハ鑿々たる峭壁を傳はり、柘鷗の危巢を攀ぢ、一步一息身

と恰も胡馬の鬣上を行くの想あり、三時過ぐる頃漸く下島村に着く、五箇山の盡くる處なり、左右に袴腰、横平、人形、の諸雪嶺嶺々として前程の雲に入り、奇峭靡透として互に峨を競ひ立ち、風雲白變簇々として一步毎に眼眸を一過し去る。うの雄峻を此嶂嶂の狀到底筆紙に寫し難し、最早飛越の國境も近しと聞て勇躍し、赤尾村を経て大潭流れ莊川に合するものを渡りぬ、是れ水源を加賀れ障子岳より發し、飛越の國境を東流する境川なり、一飛橋を架す境橋と云ふ、橋下二百尺許り、山勢迫つて兩岸の巉岩劍の如く、潭勢石をかねて響き滾々然たり、奇景見通せばかからずと、又吳座より轉びて思を橋上橋下の崇に趣かし、膝を拍つて天下名山の翠煙に嘯くの興壯快極りなり。橋梁に憑り播水小首捻ねるを見て、一句成りしやと問ふば、餘りのく、勝絶佳風小醉ひつぎきて、腹案も何も滅茶く、ありと高笑ふ、御尤千萬と割愛して出立するに、輕卒の眠坊いつか旅行用にとて新調せし手袋と頸巻を遺失したるよ心付さ大に弱りかへる、それ見給へ落さぬ様よとわれ程云ひけるものを、とまた、かに播水より小言頂戴せけり。

國境れ目標を仰ぎて進めば飛驒國白川村あり、村路坦々高山を斫り深谷を貫いて僻寒地方にて珍しく出來り、莊川を左に煙碧雨に鮮かなる棧峽を屈曲して行けば、境域益々寂寥、雪峯いよく峻秀となり嶄峯を極むるのさま、恍乎として世を忘れ神往かまむ、法仙山、仙人窟の峯巒を遠く、千巖のくだり横はる江流を臨み見て、頻に風光にあくがれば、辿るお、春雨霏々吳座を打つて降りいつ。播水ぬららず、

播 水

春雨やわくがれちがが飛驒の山
二里餘を進みて突然大雪崩の天外より墜下して、道路を埋め川を蔽ふものあり、幅二丈位高さ幾百丈なるを知らず、山國の大奇觀あれ危険も亦甚し、兩坊傍見戰慄して齒の根も合はず、顔見合せて呆然逡巡せしか、踏みはずせば、それ迄と恐々ながら横匍ひして超へり、須臾にして又大雪崩降りまが、茲も無難に匍匐して加須良川を渡り芦倉に出で、あつゆる雄勝奇景に壯絶快絶の矚眺をそ、いで、行くとも無し小橋原よ着きぬ。水上氏の紹介狀により倉與四郎平氏に宿泊するを得たり。朝發遅かりし爲め山程僅に七里餘。

遠來の珍客と見て、此夜人々爐邊に打ちつとひ、淡婉ある山村の會話幾回も繰り回へされぬ、此村飛驒隨一の深山(恐くは日本一なるべし)にて、全村僅に四戸、給養に限りありて増戸する道あり、峻嶺の巒間にて田地も無れば、春蠶一回の外農事とはなく、米穀類は十三里の連山を踏み超えて、越中城端町より遙々背負ひ來るとなり。去るば食品の供給裕かならず、米麥を食するおと希れなりとぞ、夏秋二期の伐木丁々の樵夫となり、暮秋より二丈餘の深雪降りつゞく隆冬も懸けては、冬籠りして専ら熊狩りかどに従事するお。此地方(五箇山も同じ)の習慣、夜間は家族皆爐火を圍みて、雜談に暮かし、燈火も點すに家なき。斯る山奥も似ず、言語動作頗る清亮爛麗にて八分通り京辨なり、用事を尋ぬれば「なんジャさかぬ」「ソージャノウ(又はワイ)」、風呂が熱いと云ふバ「イライ御氣の毒やなア」と答ふ。辭禮の閑雅あるに加へて、婦女子の容貌一般に妍美なるを床かし。

飛驒の國の青山白水(第四日目)

熊狩りの物語面白く華胥の境に遊びしが、枕元に通ふ莊川の水勢聲々たるに醒むれば、春日浙瀝昨日の如し、大根の餛かけと糟汁の朝餉に舌打ちをむれば、早や佛壇の前に主人讀經の聲朗々、子女僮僕まで一際に念佛揃へて朝祈禱はじまる、此世ながらの極樂淨土も似たり、

念佛や朝まだきより春雨す

眠 坊

旅装終りて厠屋へと問ふ、彼處おと川岸を指し、行て扉を開けば、厠内八疊敷を位あり、底廣々と二丈餘も掘下げて、上に二本の棟材を渡し、男女の隔てなく多人敷一度は放糞しうる仕掛なり(村内共同の便所なり)、兩坊見て大に避易し、碌々小便も濟まざり出立ぬ。時に七時二十分。

今日も莊川の風景に沿ひ、高巒を跋渉するに、道路險惡さのふよりも甚だし、春光瀾珊既に半ばなれども、丹靄深く峻嶺に立ち罩めて、花の笑ぬ樹木もかく鳥の歌ふ籬も見えず、山峽の羊路碧潭に通ず青壁より上り、一程行き盡せば又一程遠く、一村一橋、綿々として山又山を縫ぬて辿る、峭拔天を刺すが如きもの、累積群山を叱咤するが如きもれ、塚立重疊して千狀萬態一々應接に追ひならず、

險勝奇勝、眞は海内無双と稱するも、誣言よあらざるべし。三箇處の釣橋を渡り旭谷と云ふ處に出で、
 水、地理談のみ聞き去龍渡しあり、俗猿橋ともいふ、長さ五十間許、急湍河々たる雨岬の絶壁より、
 藤蔓を張り渡しして、同ト藤蔓を編みたる春を釣るし、渡人身を春中よ置き、藤繩を握りて一擺一進
 搖更しつゝ、彼岸に往くなど。狀恰も蜘蛛の網を張るが如く、實は飛驒山中の一奇觀なり、

猿橋や霞にのる檜笠 播水

播水遠見雀躍して眞先驅り付け、ひらりと乗移りて震慄ひ乍とも天よも登る心地よて危く渡り、
 眠坊寢惚け眼玉洗つて善く看と、猿橋の先陣播州姫路浪人播水坊天晴れ渡りてけり、こ大音聲
 よ呼とわれば、眠坊劣らじと打て渡り、常陸の國の住人眠坊先登第二と名乗りける、おど續く味
 方もおだは狂氣は沙汰と云ふべし。十時萩町村に着く、霏雨絲の如くたれ罩めて戸々念佛の聲ばの
 り聞ゆ。

阿彌陀佛ひくびなく春の雨 播水

竝處より高山町を通ずる路二岐となる、小白川沿ふて進めば嶮隘少なければ二十二里(高山へ)
 あり、六尺餘の大雪を犯して嵯峨たる天生峠の險道を渡れば、十七里よまて五里を利すと云ふ、數
 日來乃難岬にて潑々の活氣も挫らるる折かれ、天生峠の嶮を棄て、五里を迂廻し、るも女々々。
 大枚村よて拷腹癒さんどとて、一農家の椽端を借用し、大風呂敷の握飯を亡ぼす、此家の野爺兩坊の
 風采を奇怪げに見下ろし、お前ハどこかと問ふ、東京だど答へたれど解せず、東京は此れ高山を千
 も二千も超えて、遙か遠方れ海岸だと説明せしよ、それで外國人だなア、馬鹿云へ矢張おれハ
 日本人だ、外國人は眼玉が青くて頭髮が赤いが、己は眼玉も髪も眞黒、さうら此れ見ると、帽子脱い
 で兩坊馬顔ほき出ぬ。茶番も此に至て抱腹の極と云ひむ。

飛驒又入てより、山嶽一面に喬木繁茂、翳然としてろの幾千萬株なるを知らず、見渡す限り踏躋
 する限り満山悉く良材巨棟、此材よ以南大樹一層鬱々として亭々雪を戴き、轟々として雲際よ聳
 ゆるもの多し、之れ皆な樺梲の兩種ありとぞ、眞個天賦の好山林と云ふべし。美濃原、妙法の諸峯

麓をすぎて平瀬にいづ、此材奥に白水瀧あり、(長二百十六丈幅七間)優に養老華嚴の名瀑を凌駕す
 るよしなれど、未だ積雪十丈茫とて樵夫の通ふ路もなしと聞て行かず、御母衣、長瀬など荒涼た
 る山廓を進むに、雨漏る賤が檐端、大祭日を祝ひ祭る旭日の大旗、二ツ三ツ春風に勇ましく翻と
 たるいひ知らず頼母也。

賤が屋に國旗ひくめく春の風 眠坊

福島村よて或る材社の拜殿に散錢箱と書したるを、可笑しと笑ひて過ぎ、五時頃海上村よいる。朝
 十時お辨當を平らげて後、澁茶一杯も有り付らねば、胃腸空々とあて腹の虫承知せず堪に兼ね
 るま、食物のなきや、草鞋は無死やと乞兒面さけて、家々を驅廻したれど、草鞋一足だにある家お
 し、愈降参りて米あふば炊いてくれと泣き付くよ、水村寒廓の悲さお生憎様とはねふる、餘義かく
 空腹を抱いて破れ草鞋引ずり行けば、兩眼次第に凹み落ち、腹部遂にくの字ありに曲りて、曳く木
 杖の音れみ高く、弱味を侮りて村々れ瘦夫さへ吠わ付くなど無性お腹立し。中野村よて菓子小賣の
 看板を見付り、夢中になどて飛込めば亦お生憎様をさめられて力抜けし、何んぞ有らぬと強談にか
 られば、明日の節句用の栗餅ありと云ふ、それよこそ無遠慮又爐邊よ這ひ寄り、黒砂糖買かせて
 息をもつら盆大の節句餅六個を平らぐ、斯る程に暮靄山を抹し、蒼然樹梢を鎖むる頃ほひ蠟燭四
 灯を求めて夜行すべしと猛進す、一里許り走り、赤谷と云ふ處にて赤陽全く西嶺に落ち、四顧暗澹
 として一步も歩し難し。提灯を頼りに山川谿谷れ差別もかく踏破し行けば、寒威凛々旅骨をかみ、
 淫雲密々として白山氣横さまに吹雪を下ろし來る、見るまに吳座外套の積雪眞白くありて、肌膚粟
 を生じ手足今も凍裂せん様あり、兩坊必死と瘦我慢して「雲滿秦嶺、蹀躞天下七寸鞋」かどの賦
 を高吟して進むお、兎ある棧道に差掛りし時、寒颼一陣颯と深谷よ吹きまくりて提灯の火を奪ひさ
 りぬ、播水たり顔にて、

山風に提灯消えて寒哉 播水

吳座の蔭にてマツチ摩すれども、山吹雪烈しければ、容易に燃ゆる移らず、頻に氣を揉み種々手を代へて點火すれば、驕然泣面をなぐり行く山嵐に随つと消されて、あられ一箱のマツチ五六本許り残りぬ、終に或る谷蔭に躡りて漸く點火し、提灯大事と護衛して歩む、中畑村にて一農家を差覗き新淵への路はと問ひしに、村嬢二人風呂湯の中にて、くすくすと笑ふて答へず、

化粧風呂姉妹と雛を語りけり

眠 坊

と即吟をえて去りぬ、八時半新淵村に着き山下彌兵衛方より泊す、行程十三里。

今日經過する山村、疎々寂寞として戸數多き五六六十、少き僅に二戸に過ぎず(木谷村之をなり)、邑民概ね薪炭の職を執る、草屋の屋根七十度位の急勾配を示し、二階三階などあまて皆物置小屋に使用せり、入口に暖簾の代り、荒蕪を吊るし、室内戸障子もなく勿論疊もなし。亦戸々牛を飼育して家人の居室と牛小屋と相隣接したれば、終夜奔々の聲聞いて糞醜忍び難し。人民の顔容漆黒おいて獯猛の相を備へ、塵垢膚肌に滿ち衣服汚臭を放ちて、近ければ忽ち嘔吐を催すべし。去れど言語嚙亮明晰にして、「ヘー」^ハ「ソ」^ダ「ド」^モ「オ」^ゾ「エ」^ル「イ」[」]「御座りますゲナア」など普通用なりき。

輕岡峠を超て高山町に入る(第五日目)

孤衾夢冷りに明くれば、雨戸漏る旭影いと麗し、快晴れたりと喜びて臥床出づれば、庭苔積雪に埋れ、連山嶺々焉として波濤の如く南より北に奔る。中に窟鬼千古の白雪を載せて蒼穹に屹立する峻峯あり、何山ぞと問ふに、あきこそ加賀の國の白山に候、前なるは大汝嶽と申して高さ九千八百尺、後なるは劔ヶ嶽の下は地獄谷など、亭主誇顔に喋舌るを仰ぎみれば、げにや山容雄大豪岩を極め、晨夕金城の學窓よりかざり見ると、雲泥の眺ありて殆ど形容乃辭なし、七時發足、小白川の河風寒く跋渉の途に上りぬ、黒谷村にて路分れて二岐あり、左に折れ莊川と別れて名におふ輕岡峠の峻嶮お差しかゝる、上と二里下り一里の難峠あり、峠上白雪三尺許り雲樹漂渺畫尙ほの暗く、

樹梢傳ふ鳥れ聲も洩れず、此峠一帶諸川流の分水源をあり、一の北奔越中を貫きて日本海に入り、一の南走尾濃の沃野を灌漑して太平洋に注ぐ、所謂透蛇たる中央大山脈の脊髓あり、兩坊鐵脚を叩いて難なく雪塊を蹴散らして超ゆ、更九折盤曲の棧映を遶りて清見村に入りぬ、此より以南村道の泥濘深くして踵をあくし、峯嵐凄々頬を掠めて、寒さと朔風の身を切るが如し、山川の清景輝微として壯絶ならぬに、あかね、最早江色嶽れ美にも飽れ盡し、今は平蕪崇哇れ春光見たし、あど、我儘吐き乍ら進めり、輕岡峠を超へてより、「かぢや」と云ふ太古の水車風なるもの、到る處潺潺たる溪流を呑みて、かぶんごんごんと米搗きの姿面白く、秋風景を閑谷を破りて、おちらぬ一段の妙風趣を添へたり、想ぬ飛驒の一名物あるべし、句あり。

春の川かぢやなぐべる一二三
春の水湛いて春けるかぢや哉

眠 坊 水

五里許り寒風と泥濘とお懊惱し、十一時頃一農家の爐火に温まりて、氷の様ある搦飯を喫す、粗炊粗米砂礫を噛む心地なれど、枵腹なれば一粒も残さぬのみり、朴樹の枯葉に盛りてくれし腐敗氣ある菜漬物をたら腹喰ひた先て飽きたる様子も見せず、餓鬼道の亡者も洗足で逃ぐべし。斯くて一細溪沿ひて亦數里の樵路を歩むに、數日來跋渉の疲憊大に加はり、兩坊交も、佇立嗟嘆し、愴然眺瞩れ勇氣もなく駄洒落も叩かず、ととして力なく岩角樹根をど叮嚀にたぐり除けて辿る事我乍ら憐れあり、六厩村より位山通ずる道路あり、歌人騷客の持ていやす靈壤なれば、探勝吟咏の心組ありしかど、痛く疲勞に凹みたれば、「位山峯の若葉れ緑りさるるわきに移るぬ秋をこそまて(千蔭の歌)」と理屈付りて、銀漢天に顰蹙びき秋霜を紅葉焼く頃、再遊を企つべと素通りしたり。夏厩村より春雨冥々斜に征衣を濕ほしてしる。

春雨や足曳きながら九折り

眠 坊

と旅情雨に添へて哀れ轉た深し、尙進むに炊烟漸く繁く、田畑や、開けて掌大の稻圃麥隴の山腹に

參差さるを見たり、此地方樹林も寄りて木鬱葱し、村民石灰を焼くもれ多し。川上川を渡りて四日町に休憩し、高山一里弱を過りて俄然勃躍たる元氣を挽回せ、旅装繕ひて勇みゆきぬ、須臾ありて茜さす夕陽乘鞍岳の雪巔を焼け、光彩燦然として壯觀極りなし

雪ふが山夕焼き春日かな

播 水

夕鴉聒に急ぎて暮色峯麓より至り、蒼然亞壁をつゝみ樓門を罩むるの頃、照蓮寺の晚鐘を數へ盡して歩武堂々高山町に入る、旅亭谷田屋に投ずれば時は正に六時四十分、行程十二里。金澤を出で、より茲は四十八里餘坊等が春期旅行の三分の一を終るぬ。(未完)

總持寺乃一夜

豐 泉 生

俗世れ紅塵を避けて心所れ妙理を研め、煩惱の苦を轉じて涅槃の悟を開き、一介凡夫れ身を以て古聖佛哲に親炙す、人世清雅なる事多しと雖も豈よ之より清に之より雅なる者あらむや、而も之等清雅の趣を帯びたる一百有餘の風流兒が如何に能奥の幽境に煌々たる燈光を放ちて日本海裏に照臨し居るやを見れば誰れ又其意外なる事驚かさむや、嚮きに豊泉子春季の休暇に際し親しく能奥の山水を放浪し、或は宏妙壯絶なる外浦の大觀を賞し、或は時國大谷ありに名族の后裔を尋訪て其遺物逸話に懐古の涙を濺ぎ、或は巨浪岩を嚙んで呷呀洶々たる三崎の社に義經が愛したる蟬折の古笛を拜して卿が當年流滴の慘状を懐ひ、風を觀じ俗を探り身心浩漾の氣を養ひしもれ誠に少なからざりしやと、而るも最も興味ある又最も感動すべし事物に接したるは其れ總持寺の一夜か、寺は能州羽咋郡門前村あり、道下村を踰れば既に鬱蒼たる緑樹の邊參差せる古木の裏、高宇大堂の巍乎たるを觀るべし、我等吞氣連の一行が同寺に羈旅の草鞋を解き、實に三月卅一日午後十時の頃ありき、村既に門前を以て名とせし其名山とるや知るべく幾多精舎の間を過ぎて、幽邃なる切石道を行き、敕使門内一步を入つて、七堂伽藍の歸然たるを見、境内の清麗耽々たるを見て、又既に別天地に入りたるが如き心地やせん、若夫幾多の寶物佳什や、珍殿や、佛堂や、祖堂や、焔

鏘爛目を驚かすの室や、高僧大徳の遺墨を、又坐禪の快味を聞き僧が生涯の澹泊なるを聞きては誰れか禪房一夜雲水の身たらんとを思ふや、余等一行が無量の感慨を以て其由を告げ以て一夜當山に禪味の如何なる者なるやを窺ひ、又僧が境涯の如何なる者あるやを知らんこせしもの、誠に之に外ならざるなり。生等の懇望は快く聞き届けられ直ちに客殿に導かれ、既に光榮とする處、況して二人の青僧が給侍にて、よし精進料理と云ふ黒碗朱膳に數多き御馳走を饗せられたるの時、於ては誰れ其厚遇に感せざらんや、處は是清淨の境、侍れる者之れ世を捨てたる圓頂黒衣の清漢、而して吾等是れ垢面蓬髮の俗兒、如何ぞ衷心幾分の忸怩なる者なりとんや、況んや今生等が披く處の畫餽は、是れ一行の面々が今晨非常の苦心と經營を以て「アツア」したる不淨の飯なるに於てや、則ち直ちに沐浴齋戒、日來れ俗氣を洗ひ不淨の垢を掃めて歸り、茲に初れて自身の清淨なるを覺ゆ暫くして一僧來り曰ぬ只今祖堂に於て讀經あり、參り玉はずや、と則ち入て詣り、到つて先づ驚くは彼等禪僧が履物の脱ぎ方を整頓せるにあり、事些細に屬すと雖も、少事と最も人れ真心の表はる者、彼等が用意の綿密なる想見するに堪はたり、只見る大小七十有餘の緇徒各々拜伏三揖し、終れば一人朱衣れ高僧導師とありて導經一遍、他之に和し、舒々佛前を徘徊し遑々として徐行す、而るも井然序あり、禮あり、或は坐し或は立ち、其儀式の高嚴ある、當山に於て初めて見得べき所の者ならんか

常かば夜れ六時より九時迄坐禪に就くべき規定なるも、本日ハ幸か不幸か僅り月に一回乃大夜參として坐禪を休むれ日なりしに、三人の青僧、生等の許し來り、談論大興に入りしこそ面白けれ、今彼等を物に譬へんや、尙地下三千丈に潜めるの筈など、青小僧あり、而かも其論ずる處、高雅又珍奇、身心脱落の理を説きて、身外心ありて心外又身あるの所以を辨り、業法相續、因果應報、れ妙を論じては人禽虫魚の相異せる深因を語り、心所の如何に及びては、一切是空を説き、心有るあらず又無にあらず、只其中なるを言ひ説き去り辨じ來りて、三寸の舌鋒を翻弄し竭くす、余等只誰々茫然たるあるを、蓋し彼等今論辨する處の事固より卑近なる阿巖の理あるべきも、初れて禪なる燈明を生等が暗黒なる腦裏に點せし事なれば、如何に禪理の深遠にして佛經の高尙なるを思

ハハ然しと要するに、坐禪の要義は心所を探るゝあり、心所を措て禪ある者なや、禪を他にして心所かる者なし、若天自身心を混淆し、生死に執着するが如死ハ最も彼等の擇ばざる所、從て其趣や高妙其理や幽遠口以て語るべからず、只心以て心に傳ふべし、と、宜あり、彼等が緇衣粗糲多年の難業苦行を、只、一心所研めに用ゆるや、一人問ふ、坐禪の法如何、彼曰く、云々、然らば坐禪の際ハ腦裏の變化如何、と、彼曰ふ、初の程は、凡百れ迷心妄想頻りに到り、忽ちにして仙となり、俗となり、迷の凡夫とされば、又忽に開悟の佛哲となり、心驪々乎として五里霧中ハ彷徨と、而も之等の妄想は、之を排し、之を除た、絶ち去り斷じ來りて、茲に初めて煌耀たる光明を認め得べし、と、今試に最も初歩にして、又卑近なる坐禪問題二三を掲ぐれば

- 一、隻手聲あるや否や
- 二、小雀が石の鳥井を踏みをつた
- 三、一士將ハ虎を射らんとそ一人問ふて曰く卿ハ彼の虎を生ず積りか將た殺す積りなるやと武士只箭を以て弓を三敲して默笑す何乃故や
- 四、一僧胡麻を量る折節他僧問ふて曰く佛何れにあるや僧答て曰く佛之にありと胡麻三粒を示す其意如何

何ぞ其問の奇幻にして怪妙あるや、初歩尙斯の如し、其奥義ハ至極ては到底吾輩凡人の量り得ざる所あるべし、一人曰ふ、小雀如何に魔力あるも焉ぞ石の鳥居を踏み折るを得んや、と、後曰く、未だ一々々、弊僧竊に之が正當の解と卿等に告げん、踏みをつたと云ふは、踏み折つゝハあらずして、踏み居つゝをれ意あり、と、聞かば卿等は定めし其問の馬鹿ハ一に驚き玉ふあるべし、然れども此馬鹿らしき所ハ是禪の最も趣味ある所以にして、凡夫の最も迷ひ易き所たり、蓋し己が心に迷われハある程、正をも邪に考へ理も非となるべし、爲ハ只踏み居つたと云ふ極先て分り易き道理も、迷の爲ハ深く考ふるに至る云々、と、洵に然り、而て是等の問ハ、毎朝毎夕坐禪の間ハ考へ、右より左より、裏より、表より、反復討議して、やがて一定の考を得ざる時に之所謂獨參なる者をあして、一山の大徳高僧ハ參ト、以て己が考の良否を承はるなり、と、而して此時やヨシ其言の天地の至理を

盡くし、自然の妙を穿つゝ雖も、禪師中々ハ然諾を云々せず、反て謂ふ汝此火鉢と對話して見ずや、或は此炭の中ハ隠れて見よ、等、殆ど狂ハあらざるや、と、疑ふ程の奇問を發して、其心を驗めず、と、斯る間に夜は漸く更けて、満山幽靜只生等が論議の聲益々高ふして、時に野犬の遠吠するゝのみ、則ち明朝を約して本山殿裏桐紋揃に夜具に一夜夢を結びぬ』

因に謂ふ本山は、大凡そ今を去る五百年以前に創立にり、現住の禪師は信州の人、齡既に古稀を踰へ、禪宗中又多く得易のらざる老衲智識ありと、先年越前永平寺と長く本山に争をあり、遂に兩山交互管長とること、なりて落着し、爾來尙東都ハ滞留せられ、本年四五月の候歸山乃筈なりと云へば今頃之既に歸錫の途ハ就き居らるゝことならん、大禪師の次を監院と云ひ次なるを悟道と云ひ共に一門の異器を以て之ハ充つるなりと、而も各々部屬あり、司領定まりて、其監督ハ嚴ある法規の明らかなる、實に豫想の外ありと、一山の和尙雲水を合せて、其數凡て百有六人ありと、四月一日、曉々たる一連の警鈴全寺に渡りて、仙夢茲ハ破れ、續て起る鐘鼓の聲、嗶々又嘈々、時實ハ午前ハ二時半、吁下界は尙夜更半宵なるハ此靈山に之早や夜の明けたるか、蹶起戸を排せば星光燦然として寒山を射り、冷風颯然として、霜氣心に迫る、暫くして一僧來りて坐禪の定刻來れるを報ず、匆遑顔を洗はんとせば、手水氷でて憂々ハ聲あり、一同悚然として震ふ、然れども之亦坐禪する神聖の席ハ就く頂門の一針ありと觀念せば、又左程の事もかり死、則ち外套を着けて以て黒衣ハ換へ、手には客侍の角燈を提げて足には素藁の靴を穿ち、以て廻廊長廊の間を從ひ行きし時は眞に淨土往生ハ旅途にあるハ非ずやとの疑惑起り程ありき、既よりして坐禪堂に至れば衆僧已ハあり、悉皆壁に面して坐禪し、菩薩何者ぞ、達魔何者ぞと言はんばありの風体にて、頻りに心所の穿索ハ餘念なき者の如し、余等亦其中央に席を興へられ均しく坐禪乃席ハ上りぬ、流石の廣堂も問として聲なく、一縷の暗燈明滅せんとして風ハ吹くに任せ、只時に咳嗽の聲を聞くのみ、知らず、滿堂幾十の頭腦來往する所の幻影をも何ぞ、果せる哉妄想間もなくして考れ緒を探らんにも由なく、茫然醉へるが如く、恍然夢の如死一刹那、忽ち聞ハ齧棒の聲初め少くして三、大にして二、竊に窺へば二人の監僧三尺許の笏様ハ棒を捧げ、徐歩嚴然、鸞眼鷹視、終始堂内を巡視し、眠れるあふば則ち

之にて鞭ずるあり、小ある三つと之を覺ますあり、大ある二つと之を懲らすあり、其痛き思ふべきなり、等、無用の同情は更に一僧の説教の聲にとりて破られり、其語調を以て考ふれば彼は慥に監院あるべし、今晨は殊に生等の爲に臨講したる者かむむ、徐ろに口を開て言ふ、生死の間に執着せず、心處を解くは之れ坐禪の樞機あり、人一さび此事を外まず、例令坤輿に至理を窮究、萬有の微妙を穿ち博士鴻學と呼べる、と雖も、亦何の要か之有らん、昔時楠公の將小湊川に戦死せんとせられし曉、獨り佛日の元禪師に參りて曰く、生死交坐の時奈何と、禪師答て曰く兩頭共裁斷、寶劍懸空凄、と蓋ま此戰時火急の際お於て尙生死の事に執着するが如きはそも何事ぞ、と大喝せられたるあり、茲に於て楠公頓ち悟了し、遂に夫の忠と夫の死とを全くせりと、或は諷するが如く、規するが如く、切々徳々毫も餘蘊なし、生等感激竊に高德と慕仰せんとすれば既又杳として其影なき、既まして沉々たる鐘聲堂の内外に響く之れ坐禪の時終りたるを報するなり、守此靈坐一の纏りたる考も得ざるに早や之を退かざるべからざるか、沈思して既往一時間の事に及ぶも茫乎として眞は夢れ如きのみ、則ち轉じて釋迦堂に到れば、衆僧悉く庭土れ上り佇上りて、讀經せるを觀ては生等思はず稽首す、况や奉供の事、禮を盡すに於てをや、其響や激々其音や琅々、滿山の冥闇寂寞を破りて釋尊の大徳を感謝するもの、如し、嗚世俗の花に酔ひ風に迷ぬて、不淨の勞夢猶酣なるの時あるま、此境より大慈大悲の燈光熾に耀々たるを見れば、例令身の方筵破席の上に坐す一俗兒と雖も心は已ま眞如淨土に安心の蓮臺お駕し居るれ思しぬ、更お轉じて、祖堂不到れば、茲にも亦一時間餘りの讀經あり、一僧苦鞭を捧げて眠者を警懲する坐禪の時又異ならず、若夫七十人乃僧が悉く大磐若、百卷を轉讀せよ時れ如き、颺々颺々、恰も蝴蝶群闘して、龍車空を翻るの感ありき、讀經終れば、問答あり(問答一月一日と十五日との二回あるのみ)監院禪師お代りて中央に位置と占先、數多の和尚小僧は之を圍んで交互に監院の前を參じ、以て日來の疑義を問ぬなり、問答凡て漢語を用之『願くは大禪師の高教を煩はさん』仰て大禪師の尊答を謝し奉る』等の起結を以て、或は無情の理を問ぬれば生死の時を尋ぬるあり徳を以てするれば禮を以てするあり、卑近の問あまれば至妙の答あり、大喝せらるゝあれば亦善哉々々と叫べるゝあり、了々發矢と放さるゝ、彈丸も、皆鏗

鏘の聲を以て反跳し來る、七十の僧侶如何は頑かりと雖も焉んぞ高問難題の來る勿らんや、而も監院の之に答ふる明快、寸言能く其理を盡くし、毫も遲疑とるなく、亂麻の如く紛亂せる間も、監院の利刀に觸れては、裁斷せられざるなく、余筆只呵然として監院の大徳博識あるお驚きのみ、斯る間に夜も明けたれば一度結束して再び俗塵の衢に清淨の身心を投じぬ
 乎清淨れ流に汲んで、仙佛の妙境に肅然、面壁十年未だ嘗て俗界に足を投したる事もなく、禪堂に入りては苦鞭の痛きを忍び、出で、洒掃灑庭の事に身を勞し、粗食緇衣、朝の二時の早死に起されて夜は十時の遅きお臥し、勉學おせざるべからず、薪濯の勞も自らせざるべからず、難業苦行の極を嘗むる者にあらずして何ぞ、吾曹思ふて茲に到る、一片同情の涙を濺がざらんを欲するも能はざるかり、嗟乎斯る生涯を送る禪宗僧も之れ佛徒なり肉を食へ色を漁し混々たる世俗の群に伍して利是射んとする不淨れ僧も之佛徒なり、均しく僧にして清淨彼が如く醜穢是が如く窃に怪む天誅尙未だ之等不淨の僧頭に下らざるを喝』



投書心得

- 一 投書は本會原稿用紙に限り御認めありたし
- 一 長文と雖も全文を寄贈せざれば掲載せざ
- 一 雜誌上より雅號のみを記載することを許せども姓名を必ず編輯委員まで御報道あるべし
- 一 學理上の論說諸小會の記事雅文詩歌等續々寄投ありしと勿論言の或は政治を論じ或は徳義に背くもの一切掲載致さざるべし

明治三十年六月十六日印刷
全 年六月十七日發行

編輯兼發行者

内 藤 昌 太 郎

印刷者

月 岡 眞 備

發行所

第四高等學校北辰會

印刷所

活版合資會社

金澤市高岡町三十四番地

金澤市上松原町紙屋小路一番地源圃方

金澤市野田寺町五丁目卅二番地今川昌治方

